

平成18年度 長期研修研究報告

得意技を身に付け「一本」を目指し
柔道の特性を味わう学習
～ 互いを尊重し、教え合いを通して学ぶ授業～



神奈川県立体育センター
長期研修員
山北町立山北中学校 佐藤 康二

目 次

研究を進めるにあたって

1	研究主題	1
2	主題設定の理由	1
3	研究の仮説	2
4	研究の内容と方法	2
5	研究の構想図	3

理論の研究

1	学習指導要領が示す学校教育の方向	4
2	生涯を通じて運動に親しむ資質や能力	4
3	我が国固有の文化としての柔道の歴史と学校体育における柔道の歴史	5
4	柔道の学習について	6
5	学習形態	11
6	学習資料	12

検証授業

1	検証の視点	14
2	検証の方法	14
3	学習指導計画	15
4	学習について	20
5	授業の実際	22
6	検証授業の結果と考察	36
7	検証授業を振り返って	61

研究のまとめ

1	研究の成果と課題	64
2	今後の展望	70

<引用・参考文献>

研究を進めるにあたって

1 研究主題

得意技を身に付け「一本」を目指し

柔道の特性を味わう学習

～互いを尊重し、教え合いを通して学ぶ授業～

2 主題設定の理由

近年、子どもたちを取り巻く環境も変わり、生活習慣や遊びが変化することによって、人間関係が希薄になり、いじめや不登校の問題が深刻化している。¹⁾また、情報化社会が進行し、携帯電話など、メディアを通してのコミュニケーションが主流になり、人間関係の希薄化に拍車をかけている。このような社会に育つ子どもたちの中には、大人になってもよりよい人間関係を構築できない者もいる。また、相手の気持ちを理解できず、「自分さえ良ければよい」など短絡的な行動をする子どもも増えてきている。

現行の学習指導要領では、子どもの課題に対して、学校教育のあり方として、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を基本とし、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」「自ら学び、自ら考える力を育成すること」「基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること」「各学校が創意工夫を生かし、特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること」の4つをねらいの柱としている。¹⁾

本校では、過去に文部省の武道推進校の指定を受けたこともあり、特色ある教育の1つとして、武道領域を積極的に行っている。本村は、豊かな人間性を育む保健体育科の取り組みとして「武道では、直接的に相手を制することから、相手を尊重する態度が求められるし、『礼』に代表されるように我が国固有の文化としての伝統的な行動の仕方を学ぶことができる。」と提唱している。²⁾本校3年生に行った保健体育科実態調査によると、柔道の学習は、「友達と協力して練習し、技ができるようになって楽しい」さらに、「できるようになった技を使って攻防し、試合などで『一本』を取って勝つと楽しい」と感じている。また、礼儀正しいスポーツと捉えている生徒も少なくない。その反面、「難しく、技がうまくできないからつまらない」「投げられると痛い」と感じている生徒もいる。

このようなことから、まず、個に応じた得意技を身に付けさせること、さらに、生徒が身に付けた得意技を「一本」が取れる技にまで意欲的に高めようとする授業を展開することにより、柔道の特性を味わわせることができると考えた。また、とかく一斉指導による習練になりがちな武道の学習において、生徒相互の教え合いや関わり合いを重視し、自らを律しつつ、互いを尊重する態度を育んでいくことにより、互いに切磋琢磨しながら習熟完成していく喜びを味わい、さらには、生涯にわたり仲間と関わり合いながらスポーツに親しもうとする資質や能力も育めるものと考えた。

具体的には、自ら課題を発見し解決していくための学習資料やITを活用した支援教材などの教具の活用、学習のねらいや道すじがきちんと理解できるような学習ノート・カードの活用、同じ課題や技の系統を考慮し協力して学習できるようなグループ編成、約束練習や自由練習を工夫することにより、教え合いや関わり合いが促進され、技を極めていこうとする意欲、すなわち本研究における「一本」を目指す学習意欲が高まると考えた。そして、練習の質や頻度が高まるとともに、仲間への思いやりや感謝の気持ちが自ずと育まれながら、最終的に柔道の特性を味わうことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

3 研究の仮説

主題設定の理由に基づいて、本研究の仮説を次のように設定した。

- 仮説 -

教材・教具、学習資料や互いのアドバイスを基に、自らの課題や課題解決の方法を考え、互いに教え合いを通して「一本」を目指して学習することによって、互いを尊重し合い、効果的に得意技を身に付け相手との攻防を楽しむ練習や試合ができるようになる。

4 研究の内容と方法

(1) 本研究を進めるにあたって、理論的裏付けを文献・資料を基に行う

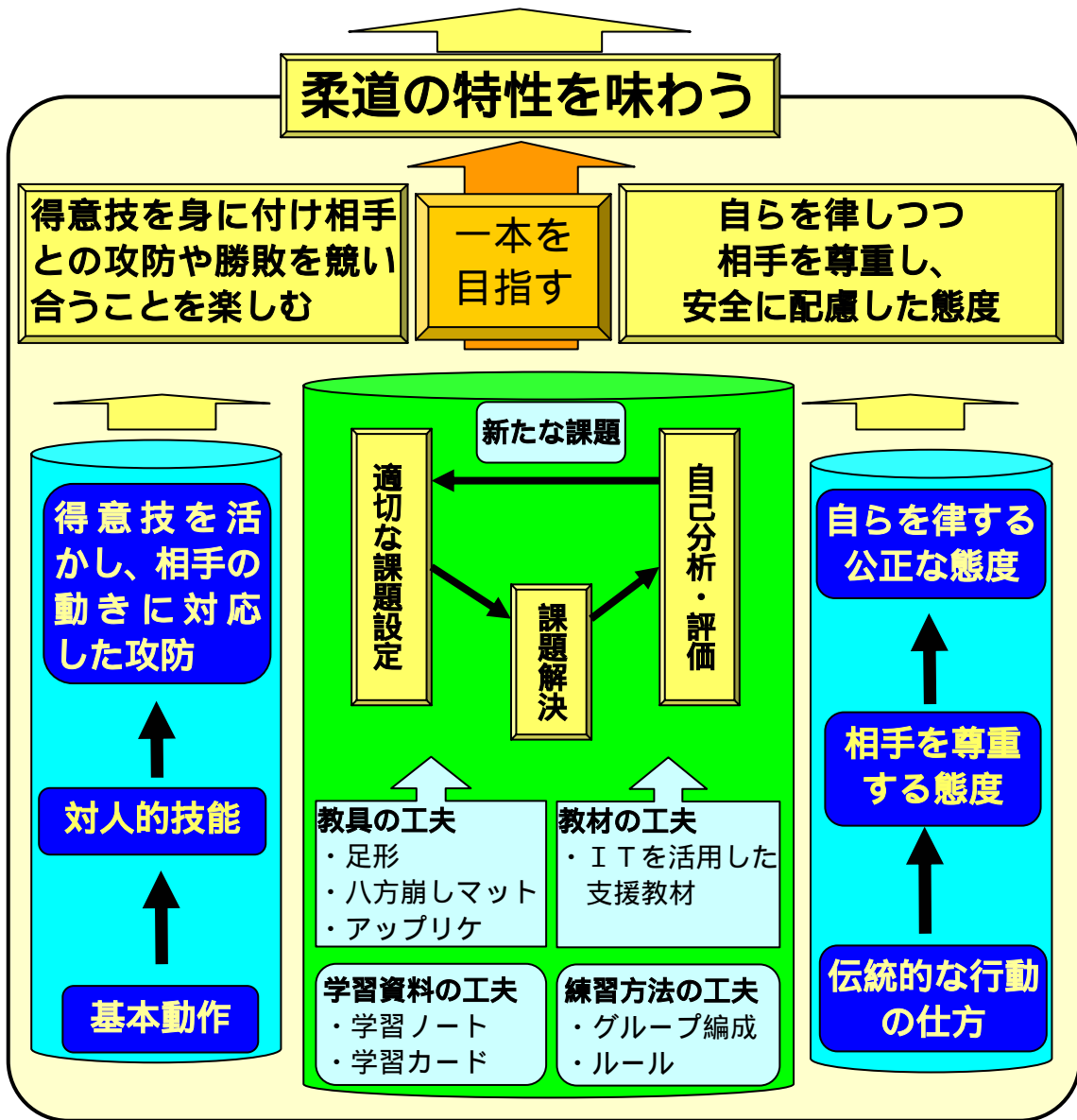
- ア 学習指導要領が示す学校教育の方向
 - (ア) 保健体育科に求められるもの
- イ 生涯を通じて運動に親しむ資質や能力
- ウ 我が国固有の文化としての柔道の歴史と学校体育における柔道の歴史
 - (ア) 柔道の起源と現状
 - (イ) 学校体育における柔道の歴史
- エ 柔道の学習について
 - (ア) 学習指導要領による柔道の扱い
 - (イ) 柔道の特性
 - (ウ) 技能と態度の関連性
 - (エ) 安全について
 - (オ) 勝敗規定について
- オ 学習形態
 - (ア) 異質グループと等質グループについて
 - (イ) 関わり合い・教え合う学習の重要性
- カ 学習資料
 - (ア) 学習ノート・カードの有効性
 - (イ) 視聴覚機器の有効性

(2) 理論研究を基に学習計画を立て実践研究を行い、仮説の有効性を検証する

- ア 単元学習指導計画立案
- イ 実態調査
- ウ 授業実践
- エ 結果の分析（検証の視点と手がかり）

(3) 以上の理論研究と実践研究を基に研究のまとめを行う

生涯を通じて運動に親しむ資質や能力



山北中学校第3学年の実態（保健体育科実態調査・事前アンケート結果より）

- ・保健体育の授業が好きな生徒は多いが、武道領域は、他の領域に比べて苦手な生徒が多い。
- ・技の構造の理解度が29.2%であり、基礎・基本の定着ができていない生徒もいる。
- ・課題を立てて授業に臨んでいる生徒は、62.5%であり、課題学習ができない生徒が多い。
- ・友人関係などが希薄で、相手のことをよく考えて行動することができない生徒が数名いる。
- ・技を身に付けて試合や練習で「一本」が取れるようになると楽しいと感じる生徒が多い。

理論の研究

1 学習指導要領が示す学校教育の方向

(1) 保健体育科に求められるもの

ア 自ら学び自ら考える力を育む課題を解決する学習

「生きる力」の1つ目の柱の「自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力」を身に付けるために、中学校及び高等学校では、従前の教師主導の一斉指導だけでなく生徒の能力や適正にあわせた個に応じた課題を解決する学習が有効であるとされている。これは、生徒が自分で問題を解決しながら、運動の楽しみ方を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができる資質や能力の育成を目指している。²⁾ 教師は、そのための基礎・基本の確実な定着や生徒が自己の運動課題を自ら解決できるように援助するなどの指導の充実を図ることによって、自ら学び自ら考える力が身に付けることができるようにすることが求められる。

イ 豊かな人間性を育む取り組み

「生きる力」の2つ目の柱の「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」の育成においては、保健体育科の果たす役割が大きい。体育の授業は、基本的に相手があってはじめて成立するものであり、身体活動が伴い安全配慮が求められる。このことから自他の関係を学ぶことができる。また、武道においては、直接的に相手を投げたり抑えたりすることから、相手を尊重する態度が求められる。また、礼儀作法などの我が国固有の文化としての伝統的な行動の仕方を学ぶことができる。このように保健体育科の学習を通して豊かな人間性を学ぶ機会が多い。²⁾

ウ たくましく生きるための健康や体力を育む取り組み

「生きる力」の3つ目の柱の「たくましく生きるための健康や体力」の向上については、まさに保健体育科が果たすものである。各領域の運動を機能的特性から楽しさや喜びを味わいながら生涯スポーツの基盤を作る中でその結果として体力がついていく。また、体力を高める運動などの直接的に体力の向上を目指した運動を行っている。²⁾

以上のように、「生きる力」を育むために保健体育科が果たす役割はとても大きい。保健体育科の役割は「たくましく生きるための健康や体力」だけを担えばよいと考えがちであるが、3つの柱を関連付けながら取り組んでいかなければならない。このように、知育・徳育・体育のバランスの取れた人間の形成に保健体育科は、大きな役割を果たしていかなければならない。また、小学校、中学校、高等学校と一貫して積み上げを行っていくことが大切である。²⁾

2 生涯を通じて運動に親しむ資質や能力⁸⁾

これまで、技能の向上が生涯にわたってスポーツに親しむことができるといわれてきた。このことを否定するものではないが、全ての生徒に一律に技能の向上を求めても難しい。人にはそれぞれ能力と適正がある。自己の能力と適性などに応じて運動を選び運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにすることが大切である。運動に親しむことのできる資質や能力とは、次のように示すことができる。

運動への関心や自ら運動をする意欲
仲間と仲良く運動をすること
運動の楽しさや喜びを味わえるよう練習の仕方や試合などの仕方を工夫する力
運動の技能
運動の知識・理解

運動に親しむことのできる資質や能力をただ単に技能とは捉えていない。むしろ、運動への関心や意欲という、いわば情意領域を重要な要素と捉えている。また、運動の楽しさや喜びは、仲間とともに頑張った時に得られたり、自分なりに課題を解決して技能が高まったりした時に味わうことができる。その技能も教師の適時・適切な指導・援助の基、さまざまに練習や試合などの仕方を工夫して得られたとすれば、その喜びは一層大きいものがある。運動についての知識・理解も重要である。これらは有機的に関連し合うものであって、運動に親しむことので

きる資質や能力としている。

運動に親しむことのできる資質や能力を育てるためには、教師は、どのような技能をどのような方法で身に付けていけばよいか、生徒が自分なりの課題を見付け、解決していくことができるような学習過程を工夫することである。また、仲間と協力して学習できる工夫も必要である。教師主導ではこのような資質や能力を身に付けさせることは難しいし、自ら運動をする意欲を引き出すことや運動の課題を解決する力を養うことは難しいといわざるを得ない。基礎的・基本的な内容については教えるべき内容として繰り返し指導するなどその徹底を図るとともに、生徒一人ひとりが自己の課題を解決できるよう認め、励ましていくことが求められる。

3 我が国固有の文化としての柔道の歴史と学校体育における柔道の歴史

(1) 柔道の起源と現状

柔道の前身は柔術であり、その起源は、遠く奈良時代に遡り、「日本書紀」にその記述を見ることができる。⁸⁾柔術は、鎌倉時代から江戸時代にかけて武士の「鎧組討」(よろいくみうち)として発展した。その目的は殺傷の技術であり、いくつかの流派を有していた。明治時代に入り、嘉納治五郎が、「天神真楊流」と「起倒流」に柔術を学び、それぞれの修行過程を通して、柔術が殺傷を目的とした組討だけでなく、工夫次第では、人間形成の手段として、立派な教育の手段となると考え、研究を重ね、明治 15 年 5 月日本伝講道館柔道を創設した。⁸⁾嘉納は、武道の中に、武術的側面を残しながら、体育、修心の機能をもち合わせる教育の手段とし、講道館柔道の精神として、「精力善用」「相助相譲自他共栄」を提唱した。嘉納は、「無駄な衝突は避け、譲り合いをせよ。譲ることによる多少の後退の方が、衝突による精力消費よりもはるかに有効である。ここから譲り合い、助け合う道の思想が導かれ、その目的は『双方の繁栄のため』となる。譲り合い、助け合い、双方が繁栄する道。これが社会生活の存続発展のための原理である。そして、これこそが善である。」⁴⁾と定義し、この善を実現するための道が柔道であり、これを換言すれば、精力善用活用相助相譲自他共栄であると説いている。⁴⁾その後、学校体育に取り入れられ現在の学校体育柔道がある。また、柔道は、昭和 39 年の東京オリンピックより正式種目となり、2005 年には 188 カ国が国際柔道連盟に加盟している。

(2) 学校体育における柔道の歴史^{4) 8)}

学校教育に柔道が取り入れられたのは、明治 16 年嘉納治五郎が教師をしていた学習院であり、明治 20 年に海軍兵学校に柔道科が設置され、慶応大、東京大でも講道館柔道がはじめられ、表 2 - 1 に示した段階を経て今日に至る。

表 2 - 1 学校体育における柔道の取り扱いの変容

明治 44 年	剣道・柔道が中等学校の正科の時間に加えることができるようになった。
昭和 6 年	柔・剣道が中学、師範学校に必修科として採用された。
第二次世界大戦終了	学校における柔道は、教科・課外での実施は全て禁止になった。
昭和 25 年	学校体育教材としての柔道の復活が認められた。
昭和 26 年	中学校高等学校学習指導要領において柔道は選択教材として復活を果たした。
昭和 35 年	高等学校学習指導要領の改訂においては、選択必修になり、格技領域として他の種目と同様の考え方で取り入れられた。
平成元年	中学校、高等学校学習指導要領の改訂では、「格技」を「武道」に改め、女子も履修が可能となった。
平成 10 年	指導要領の改訂では、「武道」については、「我が国固有の文化に触れるための学習が引き続き行われるようにする」 ¹⁾ とされた。

指導要領の改訂において「格技」から「武道」に改めたことについては、我が国固有の文化としての武道の価値が、教育に有効であると再認識されたためである。

4 柔道の学習について

(1) 学習指導要領による柔道の扱い

平成10年の学習指導要領改訂では、保健体育科の改善の基本方針の中に「武道については、我が国固有の文化に触れるための学習が引き続き行われるようにする」¹⁾と位置付けている。また、各分野の目標及び内容の部分において武道は、「武技、武術から発生した我が国固有の文化として伝統的な行動の仕方が重視され、礼儀作法を尊重して練習や試合ができることを重視する運動とし、相手に対して、攻防する技を習得した喜びや勝敗を競い合う楽しさを味わいながら、武道に対する伝統的な考え方を理解し、それに基づく行動の仕方を身に付ける」として、技能、態度、学び方について次のように示している。¹⁾

ア 技能の内容¹⁾

自己の能力に適した課題をもって次の運動を行い、その技能を身に付け相手の動きに対応した攻防を展開して練習や試合ができるようにする。

(ア) 基本動作(例示)

・姿勢と組み方・進退動作・崩しと体さばき・受け身

これらは、対人的技能と結び付いている動作であるので、相手との攻防の際にも正しくできるよう対人的技能と一体的に取り扱う。特に、「受け身」については、投げられた際に安全に身を処するための基本動作であるので、投げ技との関連から取り扱うようにする。

(イ) 対人的技能(例示)

a 投げ技

<手技>・体落とし・背負い投げ

<腰技>・大腰・釣り込み腰・払い腰

<足技>・膝車・支え釣り込み足・大外刈り・大内刈り・小内刈り

b 固め技

・けさ固め・横四方固め・上四方固め

c 技の連絡変化

・投げ技の連絡・固め技の連絡・投げ技から固め技への連絡

これらの技を学習するにあたっては、自己の体力などに応じて身に付けやすい技を選び、その技を中心に約束練習などを行うようにする。なお、固め技では、中学校では、抑え技のみを扱うことが適切である。

(ウ) 試合

試合は、これまでに身に付けた技能を生かしながら、相手の動きや技に応じた攻防を工夫して行う。単に勝つポイントをあげるだけでなく、安全で確実な技が発揮できるようにする。また、審判については、ルールを理解とともに、実際の試合に応じて安全に運営できるようにすることが望ましい。

イ 態度の内容¹⁾

伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重し、練習や試合ができるようにするとともに、勝敗に対して公正な態度が取れるようにする。また、禁じ技を用いないなど安全に留意して練習や試合ができるようにする。

さらに、技の習得などを通して人間として望ましい自己の形成を重視するという武道の伝統的な考え方を理解し、それに基づく行動の仕方や相手を尊重する態度の育成が重要であるとし、次の3つの留意点をあげている。

(ア) 自分で自分を律する「克己」の心を養うとともに、相手を尊重する態度で練習や試合ができるようにする。

(イ) 礼儀作法は、単に形のまねに終わるのではなく、「克己」の結果としての心を表すものとして、また、相手を尊重する方法としてこれを行うようにする。

(ウ) 勝敗に対して公正な態度が取れるようにする。

他の7つの運動領域の態度の内容については、留意する点があげられていないが、武道については、あえて留意点があげられている。つまり、嘉納治五郎が柔道の目的として掲げ

た「人間の形成」が今まさにその重要性が再認識され、態度と行動の仕方として学習していかねばならないとされていると考える。

ウ 学び方の内容¹⁾

自己の能力に適した技を習得するための練習の仕方や試合の仕方を工夫することができるようにする。

武道は、領域として中学校ではじめて示される内容であることから、運動の特性を十分に理解できるようにする必要がある。運動の学び方は、自己の能力に応じて柔道の技能を高めるなどのために、運動に親しむ資質や能力を高めるために重要な学習内容であり、自ら学び自ら考える力を身に付け、運動の楽しさや喜びを味わうことにある。⁸⁾ また、学び方を学習することが、「生きる力」を育み、生涯スポーツの面からも重要視される。柔道の学び方をまとめると表2-2のようになる。⁸⁾

表2-2 柔道の学び方

自己の能力などに適した目標を設定する。
 目標を達成する上で自分の課題を把握する。
 課題を解決するための練習内容を定める。
 合理的な練習計画を立てる。
 自主的・主体的に実践する。
 自由練習や試合などの実践（学習活動）を通じて適時に自己・相互評価し、その成果を確認する。
 新たな課題を把握する、または課題を見直す、といった一連の学習活動のことである。

これらを踏まえて生徒は自分の課題を解決するために、基本動作と対人的技能を関連付けながら、かかり練習、約束練習などを工夫したり、学習の進度に応じて自由練習や試合を工夫したりすることとなる。柔道においては、得意技を身に付けることが大きな課題になるため、そのためには、学習段階を踏まえて練習を工夫することが大切である。練習の段階は次のように行うとよい。

初期の段階	崩しと体さばきを正しく行い、ゆっくり行いながら着実な掛け方を身に付ける
中期の段階	「崩し、作り、掛け」という技の理合いに基づいて、力強さとスピードを高めていく 理合い・・・道筋
最終段階	連絡変化を工夫して得意技をしっかりと身に付ける

このようにそれぞれの段階に応じた学び方が重要となる。

また、自ら学び考える力を身に付ける課題学習に必要な課題解決力の内容は、「自ら学ぶ力」と「自ら考える力」の2つの要素、側面に分けることができる。「自ら学ぶ力」は、課題発見・選択力、課題追求・解決力、自己評価力であり、「自ら考える力」は、分析力、総合力、理論的思考力、推理力、判断力、直観力、想像力、創造力、応用力などが含まれる。「自ら学ぶ力」は、学習者が学習過程に主体的、能動的に関わっていく側面であり、その過程で学習者の内面から発動し、主体的な課題解決を支える役割をするのが自ら考える力である。²⁶⁾ 課題学習の授業の基本的な形態は、生徒自身と学習問題とが直接的に向き合い、その両者の関連、結び付きを強め、深め、生徒が自分で問題を解決していくように後押しするのが教師の役割であり、この教師の役割を「支援」もしくは「援助」と称している。教師は、生徒の学習に介入したり、支配したりすることを避け、必要に応じて学習の方向付けを助けたり、問題意識の形成を助けたり、さらに問題解決の過程での困難に対して支援していったりする必要がある。²⁵⁾

(2) 柔道の特性

ア 機能的特性^{7) 8) 11)}

柔道は、対人的な格闘技形式で勝敗を競う競争型のスポーツである。柔道の楽しさや魅力の中心は、相手を自分の思い通りの方向に崩し、自らの体勢を優位に保ちながら、合理

的なエネルギーを用いて相手を投げたり抑えたりして相手に勝つ過程や結果に関わっている。また、得意技を身に付け、習熟完成していく喜びや自由練習や簡易な試合を行うことによってその楽しさや喜びを味わうことができる。その反面、投げられることに恐怖心をもったり、投げられると痛いと思ったりすることから、消極的になる生徒も少なくない。したがって、安全に対応できる各種の「受け身」があることを理解させ、習得させる必要がある。そして、攻防の中で相手の痛みや体の重さ、温かさなども実感することも柔道の特性を理解させる要素となる。

イ 構造的特性^{7) 8) 11)}

柔道は、用具を使わずに、相手の姿勢や動きとの直接的な攻防の中で、いかに自分が安定した有利な体勢を作り、さらに、相手を力学的に最も不利な体勢に崩したりしながら、攻撃・防御の対人的技能を發揮していくかを中心に展開される。このことにより体格にあまり影響を受けずに相手を投げたり、抑えたりすることができるが、合理的な投げ技を行うためには、「崩し」「作り」「掛け」という技の理に合った動作の習得が必要である。それらの習熟に伴い具体的な「手技」「腰技」「足技」など技に系統性をもたせた対人的技能、さらにそれらが組み合わされた「技の連絡変化」がある。

また、「固め技」には、「抑え技」「絞め技」「関節技」があり、中学生段階では、安全の配慮より後二者は取り扱わない。「抑え技」では、抑え技の掛け方、逃げ方を基本動作とし、自分にとって少しでも有利な体勢になったりその体勢を維持したり、その状況で相手にとって少しでも有利な体勢になったり、その体勢を維持したりし、その状況で相手にとって最も不利な体勢になっていく部分を集中的に攻め、次第に全身を制していく。

ウ 効果的特性^{7) 8)}

柔道の投げ技、固め技には、必要とされる体力要素も多様である。直接的に相手と組むという攻防の中で、瞬発力、持久力、調整力、バランス感覚やタイミングも重要で、総合的に体力が高められる。

相手と直接接触し、投げたり押さえたりすることからいやおうなしに相手との人間関係が生まれ、相手を尊重する態度や礼儀、判断力、決断力、自制心、公正、ベストを尽くす態度などが培われ、望ましい社会生活の習慣や態度が養われる。そのためには、伝統的な行動の仕方を身に付ける必要がある。練習や試合などにおける激しい攻防の後、まだ、心理的な興奮が鎮まっていない時でも、正しい形で丁寧な礼を行うことにより、自己を制御するとともに相手を尊重する「自分で自分を律する克己の心」を身に付けることが大切である。さらに、安全でかつ公正な態度で練習や試合ができるようにし、練習場の清掃、安全確認、柔道衣の清潔、健康管理に配慮する態度も重視される。

(3) 技能と態度の関連性

学習指導要領では、柔道の学習において、技能の内容、態度の内容、学び方の内容で示されている。¹⁾しかし、その1つひとつは独立して学習するものではなく、技能の学習を通して、それぞれが関連しながら習得されるものである。柔道の技能を学ぶにあたってはそれぞれに意味があり、技を学習する過程そのものが相手を尊重する態度や自らを律する態度を育むのである。⁸⁾我が国固有の文化としての伝統的な行動の仕方を学ぶ場面を技能の学習過程と関連して考えると次のようになる。

ア 基本動作・礼法の学習

基本動作の受け身の学習においては、投げられた時の衝撃を吸収し身を守るということはもちろんであるが、投げられるのを前提とした学習であり、謙虚さを身に付けることができる。⁸⁾礼法の学習では、そのもの自体が伝統的な行動の仕方であり、その身体動作には意味がある。立ち方においては、右足から立ち上がるが、これは、武士が刀を左の脇にさすことからきている。このような立ち居振る舞いなどが、基本動作の学習・礼法の学習では学ぶことができる。

イ 対人的技能の学習

対人的技能の学習においては、直接的に相手と組んで投げたり抑えたりすることから、まさに相手を尊重する姿勢などの態度が重要となってくる。固め技の学習では、技を掛けた時に相手の上半身に衝撃を与えないようにかばい手をする。投げ技の学習では、相手が受け身を取れるように投げる。投げ終わった時に引き手を離さない、倒れない。受け手は

相手が投げやすいようにする。⁴⁾また、「礼に始まり礼に終わる」というように、授業のはじめと終わりの礼だけではなく、相手と相対する場面では、相手を尊重する礼が求められる。また、練習においては、禁じ技を用いない、危険な行動をしないなどの態度が重要となる。このような態度が対人的技能の学習で学ぶことができる。

ウ 試合

試合においては、まずは、試合における礼法など伝統的な行動の仕方の学習が重要となってくる。また、禁じ技を用いないことや、試合の結果を謙虚に受け止めることが大切である。勝敗に関係なく、服装を正し、呼吸を静め、自分を律して相手に礼をするなど公正な態度が求められる。また、試合場の安全や自他ともに安全に配慮することが必要である。このようなことが試合を通して学ぶことができる。

(4) 安全について²⁴⁾

柔道では、互いに相手の身体を制する技能を中心として行われるので、事故が生じやすい。したがって、事故が生じないような学習指導上の工夫が必要になる。柔道における傷害は、骨折・捻挫・挫傷・打撲などが多い。負傷の起こしやすい技としては、背負い投げ・体落とし・大外刈り・足払い・内股・固め技・巻き込み技などがあげられている。これらの事故は大部分投げられた者に多く、投げる者の技の未熟と投げられた者の受け身の未熟さが重なって生じている場合が多い。指導の留意点を整理すると表2-3のようになる。

表2-3 安全の留意点

指導前における留意点
生徒の健康状態を十分観察し、調査する。 爪を切ったり、身体を清潔にしたりしておく。 身体に合った柔道衣を着用する。 柔道場の安全を確かめる。畳の破損や、隙間の有無を確かめておく。
指導中の留意点
準備運動や受け身の練習を十分行わせる。特に受け身については、その未熟さによって事故が起こりやすいので、単独練習だけでなく、技の指導とも関連させた練習を繰り返して行わせることが必要である。 基本動作や対人的技能は分節的に練習させて、その要点を十分身に付けさせる。技の未熟さによって相手に事故を起こさせたり、自分が事故を起こしたりするので、基本動作が十分生かせるような対人的技能の練習が必要である。そのためには、「かかり練習」や「約束練習」による指導に重点をおく。「自由練習」は、技の掛け方や受け身に相当習熟した段階で無理なく行うようにする。 試合は十分な練習の後で行い、技を制限したり、ルールを緩和したり、生徒の能力に応じて行う。
練習後の留意点
身体を清潔にするとともに、怪我をしたら、ただちに手当てをしておく。

また、学校における柔道の授業において、畳の枚数が少ない場合、畳の周囲にマットを敷く程度で、マットを中心に練習することはほとんどないが、マットの上で技を掛ける場合には留意事項を指導しておく必要がある。マットの特色は、畳より柔らかく、すべりが悪いことである。柔らかい場合は、進退動作・体さばき、特に、すり足での進退動作が畳ほどなめらかにできなため、送り足払い・出足払い・小内刈りなどの足技が畳でのような効果をあげられないことが多い。体さばきの大きい技を得意とする者にとっても不利で、また、押して掛ける技より、引いて掛ける技の方が効果的である。柔らかいことは、それだけ足がめり込むことになるので、安定した姿勢の時はよいが、体勢のくずれている時など、足の移動が敏速にできないので、足首や膝の捻挫などを起こしやすい。そのようなことから、授業においては、無理な体勢で技を掛けないように指導したり、マットとマットの間に隙間ができないようにしたり、常に安全に配慮して活動できるようにする必要がある。²⁴⁾

(5) 勝敗規定について¹⁶⁾

ア 勝敗規定の推移

勝敗の決定が現在のように細分化されたのは戦後のことである。歴史的に見れば、柔道の普及、発展につれてその試合審判規定もしだいに整備されてきているのだが、勝負の判定については大正時代の終わりまでは、二本勝負で試合が行われていたし、それ以後も1951(昭和26)年の試合審判規定の改正までは一本勝ち以外は、引き分けしかなかった。この改正によって「技あり」がポイントとして採用されることになり、はじめて「一本」以外の勝ちが認められた。そして1975(昭和50)年の改正で「有効」が採用されたことによって技の認定はさらに細分化された。これは、スポーツが広く一般社会に受け入れられるようになり、国際的な競技スポーツとして発展したことによる。また、国内においても柔道をスポーツ化した方がなじみやすいといったことにも影響されている。しかし、これは柔道の本来の姿や精神を守ろうとする立場とは矛盾するものでもある。日本固有の運動文化としての柔道と、国際的な競技スポーツ種目としての柔道との間に葛藤が生じるわけである。確かに、ポイント制や、体重制を取り入れたことによって、柔道は国際的なスポーツとしての普遍性を得たのだが、そのことによって巧みな技で一本を取るシーンは少なくなり、ポイントを計算する細かい柔道が多くなったと、その弊害が指摘されてもいる。

イ 柔道試合審判規定と授業で目指す「一本」について

柔道試合審判規定によると、勝負の判定基準は表2-4の通りである。⁸⁾

表2-4 柔道勝負の判定基準

一本	投げ技	<ul style="list-style-type: none"> 技を掛けるか、相手の技をはずして、相当な勢い、あるいははずみで、だいたいあおむけに倒した時。 投げられた者が、意識的に頭と足で体を支え、背部を畳につけない場合でも、「一本」の条件を満たす時は「一本」と判定する。 	一方が「技あり」を二度取った時(あわせ技)
	固め技	<ul style="list-style-type: none"> 「参った」と発声するか、または手が足で、相手または自分の体、あるいは畳を2度以上打って合図した時。 抑込技では、「抑え込み」と宣言があつてから30秒間抑えた時。 絞技と関節技では、技の効果が十分あらわれた時。 	
技あり	投げ技	「一本」とは認めたいが、今少しで「一本」となるような技があつた時。	
	固め技	25秒以上抑え込んだ時。	
有効	投げ技	今少しで「技あり」となるような技があつた時。	
	固め技	20秒以上抑え込んだ時	

試合の中では、上記の判定基準を基にするが、今回の学習で目指す「一本」とは、単に勝敗を求めるためのものではなく、試合の場面以外の練習段階でも、生徒同士が、互いに相手を尊重しながら、教え合いを通して技を習得する際の目指す目標として捉え、「相手と呼吸を合わせてきれいに勢いよく投げることができる」を基本とし、さらには、得意技を身に付け、相手との攻防を楽しみながら、「相手に勝つ競争的なもの」「得意技を磨くという達成的なもの」の両面を踏まえ、「心」と「技」が一致した「一本」を目指したい。

5 学習形態

(1) 異質グループと等質グループについて⁵⁾

グループの分け方には、能力別グループといわれる、学習能力または運動能力別のいわゆる「等質グループ」の分け方と、いろいろな能力やその他の条件が雑多なものからなる、いわゆる「異質グループ」の分け方があるが、一般的には異質グループに分け、グループとグループの能力は、ほぼ均等になるように構成する場合が多い。体育の学習においても、一般的には異質グループを構成して指導する場合が多いが、種目や内容によっては、等質グループで指導する場合もある。

種目や内容によっては、一定の条件が整わなければ非能率的になることもある。等質グループで指導する場合は、学習内容がきちんと生徒たちに捉えられ、系統性を基に相互学習が可能なことなどの条件が必要である。いずれにしても、グループに分けて学習することによって、学級全体を同時に対象とする一斉指導に比較して、一層個性的な接近が行えることになり、学習能率を高めることが期待できるし、民主的な人間関係を形成することによって、学習に対する意欲を喚起できるし、集団の仲間関係や民主的人間関係が形成されることによって、学習内容の質が高められていく事実が、実践の中で確かめられている。最近では、異質グループによる学習を原則としながらも、運動の特性に基づき、学習の個別化を進めるための、学習者の課題に応じたグループ学習の方法も提示されている。⁷⁾

(2) 関わり合い・教え合う学習の重要性

近年、生徒の対人関係能力の不足が問題視されている。生徒の遊びが変容し、屋外において集団で遊ぶことから、1人でも遊べるテレビゲームへと移行してきた。仲間と群れて遊ぶことは対人関係能力を養う上で、重要な役割を果たしてきたのであるが、今の生徒たちにはそのような機会が減少し、いかにして対人関係能力を養うかが課題となっている。²⁷⁾ そのような中、生徒相互の関わり合いが不可欠である保健体育科の果たす役割は大きい。保健体育科では、スポーツが教材となるため、生徒は情意的に開放状態になりやすい。その中で、相互に教え合ったり、助け合ったりすることは、他者の心を共感的に汲み取り、相手の気持ちと通じ合えるコミュニケーション能力を育てていく上では大変意義深い。¹⁵⁾ また、岡本は、「仲間との豊かな関わり合いと運動技能には一定の相関関係があると考えられる。」¹⁵⁾ といっており、仲間との関わり合いが高い生徒は、運動技能も高くなるということである。

今日の体育の学習では、生徒の主体的学習の必要性が叫ばれ、教師主導の一斉型の指導ではなく、生徒たち自身が運動の価値を自ら見付けだし、自ら学べる学習が求められている。⁹⁾ しかしながら、生徒が自ら考え、主体的に活動するとしても、それを支える教師の指導や理論付けされた道筋を教師が立て、提示する必要がある。教科指導とは、本来「わかる」ようにすることが目的とされており、しっかりとした学力保障をしなければならない。生徒にとって「わかる」とは、技のポイントや上達するための課題や練習方法を理解することである。このプロセスを踏まえて学習することによって、「できる」につながるものであり、たとえできなくても「わかる」は学力保障されるのである。また、教え合いによって得られる効果は、技能の高い生徒は友達に教えることによって、技術上の構造を再確認し、自らの理解をより一層深めていくし、技能の低い生徒も高い生徒に教えることがあることや、教えたことによって技能の高い生徒が伸びていくことを経験していく。このような経験を通して、生徒たちは、技能の高い、低いということの関係が才能のみの問題ではないことを認識していく。⁹⁾ このような活動を通して、生徒たちは、より良い人間関係を築き上げていき、対人関係能力を身に付けていくのである。

6 学習資料

学習ノート・学習カード・教育機器は、形態は異なるが、生徒が円滑に学習を進めることを助ける学習の材料、資料である。学習資料には、学習者が記録や達成の状況などを実際に記録していくカードや学習の方法や練習の仕方に関する資料、運動のポイントや技を説明するための写真やVTRなどの視聴覚機器を利用したものがあげられる。²³⁾

これらの教具は、学習を活性化させ、生徒が自ら学び、自ら考えて学習するためには欠かせないものであり、生徒の実態などに合わせて教師が工夫することによってより充実した授業展開が望める。

(1) 学習ノート・カードの有効性²³⁾

学習ノート・カードのもつ機能は、一般的に、練習帳的機能、備忘録的機能、整理保存的機能、探求的機能の4つがある。近年の体育の学力観と目標の変化から、体育の授業でも広い意味で学習ノート・カードが使われるようになってきている。学習ノート・カードのもつ機能は表2-5のように分類される。

表2-5 学習ノート・カードの機能

技能体系や練習の発展のさせ方を示す	
動きや技のできばえや到達の状況を記入する達成カードや課題カード、技の系統カードがこの例にあげられる。このような学習カードを作成することによって、生徒たちの学習の流れをコントロールし、学習を進める道しるべとすることができる。	
学習の自己評価を促し、学習の成果の記録を明らかにする	
学習カード	学習ノート
達成カード、課題カード、技の系統カードや記録を記入して伸びを確認する記録カードなど	毎時間の個人のめあてや活動の仕方や反省を記入する個人ノート、グループの作戦や練習方法、めあてを記入するチームノート、グループノートなど
ほとんどのノートやカードは、全て評価の機能をもっている。これらは、自己評価によって、なるべく教師に依存しないでも成果を確認でき、それを積み重ねることによって学習成果を生徒らが自ら認識できるものにするという機能を期待することができる。	
運動の仕方や練習方法を示す	
この技能は、従来は教師の師範、VTR、コンセプトフィルムなどが担っていた。この役割を学習カードにもたせることで、授業を進めながら、短時間で、具体的に動きを示すことができ、運動の要領を言葉で補うことによって学習を合理化し、内容を少しずつ深めていくことができる。この具体例として、運動の紹介カードや練習カードなどの学習資料をあげることができる。	
生徒たちが学習の進め方、学び方の学習をする	
カードには、生徒たちが自分の能力を知り、自分に合った課題設定をし、解決の方法を考え、学習の振り返りをして自己評価をし、新しい課題設定をするといった学習の進め方を身に付けていくための手がかりとなっている。生徒たちが運動の学習の学び方を知っていくことによって、主体的に学習を進めていく能力が少しずつ育っていくことが期待されていく。	

体育の学習カードの特徴は、学習の中で学習活動と一体となって学習者自らが記入しながら活用されることである。この活動は、学習者が学習のねらいをもち、自主的・計画的に学習を進めるために学習の様子や成果を記録したり、活動を反省し、次の学習の内容や計画を確認したりすることである。

(2) 視聴覚機器の有効性

体育授業で現在最も多く活用されている教育機器は、視聴覚機器である。行おうとする運動のイメージをつかむための写真や掛図は体育館などに掲示して日常的に活用することができる。また、室内で熟練者の運動のビデオやスライドを見ることによって、その運動のイメージを知ることができる。²³⁾最近の脳機能の研究では、他者の運動を観察することによって、実際は運動をしていなくても脳の中では運動を準備しているといわれている。内藤は「後で自分が運動する意図をもって他者の運動を観察すると、脳の運動前野が賦活する。しかもどの四肢の運動を観察するかによって対応する部位が賦活する。この領域は、一次運動野との結合も強く運動準備に関与する。つまり運動を実行しなくても観察しているだけで、脳は運動を準備していることを意味する。また、最新の我々の研究から運動観察中には運動前野のみならず、体性感覚連合野も賦活することが示された。このことは脳が運動に先立って視覚情報からその運動で期待される運動感覚を準備しているとも解釈が可能である。最も重要なことはこれらの領域は自分が意図をもって運動を観察しない限り賦活しないことである。つまりこの脳機能は観察者が観察後に運動をする意図をもった場合のみ機能する実用機能といえる。」⁶⁾と述べている。つまり、ビデオなどの機器を利用して運動をイメージさせる時は、漠然と行うのではなく、次に運動を実行することを前提に、それを生徒にイメージさせてから活用することが望ましい。また、学習者の運動の様子をビデオに取り、観察することは、学習者にとって言葉でいわれるより役立つフィードバック情報である。運動をしている時、自分の演技を自分では見ることができないため、自分の欠点や癖に自分で気付くことは難しいが、こうした機器を用いることによって、自分の演技を見て修正していくことが可能となる。²³⁾

賦活・生活体が動機付けられ、行為に移る準備ができている状態。中枢神経系の興奮の増大、注意水準の上昇などを含み、行為の遂行には最適な賦活水準があるとされる。

検証授業

1 検証の視点

教材・教具、学習資料や互いのアドバイスを基に、自らの課題や課題解決の方法を考え、互いに教え合いを通して「一本」を目指して学習することによって、互いを尊重し合い、効果的に得意技を身に付け相手との攻防を楽しむ練習や試合ができるようになる。

2 検証の方法

(1) 期間 平成 18 年 9 月 19 日 (火) ~ 11 月 7 日 (火) 14 時間扱い

(2) 場所 山北町立山北中学校 柔道場

(3) 対象 第 3 学年 A 組 柔道選択者 (24 名)

(4) 単元名 武道 「柔道」

(5) 方法

ア 単元学習指導計画立案

イ 実態調査と分析(予備アンケートや事前・事後アンケートなど)

(ア) 実態調査 6 月 14 日 (水) 実施

(イ) 事前アンケート 9 月 14 日 (木) 実施

(ウ) 事後アンケート 11 月 28 日 (火) 実施

ウ 授業実践

エ 学習カード・ノートの分析 (毎時)

オ VTR の分析

カ 結果の分析

表 3 - 1 分析の視点と方法

分析の視点	具体的な分析の観点と方法
(1) 自ら課題を発見し課題を解決することができたか	ア 自ら課題を発見し練習を工夫して課題を解決することができたか (ア) 適切な課題が立てられたか (学習ノート) (イ) 練習を工夫できたか (学習ノート・事後アンケート・VTR) (ウ) 課題解決、自己分析・振り返りができたか (学習ノート・VTR)
(2) 技能を身に付けることができたか	ア 技能の構造を理解できたか (ア) 技の崩す方向、体さばき、技を掛ける部位が理解できているか (学習カード) イ 技能が身に付いたか (ア) 受け身が身に付いたか (学習ノート・事前アンケート) (イ) いくつかの技を身に付けることができたか (学習ノート・事前アンケート) (ウ) 得意技が身に付いたか (学習ノート・カード・VTR) ウ 学習ノート・カード、教材などが技能の習得に有効だったか (ア) 学習ノート・カード、教具、グループ編成の工夫は技能の習得に有効だったか (学習ノート・カード・事後アンケート)
(3) 相手を尊重し、安全に配慮して活動できたか	ア 相手の立場になって考えることができたか (ア) 互いにアドバイスができたか (学習ノート・カード・事前、事後アンケート) (イ) 相手を尊重して礼儀作法ができたか (事前、事後アンケート) イ 安全に配慮して活動できたか (ア) 練習や試合を行う時に、練習場や周囲、相手の安全に配慮して活動できたか (学習ノート・事前、事後アンケート)
(4) 相手との攻防を楽しむことができたか	ア 得意技を生かして相手と攻防することができたか (ア) 練習や試合で得意技を使うことができたか (学習ノート・カード・VTR) イ 攻防を楽しめたか (ア) 練習や試合で相手との攻防を楽しめたか (学習ノート・VTR・事後アンケート)

3 学習指導計画

(1) 単元目標

<p>運動への 関心・意欲・態度</p>	<p>自分に適した技を習得し、相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わおうとする。礼儀作法を重んじて相手を尊重し、自分で自分を律する態度を取ろうとするなど、進んで技の練習や試合をしようとする。また、用具や服装、練習場などの安全を確かめたり、禁じ技を用いたりしないなど、我が国固有の文化としての伝統的な行動の仕方を重視し、安全に留意して練習や試合をしようとする。</p>
<p>運動についての 思考・判断</p>	<p>自分の能力に適した得意技を身に付けることができるよう、かかり練習や約束練習を工夫したり、すきを見付け、崩して投げたりするなど、自由練習や試合の仕方が工夫できるようにする。また、視聴覚機器や資料の活用を工夫して課題学習ができるようにする。試合では、個人・団体形式や体格別などを踏まえて、それぞれ判定の基準や審判の仕方を工夫できるようにする。</p>
<p>運動の技能</p>	<p>対人的技能との関連を図って基本動作を身に付けるとともに、自分に適した技を選び、各種の練習方法を通して段階的、系統的に身に付けることができるようにする。また、相手の動きや技に対応した攻防を展開する中で、身に付けた技能の中から得意技とすることができるようにする。技能の程度に応じた練習や試合で、得意技を掛けたり相手の技に応じて変化したりすることができるようにする。</p>
<p>運動についての 知識・理解</p>	<p>武道の特性や学習の進め方、基本動作や対人的な技術の構造、自分や相手の課題に合った練習や試合の仕方、練習計画の立て方が理解できるようにする。また、柔道の礼儀作法など、我が国固有の文化としての伝統的な行動の仕方を理解し、試合の運営やルール、審判の方法が理解できるようにする。</p>

(2) 評価規準

ア 単元の評価規準¹⁷⁾

<p>運動への関心・意欲・態度</p>	<p>運動についての 思考・判断</p>	<p>運動の技能</p>	<p>運動についての 知識・理解</p>
<p>柔道の特性に関心をもち、楽しさや喜びが味わえるように進んで取り組もうとする。また、伝統的な行動の仕方に留意し、互いに相手を尊重し、練習や試合をしようとするとともに、勝敗に対して公正な態度を取ろうとする。さらに、禁じ技を用いないなど安全に留意して練習や試合をしようとする。</p>	<p>自分の能力に適した技を習得するために、教材・教具、学習資料などを選んだり、練習の仕方を選んだりしている。試合の判定の基準や審判の仕方を資料などから選んでいる。</p>	<p>基本動作、対人的技能を身に付け、相手の動きに対応した攻防を展開する中で、身に付けた技の中から得意技とすることができる。</p>	<p>柔道の特性や学び方、技術の系統性・構造、合理的な練習の仕方を理解するとともに、試合や審判の方法をいったり、書き出したりにしている。また、礼儀作法など伝統的な行動の仕方を理解している。</p>

イ 具体の評価規準²⁾15) 8) 21)

	運動への関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
A	<p>学習に粘り強く取り組み、自分に適した技を習得し、相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う武道の楽しさや喜びを十分味わおうとする。</p> <p>グループにおける自己の役割を自覚し、その責任を果たしきり、率先して仲間と教え合ったり、練習の場を整えたりして運動に取り組もうとする。</p> <p>自ら活動場所などの安全を確保するとともに、仲間の状態についても率先して確認するなど、あらゆる場面で健康・安全に留意して練習しようとする。</p> <p>自ら伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重し、率先して練習や試合をしようとする。</p>	<p>自己の能力に適した具体的な課題を設定し、その課題を解決するための具体的な練習方法について、学習経験を基に修正している。</p> <p>練習の進み具合によって、練習の見直しをしたり、課題を解決するための新たな練習方法や教具を具体的に考えたりしている。</p> <p>自ら発表や試合を楽しみながら、互いに相互評価を通して適切なアドバイスをし、新たな課題を発見して具体的な解決方法を考えている。</p>	<p>練習や試合の中で、相手の動きに応じて体裁きの方向に変化を付けたり、技の連絡変化を用いながら、自分の得意な状況にもち込んで、すばやく効果的に技を掛けることができる。</p> <p>スムーズな基本動作と自分の能力に適した対人的技能で練習することができる。</p>	<p>柔道の特性の1つとして、自己の能力に適した技に挑み、その課題を解決していくことを楽しむことがあることについて具体例をあげて説明している。</p> <p>柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について、具体例をあげて説明している。</p> <p>試合の運営やルール、審判の方法について、具体例をあげて説明している。</p> <p>伝統的な行動の仕方について、具体例をあげて説明している。</p>
A	<p>学習に自ら進んで取り組み、自分に適した技を習得し、相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う武道の楽しさや喜びを味わおうとする。</p> <p>グループにおける自己の役割を自覚して、その責任を果たし、仲間と教え合ったり、練習の場を整えたりして運動に取り組もうとする。</p> <p>自ら活動場所などの安全を確保するとともに、仲間の状態についても確認するなど、健康・安全に留意して練習しようとする。</p> <p>自ら伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重して練習や試合をしようとする。</p>	<p>自己の能力に応じた課題を設定し、その課題を解決するための適切な練習方法を見付けている。</p> <p>課題を解決するための練習方法や教具を見付けている。</p> <p>発表や試合を楽しみながら、互いに相互評価を通して適切なアドバイスをし、課題を発見して解決方法を見付けている。</p>	<p>練習や試合の中で、自分の得意な状況において効果的に技を掛けることができる。</p> <p>正しい基本動作と自分の能力に適した対人的技能で練習することができる。</p>	<p>柔道の特性の1つとして、自己の能力に適した技に挑み、その課題を解決していくことを楽しむことを説明している。</p> <p>柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について説明している。</p> <p>試合の運営やルール、審判の方法について説明している。</p> <p>伝統的な行動の仕方について説明している。</p>
B	<p>自分に適した技を習得し、相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う武道の楽しさや喜びを味わおうとする。</p> <p>グループにおける自己の役割を受け入れ、仲間と教え合ったり、練習の場を整えたりして運動に取り組もうとする。</p> <p>活動場所などの安全を確保するとともに、仲間の状態についても確認するなど、健康・安全に留意して練習しようとする。</p> <p>伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重して練習や試合をしようとする。</p>	<p>自己の能力に適した技を選び、課題をもっている。</p> <p>課題を解決するための練習方法や教具を選んだり、技のできばえを確かめ合ったりしている。</p> <p>発表や試合を楽しみながら、互いに相互評価を通してアドバイスをし、課題を発見して解決方法を選んでいる。</p>	<p>練習や試合の中で、自分の得意な状況において技を掛けることができる。</p> <p>基本動作と自分の能力に適した対人的技能で練習することができる。</p>	<p>柔道の特性の1つとして、自己の能力に適した技に挑み、その課題を解決していくことを楽しむことがあることをいったり、書き出したりしている。</p> <p>柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について、いったり、書き出したりしている。</p> <p>試合の運営やルール、審判の方法について、いったり、書き出したりしている。</p> <p>伝統的な行動の仕方についていったり、書き出したりしている。</p>

C	<p>自分に適した技を習得し、相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う武道の楽しさや喜びを味わおうとしないこともある。</p> <p>グループにおける自己の役割を受け入れきれず、仲間との関わりをあまりもたずに練習しようとしてしまう。</p> <p>活動場所などの安全を確かめないなど、健康・安全への意識が薄く、危険な動きをしてしまうこともある。</p> <p>伝統的な行動の仕方を意識せず、互いに相手のことを考えずに練習や試合をしてしまうことがある。</p>	<p>自己の課題を選んで入るものの、内容が実態にそぐわない。また、課題を解決する方法についても、視点がずれてしまっている。</p> <p>課題を解決するための練習方法や教具を提示されたものの中から選んで入るものの視点がかなりずれてしまっている。</p> <p>発表や試合を楽しみながら、互いに相互評価を通してアドバイスをしているものの、視点がずれてしまっているため、新たな課題の発見に結び付かない。</p>	<p>技を掛けることができない。</p> <p>基本動作が不正確で、動きが途中で途切れてしまう。</p>	<p>柔道の特性の1つとして、自己の能力に適した技に挑み、その課題を解決していくことを楽しむことがあることを断片的にいたり、書き出したりするにとどまっている。</p> <p>柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について、断片的にいたり、書き出したりするにとどまっている。</p> <p>試合の運営やルール、審判の方法について、断片的にいたり、書き出したりするにとどまっている。</p> <p>伝統的な行動の仕方についていたり、書き出したりするにとどまっている。</p>
C	<p>学習に消極的で、自分に適した技を習得し、相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う武道の楽しさや喜びを味わおうとしない。</p> <p>仲間と関わろうとせず、自分勝手に楽しもうとしている。</p> <p>活動場所などの安全を確かめず、危険な動きをするなど、健康・安全への意識がない。</p> <p>伝統的な行動の仕方ができず、自分勝手に練習や試合をしようとする。</p>	<p>自己の課題やその課題を解決する方法があることを捉えることができない。</p> <p>課題を解決するための練習方法や教具を提示しても選べないなど学習が停滞しがちである。</p> <p>発表や試合を楽しむことができず、互いに相互評価を通してアドバイスをすることができないため、新たな課題が発見できない。</p>	<p>・基本動作ができないので、相手との攻防が成立しない。</p>	<p>・柔道の特性や学び方、技術の系統性や発展性、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について、いたり、書き出したりできない。</p> <p>・伝統的な行動の仕方について、いたり、書き出したりできない</p>
C C への 手 立 て	<ul style="list-style-type: none"> ・興味をもてない生徒には、なぜ興味をもてないのかを明らかにして学習の目標を説明する。 ・仲間との協力がなければ成り立たない運動であることを説明する。 ・危険な行動に対しては、安全の配慮の大切さをその都度伝える。 ・なぜ伝統的な行動が大事であるかを説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の能力を振り返る視点を具体的に示し、課題を解決する方法を問いかけながら、選ばせたり、見付けさせたりする。 ・また、仲間の課題や解決方法を参考にしながら、例示したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料などで確認しながら、基本動作の要点を1つひとつ確認する。 ・体力などに応じて身に付けやすい技を選び、その技を中心にゆっくりとした動作での約束練習などを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・つまづいている内容について具体的な資料を提示したり、説明したりしながら、その内容がいえるようにする。 ・単語や説明の再現を求めるのではなく、その生徒にとって可能な範囲で記録をまとめさせたり、技の名称や実際の動きなどを書き出させたりする。 ・「ノートに今日学習したことの技術のポイントを書いてみよう」など具体的に支援をする。

(3) 指導と評価の計画

時間	学習のねらいと活動	具体的評価規準				評価方法
		関心 意欲 態度	思考 判断	運動 の 技能	知識 理解	
はじめ	<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション グループ編成 基本的知識の学習 (VTR 視聴) 基本動作・礼法の確認 学習の振り返り 					<p>【知識・理解】 柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について、いたり、書き出したりしている。(学習ノート) 伝統的な行動の仕方についていたり、書き出したりしている。(学習ノート)</p>
なか1 (2時間目～4時間目)	<p>ねらい1 柔道の心得・基本動作を理解し、柔道を楽しむことができる。また、既習の固め技を復習追及し、簡易な試合を楽しむことができる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 基本動作の復習 固め技の復習 審判法の確認 簡易な試合 学習の振り返り 					<p>【関心・意欲・態度】 活動場所などの安全を確保するとともに、仲間の状態についても確認するなど、健康・安全に留意して練習しようとする。(観察)</p> <p>【思考・判断】 自己の能力に適した技を選び、課題をもっている。(学習ノート) 発表や試合を楽しみながら、互いに相互評価を通してアドバイスをし、課題を発見して解決方法を選んでいく。(学習ノート・学習カード)</p> <p>【知識・理解】 柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について、いたり、書き出したりしている。(学習ノート) 伝統的な行動の仕方についていたり、書き出したりしている。(学習ノート)</p>
なか2 (5時間目～9時間目)	<p>ねらい2 既習の投げ技を復習追及し、新しい技を身に付け、グループ学習を行い自分に合った技を見付ける。また、技の発表を通して柔道の楽しさを知る。</p> <ol style="list-style-type: none"> 既習技の復習 中間発表 新しい技の学習 <ul style="list-style-type: none"> 背負い投げ 釣り込み腰 払い腰 約束練習、かかり練習 自由練習 学習の振り返り 					<p>【関心・意欲・態度】 グループにおける自己の役割を受け入れ、仲間と教え合ったり、練習の場を整えたりして運動に取り組もうとする。(観察)</p> <p>【思考・判断】 自己の能力に適した技を選び、課題をもっている。(学習ノート) 課題を解決するための練習方法や教具を選んだり、技のできばえを確かめ合ったりしている。(学習ノート)</p> <p>発表や試合を楽しみながら、互いに相互評価を通してアドバイスをし、課題を発見して解決方法を選んでいく。(学習ノート・学習カード)</p> <p>【技能】 基本動作と自分の能力に適した対人的技能で練習することができる。(観察)</p> <p>【知識・理解】 柔道の特性の1つとして、自己の能力に適した技に挑みその課題を解決していくことを楽しむことがあるをいたり、書き出したりしている。(学習ノート) 伝統的な行動の仕方についていたり、書き出したりしている。(学習ノート)</p>
なか3 (10時間目～13時間目)	<p>ねらい3 既習の技を組み合わせ、技の連絡変化を楽しんだり、自分の得意技を磨き試合や発表をしたりして楽しむ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 技の連絡変化 <ul style="list-style-type: none"> 技の発展 得意技の学習 簡易な試合・試合 学習の振り返り 					<p>【関心・意欲・態度】 自分に適した技を習得し、相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う武道の楽しさや喜びを味わおうとする。(観察・学習ノート) 伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重して練習や試合をしようとする。(観察)</p> <p>【思考・判断】 課題を解決するための練習方法や教具を選んだり、技のできばえを確かめ合ったりしている。(学習ノート)</p> <p>【技能】 練習や試合の中で、自分の得意な状況において技を掛けることができる。(観察) 基本動作と自分の能力に適した対人的技能で練習することができる。(観察)</p> <p>【知識・理解】 試合の運営やルール、審判の方法について、いたり、書き出したりしている。(学習ノート) 柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について、いたり、書き出したりしている。(学習ノート)</p>
まとめ	<ol style="list-style-type: none"> 技の発表会 学習カードのまとめ 単元の振り返り 					<p>【思考・判断】 発表や試合を楽しみながら、互いに相互評価を通してアドバイスをし、課題を発見して解決方法を選んでいく。(学習ノート・学習カード)</p>

(4) 単元計画

区分	はじめ	なか1	なか2	なか3	まとめ		
ねらい	ねらい1 柔道の心得・基本動作を理解し、柔道を楽しむことができる。また、既習の固め技を復習追及し、簡易な試合を楽しむことができる。	ねらい2 既習の投げ技を復習追及し、新しい技を身に付け、グループ学習を行い自分に合った技を見付ける。また、技の発表を通して柔道の楽しさを知る。	ねらい3 既習の技を組み合わせて技の連絡変化を楽しんだり、自分の得意技を磨き試合や発表したりして楽しむ。				
時間	10	20	30	40	50		
	<p>整理・あいさつ・出欠確認</p> <p>オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習ノートの作成 ・単元のねらいを確認する ・学習カードの使い方を知る <p>・1・2年次の学習の確認</p> <p>グループ編成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6人組、3人組、階級別 <p>基本的知識の復習 (VTR視聴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・柔道の歴史 ・特性 ・礼法 ・姿勢と組み方 ・進退動作 	<p>基本動作の復習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受け身、姿勢 ・組み方、進退動作 ・崩し、体さばき <p>固め技の復習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・けさ固め、横四方固め、上四方固め ・基本動作の復習、固め技の復習 ・技の掛け方、技の応じ方 ・技の連絡変化 <p>グループ学習 (I T を活用した支援)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約束練習 ・かかり練習 	<p>既習技の復習</p> <p>グループ学習 (I T を活用した支援)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材利用 ・体落とし ・膝車 ・支え釣り込み足 ・大外刈り ・大内刈り ・小内刈り ・出足払い ・約束練習 ・かかり練習 	<p>新しい技の学習</p> <p>グループ学習 (I T を活用した支援)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材利用 ・背負い投げ ・釣り込み腰 ・払い腰 ・約束練習 ・かかり練習 	<p>技の連絡変化</p> <p>技の発展・得意技の学習</p> <p>グループ学習 (I T を活用した支援)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約束練習 ・教材利用 ・かかり練習 	<p>得意技の学習</p> <p>グループ学習 (I T を活用した支援)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材利用 ・約束練習 ・かかり練習 ・自由練習 	<p>持の発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・得意技の発表 ・相互評価 ・学習カードのまとめ ・授業の振り返り
	<p>基本動作・礼法の確認 (3人グループで確認)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・座礼 ・立礼 ・立ち方、座り方 ・右組み、左組み ・自然本体、左右自然体 ・継ぎ足、歩み足 	<p>簡易な試合</p> <ul style="list-style-type: none"> ・固め技 ・個人戦 ・団体戦 	<p>中間発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相互評価 ・既習技 ・礼法 	<p>自由練習</p>	<p>自由練習</p>	<p>審判法の確認</p> <p>簡易な試合</p>	<p>発表会に向けた練習</p>
	<p>学習の振り返り・学習ノートへの記入・自己評価・次回の確認・あいさつ・片付け</p>						

4 学習について

(1) 生徒の柔道に対する意識

図3-1は、事前アンケート「柔道の授業は好きか」に対しての回答の割合を示したものである。

「好き」「どちらかという好き」と答えた生徒が全体の92.0%であり、柔道の授業が好きで好きな生徒がほとんどであることがわかる。また、好きな理由としては、「楽しい、試合など勝てるとうれしい」が圧倒的に多く、次に「技ができるようになると楽しい」という理由が多かった。

図3-2は、事前アンケートの「柔道に対するイメージ」の中の1つの項目として聞いた「柔道は怖くないか」についての割合を示したものである。

「そうだ」「ややそう」と答えた生徒が38.0%であり、「中間」と答えた生徒を除くと、柔道に対して怖いというイメージをもっている生徒が多いことがわかる。

図3-3は、事前アンケートの「柔道に対するイメージ」の中の1つの項目として聞いた「柔道は簡単か」についての割合を示したものである。

「そうでない」「ややそうでない」と答えた生徒が84.0%であり、生徒は柔道が難しいというイメージをもっている。

図3-4は、事前アンケート「柔道が上達する方法を知っているか」に対しての回答の割合を示したものである。

「知らない」「やや知らない」と答えた生徒が全体の88.0%であり、生徒たちは上達する方法を理解していないことがわかる。

このように、生徒たちは、柔道は好きであり、技ができるようになったり、試合に勝ったりすると楽しいと感じている反面、難しいとか怖いというマイナスイメージをもっており、技を上達させる方法を知らないということがわかった。また、技に対して「崩し」「体さばき」「掛け方」が理解できて

いるかアンケートを取ったところ、その理解度は68.7%であり、構造が理解できていない生徒が多数いることがわかった。それを踏まえて、今回の学習では、まず1年で学習した固め技を復習し、2年で学習した投げ技、体落とし、大腰、膝車、支え釣り込み足、大外刈り、大内刈り、小内刈り、出足払いをもう一度基本動作と関連付けながら復習する。そして、新たな技として背負い投げ、釣り込み腰、払い腰を学習する。さらに、その中から自分に合った得意技を身に付け、自由練習や試合で攻防が楽しめるように授業を展開する。

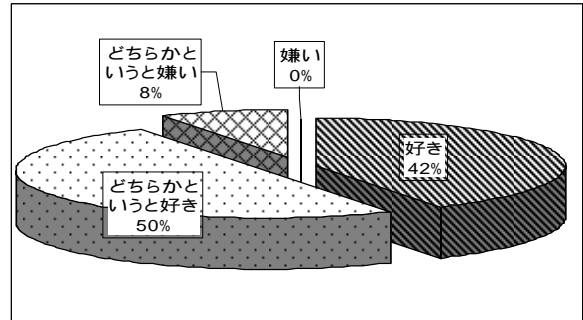


図3-1 柔道の授業は好きか

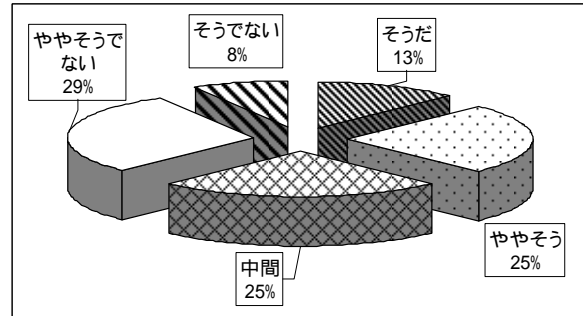


図3-2 柔道は怖くないか

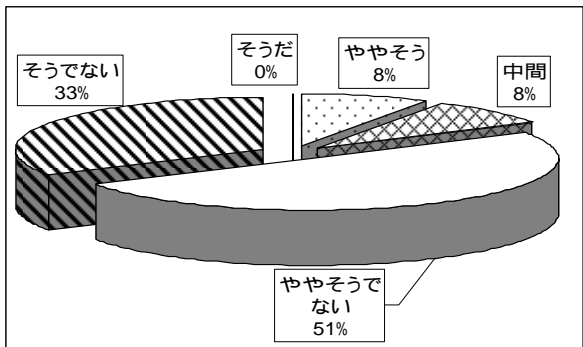


図3-3 柔道は簡単か

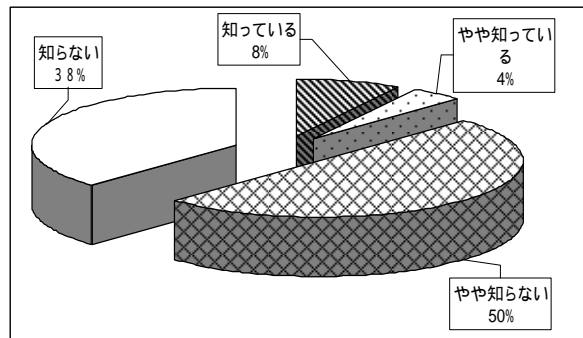


図3-4 上達する方法を知っているか

(2) 学習の工夫について

ア 学習ノート・カードの活用

(ア) 学習ノート

単元計画やねらいを明確にして、1時間ごとに記入できるようにする。

技の達成表を載せ、自分の技の習得状況が一目でわかるようにする。

技の「崩し」「作り」「掛け」を記入できるようにし、技のポイントを理解できるようにする。

友達からもらったアドバイスカードを貼れるようにし、教え合いを高めさせる。

技の連絡変化を例示し、得意技を掛けるためにはどのような連絡が良いのか記入できるようにする。

約束練習などの行い方のルールを記入できるようにする。

(イ) 学習カード

技のスマールステップカードを載せ、技のポイントが理解できるようにするとともに、課題学習に役立てるようにする。

吹き出しカードを作り、友達へのアドバイスを記入できるようにする。

相互評価カードを作り、技の評価や試合の評価が互いにできるようにする。

勝敗表やどんな技がかかったのかを記入できるようにする。

イ 教具の活用

(ア) 視聴覚機器

ITを活用した支援教材を作成し、技がより良く理解できるようにする。

ビデオを使って自分の投げた技が見られるようにする。

(イ) 教材の工夫

足形や八方崩しの方向を示すものを作り、正しい体さばきができるようにする。

赤や青色のアプリケを作り、重心や技を掛ける部位に貼れるようにする。



ITを活用した支援教材



アプリケ



八方崩しマット



足形

ウ グループ編成の工夫

体格、能力、課題、選択する技の系統などを考慮してグループ編成をする。2時間目～9時間目までは「異質グループ」とし10時間目以降の得意技の学習においては「等質グループ」とする。

エ 受け身の学習の工夫

受け身の学習は、2人組で行い、いくつかの技と関連させながら、低～高・遅～速・弱～強と段階的に毎時間行う。

5 授業の実際

(1) 学習指導案

14 時間扱いの 1 時間目	9 月 19 日 (火)	第 5 校時 (13 : 20 ~ 14 : 05)
ね ら い (1) 単元全体の学習のねらいや進め方を理解し、学習の見通しをもつ。 (2) 柔道の特性を理解する。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価 規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼をする。 2. オリエンテーション ・学習ノートの作成をする。 ・単元のねらいを確認する。 ・学習カードの使い方を知る。 ・1・2年次の学習の確認をする。	・1, 2年次の学習を振り返りながら礼法や姿勢を確認できるようにする。 ・生徒の健康観察を行う。 ・柔道に関する話題を提供する。 ・学習のねらいを理解させ、単元の流れを伝えるようにする。 ・学習カードの使い方を理解し、活用できるようにする。	
30 分	なか	3. グループ編成 ・6人組を作る。 ・3人組を作る。 ・階級別班を作る。 4. 基礎的知識の復習 (VTR 視聴) ・柔道の歴史を知る。 ・特性を知る。 ・礼法を確認する。 ・姿勢と組み方を確認する。 ・進退動作を確認する。  5. 基本動作・礼法の確認 (3人グループで互いに確認) ・座礼を確認する。 ・立礼を確認する。 ・立ち方、座り方を確認する。 ・右組み、左組みを確認する。 ・自然本体、左右自然体を確認する。 ・継ぎ足、歩み足を確認する。 	・6人グループについては、あらかじめ技能が均等になるように分けておく。 ・3人グループについては、6人グループを2つに均等に分けられるようにする。 ・階級別グループは、6人グループを重量級と軽量級の2つに分けられるようにする。 ・柔道の特性、教材としての意義を説明する。 ・礼法の意義を説明し、正しい礼法を心掛けるように助言する。 ・礼法、基本動作ができるかどうか確認をする。 ・できたこと、わかったことをノートに整理できるようにする。	【知識・理解】 柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできればの確かめ方について、いったり、書き出したりしている。 (学習ノート) 伝統的な行動の仕方についていったり、書き出したりしている。
5 分	まとめ	6. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の確認し見通しをもつ。 7. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、基本動作と固め技の復習を行うことを伝える。	

授業者による授業の振り返り

基礎知識の学習では、ビデオ教材を利用して学習し、柔道の歴史やねらいをしっかりと学習することができた。基本動作の学習では、グループ学習を行ったため、生徒同士の教え合いが行われ、和やかな雰囲気での学習することができた。また、柔道の授業を通して何を学びたいか個々に考えさせ、授業に対して課題をもつことができた。

14 時間扱いの 2 時間目	9 月 21 日 (木)	第 3 校時 (10 : 35 ~ 11 : 20)
ね ら い (1) 活動場所などの安全を確保するとともに、仲間の状態についても確認するなど、健康・安全に留意する。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・体ほぐしの運動は、ケンケン相撲を行う。たたみ 1 畳を土俵とし、チーム対抗、待っている者も準備運動をする。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
30 分	なか	4. 基本動作の復習 (3 人グループ) ・受け身を行う。 (後ろ受け身、横受け身、前回り受け身、前受け身) ・崩しと体さばきを行う。 (八方崩し、右足前さばき、左足後ろさばき、右足前回りさばき、左足後ろ回りさばき) 左右行う。 5. 固め技の復習 (6 人グループ) ・固め技の定義を確認する。 ・けさ固めを確認する。 ・横四方固めを確認する。 ・上四方固めを確認する。 ・応じ方を確認する。 6. 審判法の確認	・グループ別に受け身の復習をする。確認ができたなら投げ技と関連させて受け身をする。 出足払いなど～横受け身 体落とし、膝車など～前回り受け身 大外刈りなど～後ろ受け身 ・八方崩しと体さばきを投げ技と関連付けて練習できるようにする。 ・教具を利用できるように支援する。 ・技の確認をした後、コンテンツの活用方法を理解させるようにする。 ・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・相手の動きによって、応じ方があることをアドバイスする。 ・グループごとに役割やルールを確認できるようにする。 ・IT を活用した支援教材を活用しながらグループ学習ができるようにする。 ・審判の方法や判定の仕方を理解できるようにする。	【関心・意欲・態度】 活動場所などの安全を確保するとともに、仲間の状態についても確認するなど、健康・安全に留意して練習しようとする。(観察) 
5 分	まとめ	7. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の確認し、見直しをもつ。 8. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、固め技の発展と試合を行うことを伝える。	

授業者による授業の振り返り

体ほぐしの運動を取り入れ、和やかに学習に入ることができた。受け身の復習では、投げ技と関連して動いて受け身をしたり、教具を使ったりして、崩しと体さばきの確認を行った。また、固め技の復習では、IT を活用した支援教材を使ったり、グループ学習などを行ったりすることによって、しっかりと復習することができた。

14 時間扱いの 3 時間目	9 月 26 日 (火)	第 3 校時 (10 : 35 ~ 11 : 20)
<p>ね ら い (1) 自己の能力に適した技を選び、課題を立てる。</p> <p>(2) グループの仲間と協力して練習し、柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について理解する。</p>		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・体ほぐしの運動は、しばり、えびのリレーをする。 ・移動をしながら受け身を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。 	
30 分	なか	4. 固め技の復習・発展 (6 人グループ) ・得意技を決める。 ・けさ固めを行う。 ・横四方固めを行う。 ・上四方固め行う。 ・攻め方・応じ方を行う。 ・連絡変化を行う。 ・ITを活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 5. 固め技の個人戦 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・相手の動きによって、応じ方があることをアドバイスする。 ・簡単な攻め方をアドバイスする。 ・相手の動きによって技を連絡できることを理解できるようにする。 ・自分に合っている固め技をグループで確認しながら、得意技とすることができるようになる。 ・グループごとに役割やルールを確認できるようにする。 ・チーム内の総当たり戦をし、チーム内の順位を決められるようにする。 ・主審と計時以外の生徒は、試合を見ながら試合者の評価をし、アドバイスカードに記入できるようにする。 ・礼法をしっかりと確認する。 ・審判が正しくできるようにアドバイスする。 	<p>【思考・判断】 自己の能力に適した技を選び、課題をもっている。</p> <p>【知識・理解】 柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について、いったり、書き出ししたりしている。(学習ノート)</p> 
5 分	まとめ	6. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 7. あいさつ・片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、得意な固め技の練習と、本時の試合結果を基に、チーム対抗の団体戦を行うことを伝える。 	

授業者による授業の振り返り

準備運動では、2人組で、動きながらの受け身を取り入れて行った。1人で行う受け身と、実際に投げられた時の受け身とでは、若干違いがあるため、生徒の中には困惑する者もいたが、より実戦に近い形で受け身を取ることが大切であるということに気付いた生徒もいた。固め技の復習では、応じ方の復習を行った。グループで教え合いをしながら、技能を身に付けることができていた。個人戦では、試合のない生徒は、他の生徒の試合を見ながらコメントやアドバイスを記入する形式で行ったが、よく試合を見て的確なコメントを書いている生徒が数多く見られた。

14 時間扱いの 4 時間目	10 月 3 日 (火)	第 5 校時 (13 : 20 ~ 14 : 05)
ね ら い (1) 試合や練習を通して相手との攻防を楽しみ、互いに相手を尊重する。 (2) 伝統的な行動の仕方について理解する。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体の評価規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・体ほぐしの運動は、しっぽタッチを行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
30 分	なか	4. 得意な固め技の練習・発展 (6 人グループ) ・けさ固めを行う。 ・横四方固めを行う。 ・上四方固めを行う。 ・攻め方・応じ方を行う。 ・連絡変化を行う。 ・IT を活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 5. 固め技の団体戦	・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・得意な固め技を追求できるようにする。 ・得意な固め技を掛けるためにはどのように攻撃したらよいか考えられるようにする。 ・対戦相手の特徴を考えて、チームで作戦を立てることができるようになる。 ・グループごとに役割やルールを確認できるようにする。 ・個人戦の結果を基に対戦する。(能力別) ・主審と計時以外の生徒は、試合を見ながら試合者の評価をし、アドバイスカードに記入できるようにする。 ・礼法をしっかりと確認する。 ・審判が正しくできるようにアドバイスする。	 【関心・意欲・態度】 伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重して練習や試合をしようとする。(観察)
5 分	まとめ	6. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 7. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、投げ技の復習を行うことを伝える。	【知識・理解】 伝統的な行動の仕方についていたり、書き出したりしている。(学習ノート)

授業者による授業の振り返り

前回の学習でほとんどの生徒が、得意な固め技を決めることができおり、本時の授業では、どうすれば得意技に持っていきことができるのかを考えながら学習することができていた。試合の結果をみても、自分の得意な技で一本勝ちする生徒が多数いた。団体戦では、前回の個人戦の結果を基に、その順位同士戦わせたため、技能が同じくらいの者同士の試合となり、白熱した試合となり、迫力のある攻防が見られた。

14 時間扱いの 5 時間目	10 月 5 日 (木)	第 3 校時 (10 : 35 ~ 11 : 20)
ね ら い (1) 課題を解決するために練習方法を工夫する。 (2) グループの仲間と協力して教え合う。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・体ほぐしの運動は、バランス崩しを行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
30 分	なか	4. 投げ技の既習技の復習 (6 人グループ) ・ I T を活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 ・かかり練習、約束練習の確認を行う。 ・体落としを確認する。 ・大腰を確認する。 ・膝車を確認する。 ・支え釣り込み足を確認する。 ・大外刈りを確認する。 ・大内刈りを確認する。 ・小内刈りを確認する。 ・出足払いを確認する。	・かかり練習、約束練習、自由練習についてそれぞれの意義を説明する。 ・各グループで練習のルールを決めることができるようにする。 ・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・ I T を活用した支援教材を利用して技の構造を理解できるようにする。 ・崩し、作り、掛けを意識させ、スモールステップカードに達成状況を記入できるようにする。 ・教具を利用して、より良く技を習得できるようにする。 ・できた技は、班員に確認してもらい、達成表に記入できるようにする。 ・経験者や技の上手な者をリーダーとして、グループ活動ができるように指導する。 ・練習においても必ず礼法を実施するようにする。	【思考・判断】 課題を解決するための練習方法や教具を選んだり、技のできばえを確かめ合ったりしている。(学習ノート) 【関心・意欲・態度】 グループにおける自己の役割を受け入れ、仲間と教え合ったり、練習の場を整えたりして運動に取り組もうとする。(観察)
5 分	まとめ	5. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 6. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、引き続き投げ技の復習を行うことを伝える。	

授業者による授業の振り返り

2 年生で学習した、体落とし、大腰、膝車、支え釣り込み足、大外刈り、大内刈り、小内刈り、出足払い、の復習を行った。かなりの生徒が忘れていたようであったが、教具を使いながら、崩し、作り、掛けをしっかりと復習することができていた。特に、前回まであまり利用していなかった I T を利用した支援教材は、本時では、頻りに使われており、技の構造を理解するのに、動画を見ることはとても有効であると生徒は考えたようである。グループ学習においても、積極的に教え合いをしており、進んで学習することができていた。練習に際しては、「引き手を離さない」「必ず礼をする」「投げられやすいようにする」「痛くないように投げる」などの自分たちで決めたルールを守りながら練習することができていた。

14 時間扱いの 6 時間目	10 月 10 日 (火)	第 5 校時 (13 : 20 ~ 14 : 05)
ね ら い (1) 既習技の中から自分に合った技を選び、課題を見付ける。 (2) 基本動作と自分の能力に適した対人的技能を身に付ける。		

学習の流れ


時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価 基準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・体ほぐしの運動は、根っこ引き抜きを行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
30 分	なか	4. 投げ技の既習技の復習 (6 人グループ) ・ I T を活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 ・かかり練習、約束練習を行う。 ・体落としを行う。 ・大腰を行う。 ・膝車を行う。 ・支え釣り込み足を行う。 ・大外刈りを行う。 ・大内刈りを行う。 ・小内刈りを行う。 ・出足払いを行う。 5. 自由練習 	・グループ学習を通して自己の課題を明確にできるようにする。 ・学習課題に対して、練習方法が工夫できるようにする。 ・既習技の中で自分に合っている技を見付けることができるようにする。 ・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・ I T を活用した支援教材を利用して技の構造を理解できるようにする。 ・崩し、作り、掛けを意識させ、スモールステップカードに達成状況を記入できるようにする。 ・教具を利用して、より良く技を習得できるようにする。 ・できた技は、班員に確認してもらい、達成表に記入できるようにする。 ・経験者や技の上手なものをリーダーとして、グループ活動ができるように指導する。 ・練習においても必ず礼法を実施するようにする。 ・見苦しい姿勢を取らないように助言する。 ・危険な技や行動を取らないように指導する。 ・受け身をきちんと取るように指示する。	【思考・判断】 自己の能力に適した技を選び、課題を持っている。(学習ノート) 【技能】 基本動作と自分の能力に適した対人的技能で練習することができる。(観察)
5 分	まとめ	6. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 7. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、既習技の中から 2 つ選択して発表を行うことを伝える。	

授業者による授業の振り返り

投げ技の復習では、八方崩しマットや足形、スモールステップカード、 I T を活用した支援教材などを有効利用しながら、互いに教え合いを通して学習する姿が見られた。ある程度技ができるようになった生徒は、発表会に向けて、自分の得意な技を 2 種類選択し、かかり練習などを通してより確実に決まるように練習する姿が見られた。自由練習では、練習した技を試し、中にはきれいに一本を決めることができた生徒もいた。

14 時間扱いの 7 時間目	10 月 12 日 (火)	第 3 校時 (10 : 35 ~ 11 : 20)
ね ら い (1) 発表会を楽しみながら、互いに相互評価し課題を見付ける。		
(2) 伝統的な行動の仕方について理解する。		

学習の流れ



時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・体ほぐしの運動は、しっぽ取りを行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
30 分	なか	4. 投げ技の既習技の復習・発表会の練習 (6 人グループ) ・IT を活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 ・かかり練習、約束練習を行う。 ・体落としを行う。 ・大腰を行う。 ・膝車を行う。 ・支え釣り込み足を行う。 ・大外刈りを行う。 ・大内刈りを行う。 ・小内刈りを行う。 ・出足払いを行う。 5. 中間発表 ・2 つの技を選択して発表する。 ・グループで相互評価する。 	・グループ学習を通して自己の課題を明確にできるようにする。 ・学習課題に対して、練習方法が工夫できるようにする。 ・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・教具を利用して、より良く技を習得できるようにする。 ・できた技は、班員に確認してもらい、達成表に記入できるようにする。 ・発表会に向けて、自分に合っている技を選び練習できるようにする。 ・技を発表する機会を作り、相互評価できるようにする。 ・相互評価を利用して、自己の課題や得意技を見付けることができるようにする。 ・礼法をしっかりと行うように指示する。	 【思考・判断】 発表を楽しみながら、互いに相互評価を通してアドバイスをし、課題を発見して解決方法を選んでいる。(学習ノート・学習カード) 【知識・理解】 伝統的な行動の仕方についていたり、書き出したりしている。(学習ノート)
5 分	まとめ	6. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 7. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、新しい技の学習をすることを伝える。	

授業者による授業の振り返り

技の発表の練習では、投げる方はきれいに投げられるように努力するとともに、投げられる方は、いかに相手が投げやすく、また、受け身をきちんとできるようにしようとする姿が見られた。技の発表では、手技、腰技から 1 つ、足技から 1 つ選択をして発表を行った。相互評価をしながらグループでしっかりと発表することができた。相互評価では、礼法や技の習熟度を見ながらきちんと評価することができていた。特に、礼法など、所作については、「かかどがついていない」「足の運びが違う」など細かいところまでしっかりと評価することができていた。また、技については「勢いがない」など、一本になる条件をきちんと理解して評価することができていた。

14 時間扱いの 8 時間目	10 月 17 日 (火)	第 5 校時 (13 : 40 ~ 14 : 30)
ね ら い (1) グループの仲間と協力し、教え合う。		
(2) 教材・教具を活用し、新しい技を身に付ける。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・体ほぐしの運動は、棒引きを行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
				
35 分	なか	4. 新しい技の学習 (6 人グループ) ・ I T を活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 ・ かかり練習、約束練習を行う。 ・ 背負い投げを行う。 ・ 釣り込み腰を行う。 ・ 払い腰を行う。 5. 自由練習 ・ 他のグループとも行う。	・ グループ学習を通して自己の課題を明確にできるようにする。 ・ 学習課題に対して、練習方法が工夫できるようにする。 ・ グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・ 教具を利用して、より良く技を習得できるようにする。 ・ できた技は、班員に確認してもらい、達成表に記入できるようにする。 ・ 回し系の技は、投げる際には勢いがつくので引き手を離さないことや、受け身をしっかりと取るように十分注意することを促す。 ・ 見苦しい姿勢を取らないように助言する。 ・ 危険な技や行動を取らないように指導する。 ・ 受け身を取るように指示する。 ・ 練習を通して、自分の得意な技を見付けるように助言する。	【関心・意欲・態度】 グループにおける自己の役割を受け入れ、仲間と教え合ったり、練習の場を整えたりして運動に取り組もうとする。(観察) 【思考・判断】 課題を解決するための練習方法や教具を選んだり、技のできばえを確かめ合ったりしている。(学習ノート)
5 分	まとめ	6. 本時のまとめ ・ 本時の学習を振り返る。 ・ 自己評価、感想を記入する。 ・ 次回の予定を確認し、見通しをもつ。 7. あいさつ・片付け	・ 学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・ 次時は、本時で習った技を復習することを伝える。	

授業者による授業の振り返り

新しい技の学習では、I T を活用した支援教材を有効利用している生徒が多かった。男子においては、3 つの技を短時間で身に付けてしまう生徒もいた。女子においては、当初背負い投げだけでもしっかりと身に付けさせようと考えていたが、中には、釣り込み腰や払い腰をきちんと決められる生徒もいた。新しい技を習得するということが、より活発な教え合いが見られた。自由練習では、練習した技を試したり、自分が得意な技を仕掛けたりして一本を取ることが出来る生徒もいた。男子の中では、自由練習に何回も取り組み技能を向上させようとする姿が見られた。

14 時間扱いの 9 時間目	10 月 19 日 (木)	第 3 校時 (10 : 45 ~ 11 : 35)
ね ら い (1) グループで協力して新しい技を身に付けながら、より具体的な課題を見付ける。 (2) 身に付いた技の中から、自己の能力に適した技を選び、技を向上させる。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・体ほぐしは、ミラーストレッチを行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
35 分	なか	4. 新しい技の学習 (6 人グループ) ・IT を活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 ・かかり練習、約束練習を行う。 ・背負い投げ、釣り込み腰、払い腰を中心として行い、今までに学習した技を復習する。  5. 自由練習 ・他のグループとも行う。 	・グループ学習を通して自己の課題を明確にできるようにする。 ・学習課題に対して、練習方法が工夫できるようにする。 ・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・教具を利用して、より良く技を習得できるようにする。 ・できた技は、班員に確認してもらい、達成表に記入できるようにする。 ・回し系の技は、投げる際には勢いがつくので引き手を離さないことや、受け身をしっかりと取るように十分注意を促す。 ・見苦しい姿勢を取らないように助言する。 ・危険な技や行動を取らないように指導する。 ・受け身をきちんと取るように指示する。 ・練習を通して、自分の得意な技を見付けるように助言する。	【思考・判断】 自己の能力に適した技を選び、課題を持っている。(学習ノート) 【知識・理解】 柔道の特性の1つとして、自己の能力に適した技に挑み、その課題を解決していくことを楽しむことがあることをいったり、書き出したりしている。(学習ノート)  
5 分	まとめ	6. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 7. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、技の連絡変化の学習と得意技の練習を行うことを伝える。	

授業者による授業の振り返り

前回同様に、教具を有効利用しながら教え合いを通して学習することができていた。また、得意技を見付けることをねらいとしていることから、今まで学習したすべての技の中から自分にあっている得意技を見付けるために、いろいろな技を試している姿が見られた。また、学習カードを利用しながら、自分たちの技のできを評価し、技の達成表をしっかりと記入することができていた。学習ノートを見ると、ほとんどの生徒が自分に合った得意技を見付けることができた。

14時間扱いの10時間目	10月24日(火)	第5校時(13:40~14:30)
ねらい(1)身に付けた技の中から、得意技に発展できるようにする。		
(2)グループの仲間と協力して練習し、課題を解決する練習方法を工夫する。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価規準と方法
10分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・各グループで体ほぐしの運動を行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
35分	なか	4. 技の連絡変化の学習(6人グループ) ・ITを活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 ・約束練習を行う。 ・例示された技の連絡変化以外に、グループでいくつかの連絡変化を考える。 5. 得意技の練習 ・約束練習、かかり練習を行う。 	・グループ学習を通して自己の課題を明確にできるようにする。 ・学習課題に対して、練習方法が工夫できるようにする。 ・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・教具を利用して、より良く技を習得できるようにする。 ・八方崩しを再確認し、どんな時に技が掛かるのかを確認して、より良い連絡変化ができるように助言する。 ・グループで教え合いをしながら得意技を身に付けることができるようにする。 ・自分の技をビデオに取り、技を修正しながら得意技を身に付けることができるようにする。 ・危険な技や行動をしないように指導する。 ・自由練習で得意技を磨くようにする。 ・どんな技が決まったかノートに記入できるようにする。 ・試合を通して自分の課題を確認できるようにする。 ・しっかりとした審判法を身に付けるようにする。	【思考・判断】 課題を解決するための練習方法や教具を選んだり、技のできばえを確かめ合ったりしている。(学習ノート)  【技能】 基本動作と自分の能力に適した対人的技能で練習することができる。(観察)
5分	まとめ	8. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 9. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、得意技を中心に練習を行うことを伝える。	

授業者による授業の振り返り

連絡変化の学習では、例示された3つの連絡変化を実践しながら、そのほかにどのような連絡変化があるか考えながら学習し、グループでいくつかの連絡変化を考えることができた。得意技の練習では、新たに同じ技や同じ系統の技を練習するもの同士グループ編成をしておいた。最初は戸惑っていたが、「同じ技を得意技とするもの同士で練習した方が効率がいい」などという感想も生徒から聞かれた。自由練習では、今まで単一の技しか掛けていなかった生徒が、連絡変化を意識して技を繰り出す姿が見られた。

ね ら い (1) 練習や試合の中で、自分の得意な状況において技を掛ける。

(2) 得意技を磨くために合理的な練習方法を見付ける。

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価規準と方法
10分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・各グループで体ほぐしの運動を行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
35分	なか	4. 技の連絡変化・得意技の学習 (6人グループ) ・ITを活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 ・約束練習、かかり練習を行う。 ・得意技に結び付く連絡変化を考える。  5. 自由練習 ・他のグループとも行う。 6. 簡易な試合	・グループ学習を通して自己の課題を明確にできるようにする。 ・学習課題に対して、練習方法が工夫できるようにする。 ・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・教具を利用して、より良く技を習得できるようにする。 ・グループで教え合いをしながら得意技を身に付けることができるようにする。 ・自分の技をビデオに取り、技を修正しながら得意技を身に付けることができるようにする。 ・得意技に結び付く連絡変化をいくつか考えノートに記入できるようにする。 ・危険な技や行動をしないように指導する。 ・どんな技が決まったかノートに記入できるようにする。 ・試合を通して自分の課題を確認できるようにする。 ・試合で、得意技を試すことができるようにする。	【技能】 練習や試合の中で、自分の得意な状況において技を掛けることができる。(観察) 【知識・理解】 柔道の学び方、合理的な練習の仕方、技のできばえの確かめ方について、いったり、書き出したりしている。(学習ノート)
5分	まとめ	7. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 8. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次回の対戦を決める (体重別個人戦) ・次時は、試合 (個人戦) を行うことを伝える。	

授業者による授業の振り返り

技の連絡変化においては、自分の得意技につながる連絡変化を考えさせそれを身に付ける練習を行った。それぞれに、得意技につながる連絡変化をいくつか考え、それを練習する姿が見られた。同じ系統の得意技を練習する者同士グループになっているため、それぞれ共通する課題や連絡変化を互いに教え合いを通して克服していくとしていた。自由練習では、練習した連絡変化を使って一本を取る姿が見られた。

14時間扱いの12時間目	10月31日(火)	第5校時(10:35~11:20)
ねらい (1)相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う武道の楽しさや喜びを味わう。 (2)練習や試合の中で、自分の得意な状況において技を掛ける技能を身に付ける。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体の評価規準と方法
10分	はじめ	1.整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2.本時の学習のねらいの確認 3.準備運動と体ほぐしの運動 ・各グループで体ほぐしの運動を行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
30分	なか	4.得意技の学習(6人グループ) ・ITを活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 ・約束練習、かかり練習、自由練習を行う。  5.試合(体重別個人戦) 	・学習課題に対して、教具を利用するなど練習方法が工夫できるようにする。 ・グループ学習を通して、互いにアドバイスをカードに記入できるようにする。 ・教具を利用して、より良く技を習得できるようにする。 ・試合を想定して得意技を練習できるようにする。 ・危険な技や行動をしないように指導する。  ・どんな技が決まったかノートに記入できるようにする。 ・試合を通して自分の課題を確認できるようにする。 ・試合で、得意技を試すことができるようにする。	【関心・意欲・態度】 自分に適した技を習得し、相手の動きや技に対応した攻防や勝敗を競い合う武道の楽しさや喜びを味わおうとする。(観察・学習ノート) 【技能】 練習や試合の中で、自分の得意な状況において技を掛けることができる。(観察)
5分	まとめ	6.本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 7.あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次回の対戦を決める。 ・次時は、試合(団体戦)を行うことを伝える。	

授業者による授業の振り返り

得意技の学習においては、より実践的に技が掛かるように、動きながら得意技を掛ける練習やよりすばやく連絡変化を行うように練習する姿が見られた。個人の課題を見ても、得意技を極めるために、より具体的な課題が立てられるようになってきた。試合では、重量級と軽量級に分かれて試合を行ったが、試合の運営などもスムーズに行うことができていた。各班の試合に対するコメントを見てもより具体的に試合を評価し、それぞれにコメントやアドバイスを記入することができていた。試合を終えた感想を見ても、自分ができなかった点を的確に捉えて、次回につなげようと考えている生徒が多数いた。

14 時間扱いの 13 時間目	11 月 2 日 (木)	第 3 校時 (10 : 35 ~ 11 : 20)
ねらい (1) 練習や試合の中で、伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重する。 (2) 試合の中で自己の役割を果たす。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・各グループで体ほぐしの運動を行う。 ・移動をしながら受け身を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助と見学のポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。 	
30 分	なか	4. 得意技の学習 (6 人グループ) ・IT を活用した支援教材を活用しながらグループ学習を行う。 ・約束練習、かかり練習、自由練習を行う。 5. 試合 (団体戦)  6. 発表会に向けての練習	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題に対して、教具を利用するなど練習を工夫できるようにする。 ・教具を利用して、より良く技を習得できるようにする。 ・試合を想定して得意技を練習できるようにする。 ・危険な技や行動をしないように指導する。 ・どんな技が決まったかノートに記入できるようにする。 ・試合を通して自分の課題を確認できるようにする。 ・試合で、得意技を試すことができるようにする。 ・チーム内でペアを作り発表会に向けて練習できるようにする。 	【関心・意欲・態度】 伝統的な行動の仕方に留意して、互いに相手を尊重して練習や試合をしようとする。(観察) 【知識・理解】 試合の運営やルール、審判の方法について、いたり、書き出したりしている。(学習ノート)
5 分	まとめ	7. 本時のまとめ ・本時の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 ・次回の予定を確認し、見通しをもつ。 8. あいさつ・片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・次時は、得意技の発表会を行うことを伝える。 	

授業者による授業の振り返り

得意技の学習では、前回の試合のコメントを生かして、練習する姿が見られた。かかり練習を通して技を反復練習する生徒や、より実戦に近い自由練習をしながら得意技を身に付けていこうとする姿が見られ、実戦に向けた練習を進んで行うことができていた。試合に際しては、礼法なども服装をきちんと整えたり、相手に感謝と敬意を示した礼をしたりしている姿が見られた。また、試合のコメントを記入する際、どのような技を何回仕掛けたかを数える場面では、1人ではなかなかかどらないことから、1人が試合を実況中継し、それをカードに記入するなど、それぞれに工夫をしながら試合分析を行う姿が見られた。

14 時間扱いの 14 時間目	11 月 7 日 (火)	第 5 校時 (13 : 40 ~ 14 : 30)
ね ら い (1) 得意技の発表を楽しみながら、互いに相互評価を通してアドバイスをし、課題を発見する。		

学習の流れ

時間	段階	学習の内容と活動	指導・支援	具体的評価 規準と方法
10 分	はじめ	1. 整列・あいさつ・出欠確認 ・正座、黙想、座礼を行う。 2. 本時の学習のねらいの確認 3. 準備運動と体ほぐしの運動 ・各グループで体ほぐしの運動を行う。 ・移動をしながら受け身を行う。	・礼法や姿勢を確認する。 ・生徒の健康観察を行う。 ・見学者に学習の補助とポイントを指示する。 ・本時の学習内容について説明する。	
30 分	なか	4. 発表会の練習 ・約束練習、かかり練習を行う。 5. 得意技の発表 ・相互評価を行う。	・より良い発表は、受けが重要であることを理解できるようにする。 ・グループで互いに評価できるようにする。	【思考・判断】 発表や試合を楽しみながら、互いに相互評価を通してアドバイスをし、課題を発見して解決方法を選んでいく。(学習ノート・学習カード)
10 分	まとめ	6. 単元のまとめ ・単元の学習を振り返る。 ・自己評価、感想を記入する。 7. あいさつ・片付け	・学習ノートに自己評価、感想などを具体的に記入できるようにする。 ・学習ノートを整理できるようにする。	

授業者による授業の振り返り

発表会では、得意技を「止まった状態で掛ける」「動きながら掛ける」「連絡変化を使って掛ける」の3つを発表することとした。練習の場面では、取はもちろんであるが、受がより技の見栄えが良くなるように、取が投げやすいように、そして、しっかりと受け身ができるように練習している姿が見られた。発表においては、きちんと一本を取れるような技を決めることができた生徒が数多くいた。また、相互評価についても技をしっかりと評価することができていた。生徒の中には、「オリンピックで決まるような一本を取りたい」などより高い思いをもっている生徒もいた。

6 検証授業の結果と考察

研究主題に迫るため、検証授業から得られたデータを基に、設定した検証の視点に沿って分析し、得意技を身に付け「一本」を目指し柔道の特性を味わうことができたかについて考察していくことにする。

なお、分析・考察を進める上で、文中に使用した図表のデータについては、次の通りである。
 検証授業の対象人数 第3学年A組 柔道選択者 男子12名 女子12名計24名
 各時間の出席者数

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
出席者数	22	22	24	22	24	24	24	22	24	24	24	24	24	24

事前・事後アンケート及び技の構造の簡易テスト実施者数 対象者全員24名
 また、図表中の生徒の記述内容は、できる限り生徒が記述したままの表現で載せてある。

(1) 自ら課題を発見し練習を工夫して課題を解決することができたか

本学習では、得意技を身に付け「一本」を目指していくことから、課題学習を基に、毎時間課題を立て、練習方法を工夫し、自己分析・振り返りを行うという一連のサイクルを学習ノートに整理して記述できるように工夫して授業を展開した。ここでは、学習ノートの記述内容や事後アンケート、活動のVTRから分析を行う。また、課題については、得意技を身に付けるという観点から分類整理し、その記述内容を時系列で分析した。

ア 自ら課題を発見し練習を工夫して課題を解決することができたか

(ア) 適切な課題が立てられたか(学習ノート)

図3-5は、生徒個々の課題の記述を分類し、「発表や試合に関すること」「関心・意欲・態度に関すること」「技能に関すること」に分類して、その時間ごとの変化を示したものである。

3・4・12・13時間目は試合、7・14時間目は発表会を行っているため「発表や試合に関すること」の記述が多くなっていることがわかる。

「技能に関すること」については、試合や発表の日を除くと高い数値を表していることがわかる。

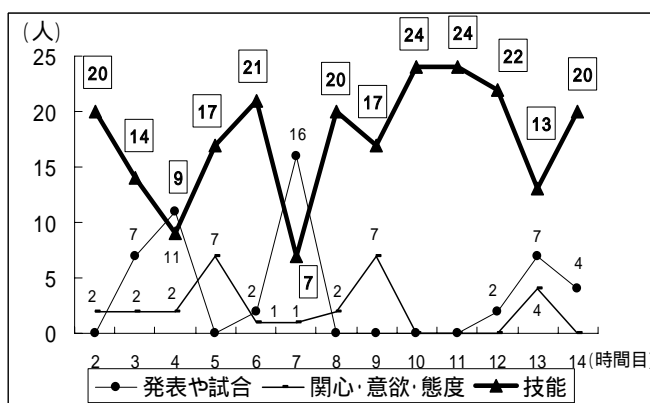


図3-5 課題の記述の変化

図3-6は、図3-5の「技能に関すること」の記述をさらに細分化し、「全体的で抽象的」「より具体的な技に関する記述」に分類し、その時間ごとの変化を示したものである。「全体的で抽象的」とは、「投げ技を覚える」「2年次に習った技の復習」など、課題が明確でないものであり、「より具体的な技に関する記述」は、「技を限定して記述できているもの」「崩し・体さばき・掛け方」などが具体的に記述されているもの「得意技」に関する記述があるものとした。

2・5・8時間目は、授業の内容の変わり目であり、学習内容が多く「全体的抽象的」な課題が増えたことがわかる。「より具体的な技に関すること」の記述については、2・5時間目にはほとんどなかった。また、10・11時間目は、ほとんどの生徒がより具体的な技に関する課題を立てることができたことがわかる。12・13・14時間目は、試合と発表会を行ったため、「試合や発表に関すること」の記述が多く数値が下がったことがわかる。

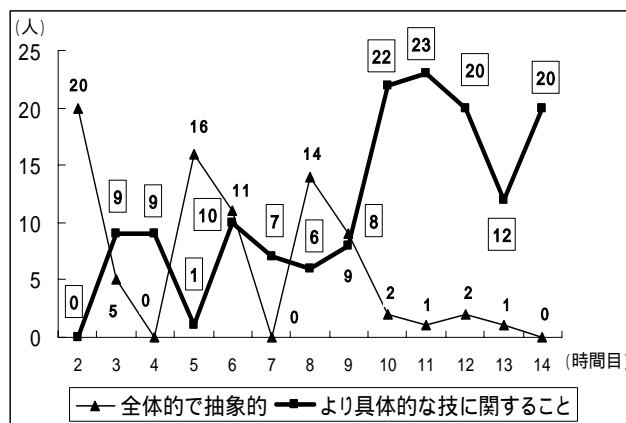


図3-6 技能に関する課題の分類

図3-7は、得意技を身に付けるにあたって、毎時間の課題が「適切である」「適切でない」に教師が分類したものである。「適切である」と判断したものは、得意技や学習者が身に付けたいと思っている技が限定されている記述、「崩し・体さばき・掛け方」など具体的に記述されているものである。「適切でない」と判断したものは、「復習をする」「投げ技や固め技を覚える」「勝ちたい、頑張りたい、上手くなりたい」など抽象的なものである。

「適切な課題」は、時間を追うごとに増えていったが、5時間目の学習内容は、8種類の既習技の復習だったので、「復習を頑張る」など抽象的な課題が多くなった。13時間目は、試合の団体戦を行っており、「チームのために勝ちたい」など試合や意欲に関する抽象的課題が多かった。10時間目から、得意技の学習に入ったため「適切な課題」と「適切でない課題」が大きく逆転し、より適切な課題を立てるようになったことがわかる。

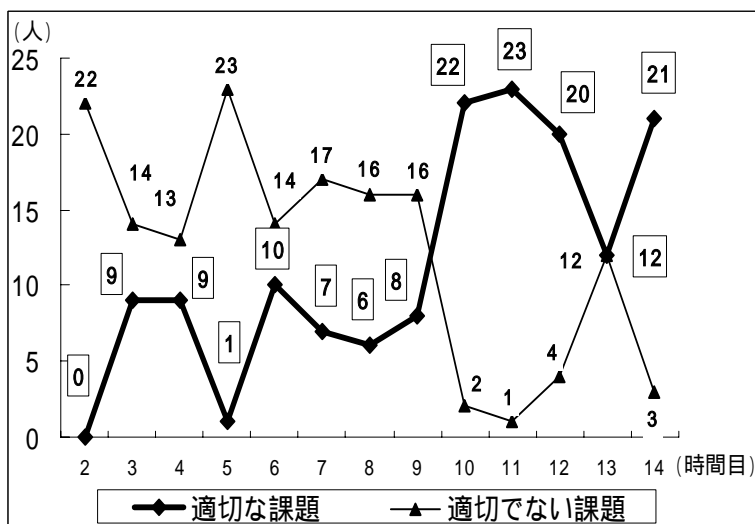


図3-7 課題の適正

(イ) 練習を工夫できたか (学習ノート・事後アンケート・VTR)

図3-8は、個人の毎時の課題に対して、それを解決するための練習方法の工夫が有効であるかを判断し、その数を示したものである。有効な工夫とは、「崩し」ができない生徒が八方崩しマットを利用したり、ITを活用した支援教材で技を確認したりしながら練習した場合や、課題が適切でないと思われる生徒に対しても、立てた課題に対しての工夫が有効であれば数値に含めている。例えば、5時間目の既習技の学習において「2年生の時の復習をしっかりと頑張る」という課題は適切な課題として判断しなかったが、その生徒が自分の欠点を克服するために、教材・教具を有効利用しながら学習をした場合は練習の工夫ができていると判断した。(練習で工夫した内容については図3-9参照)

5時間目は、既習技の復習を行っており、いろいろな教具を有効利用しながら技を練習した生徒が多く、数値が高くなった。また、8時間目からは、新しい技の学習に入ったため、5時間目同様、教具の有効利用が見られ数値が高くなった。

10時間目以降は教具の利用は減ったが、かかり練習や約束練習などで技を磨いた生徒が多く数値が高くなった。別項でも述べるが、生徒はいろいろな教具を使いながらよりよい練習の工夫をしたことがわかる。

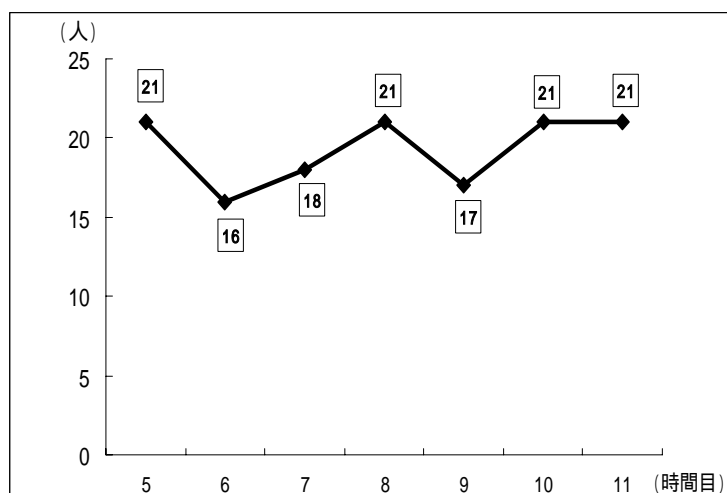


図3-8 有効な練習方法の工夫

図3 - 9は、事後アンケート「練習では、どんな工夫をしたか」について記述したものを分類して示したものである。

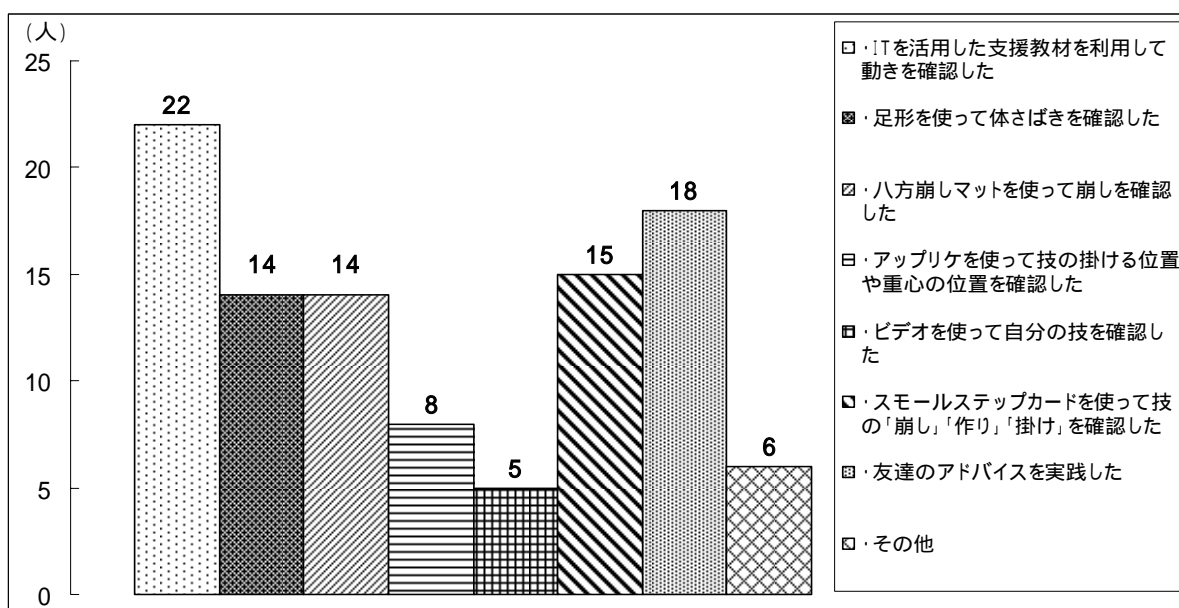


図3 - 9 練習で工夫した内容

練習の工夫で一番多かったのは、ITを活用した支援教材の活用あり、22名とほとんどの生徒が工夫の1つとしてあげている。また、友達のアドバイスを実践したと答えた生徒は18名であった。アプリやビデオについては、練習の工夫としては低い値を示した。また、その他については、「かかり練習を何度も練習した」が3名「自由練習で動きを確認した」「先生のアドバイスを参考にした」「発表のコメントを分析した」という内容があげられた。生徒は、いろいろな教材や学習カードを利用して練習を工夫したことがわかる。

(ウ) 課題解決、自己分析・振り返りができたか(学習ノート・VTR)

図3 - 10は、学習ノートで毎時間立てた課題に対して「どうだった?」という項目に記述をさせ、その記述を分析し、教師が判断をして、課題が解決できたと思われる生徒数の変容を時系列で示した。「なかなかできない」「あまりできない」「課題に対しての記述でないもの」は、解決できてないものとした。

4・13時間目は、固め技の団体戦、試合の団体戦を行っており、課題自体が「関心・意欲・態度」に関することや「試合に勝ちたい」などの課題が多く、1人1試合しか行わないため、負けた生徒は課題が解決できなかったと答えているため数値が下がった。

5・6時間目は、既習技の学習であり、すでに学習している内容であることから、ほぼ課題が解決

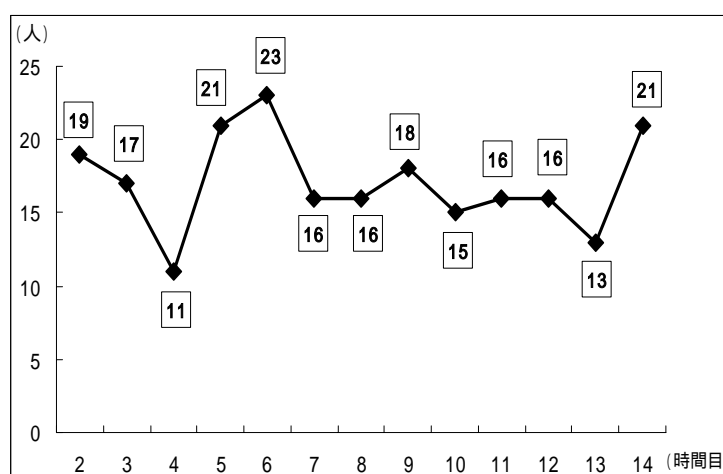


図3 - 10 課題解決の変容

できたことがわかる。また、14時間目の得意技の発表では、ほとんどの生徒が一本を取れるような発表をすることができ、得意技に関する課題が多く、数値が高くなったことがわかる。

図3-11は、学習ノートの「今日わかったこと・感想・新たな課題」の記述内容から、自己分析・振り返りができていると思われる記述を教師が判断し、その数の変容を示したものである。

3時間目と4時間目は固め技の試合を行ったため、勝敗に関わる感想が多く「自己分析ができていない」と判断したため、低い値を示した。また、5・6時間目は、既習技の学習であり、ある程度技の構造の理解ができているため、しっかりと自己分析ができ、数値が上がった。7時間目は中間発表で、他の生徒からの客観的なアドバイスが多かったため、より具体的に自己分析ができていたことがわかる。また、全体的に多くの生徒が自己分析できていたことがわかる。

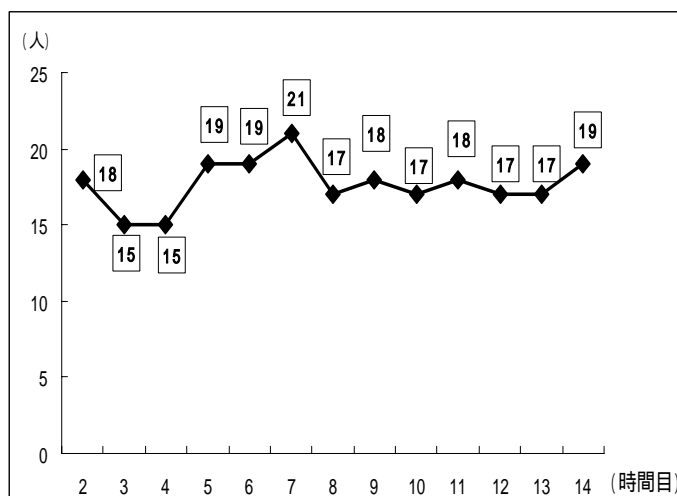


図3-11 自己分析・振り返りができた生徒数の変容

図3-12は、生徒の立てた課題数と図3-7の複合、また、図3-8、3-10、を複合して、投げ技の学習の始まった5日目から得意技の学習の11日目までを表した。なお、12・13時間目も得意技の練習をしているが、試合のためあまり練習時間を取れなかったため、グラフからは除いた。(それぞれのグラフの判断基準については、それぞれの項目を参照)

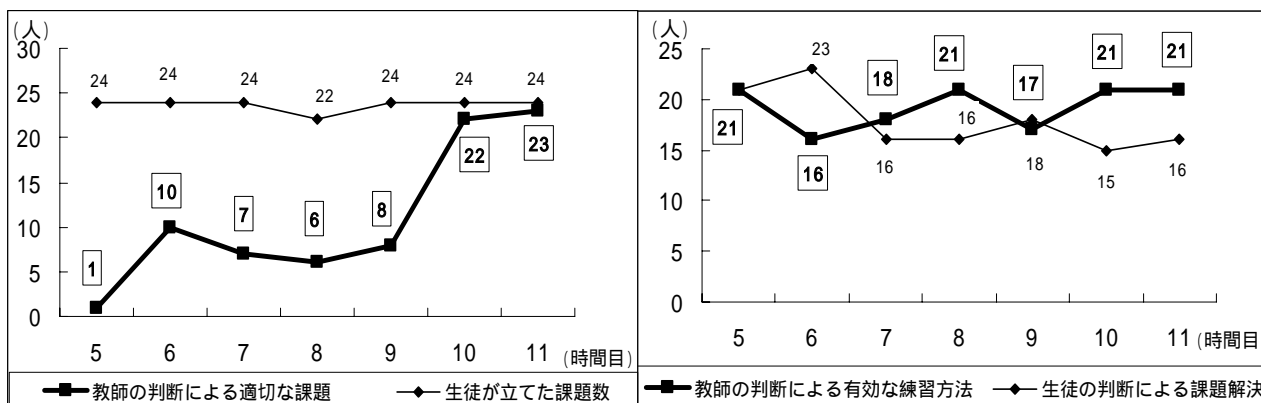


図3-12 生徒の課題数と適切な課題・有効な練習方法と課題解決の関係

各項目でも述べているが、生徒は、時間が進むに連れて、より適切な課題が立てられるようになったことがわかる。前半の既習技の復習や新しい技の学習では、教師がねらいとしていたより具体的な課題と、生徒の立てた課題にはかなりのギャップがあった。

しかし、具体的に課題が立てられない初期の段階でも、生徒は練習方法を工夫し、課題を解決することができていた。特に、5・8時間目は学習内容の変わり目であり、学習する技の種類が多く、生徒は課題を絞りきれないが、逆にいろいろな技を習得するために、様々な練習方法を工夫するため、相対して数値は高くなっていることがわかる。また、前時の学習の反省を基に次時の課題を立てることから、翌日に当たる6・9時間目は、課題は絞られ具体化するが、逆に練習の工夫が少なくなった。5・6時間目は、既習技の学習であるため、課題の解決は高いが、それ以外の時間は、課題解決と、練習の工夫についてはあまり変動を示さなかった。

つまり、課題がしっかりと立てられなくても教師の意図に沿って生徒は授業を行い、技能を習得していくが、今回の授業では、徐々に適切な課題が立てられるようになり、課題を解決することができたことがわかる。

「(1)ア 自ら課題を発見し練習を工夫して課題を解決することができたか」についての考察

単元の前半は、抽象的な内容の課題が多かったが、授業が進むにつれて技術に関する具体的な内容に変化した。これは、技の構造がしっかりと理解でき、それを踏まえて練習することによって、自分の欠点や課題がわかってきたためと考える。特に、今回の授業の目的が「得意技を身に付け一本を目指す」ことをねらいとして行ったため、10時間目以降の得意技の学習においては、前半の学習の積み重ねが、より具体的な課題のベースになったのだと考える。しかも、課題の記述は、ほとんどが「得意技を極めて一本を取るためにはどうしたらいいのか」ということを踏まえて立てた内容が多く、生徒は、自由練習などを通して、技が掛かったり、掛けられたりすることを体感し、相手から「一本」を取りたいなど、より技能を向上させたいという意欲が課題に現れたと考える。

しかし、発表や試合の時間は「チームとして負けたくない」などの抽象的内容が多く、より具体的課題を考えられるようなアドバイスが必要であった。

練習方法の工夫については、できたと答えた生徒がほとんどであった。これは、学習ノート・カード、教具などが何の練習に役立つのかを生徒がしっかりと理解できていたからだと考える。特に、ITを活用した支援教材については、そのまま見本が見られるため、どんな練習をするにおいても有効であったと考える。

課題解決状況は、多くの生徒が課題を解決できたと答えており、それは技能の習得と大きく関連している。4・13時間目の試合の勝敗に関する課題を立てた生徒が多く、負けた場合には達成できなかったと答えているために、数値が下がっている。また、授業の前半は、課題と練習内容が適切でない生徒もいたが、練習方法の工夫と熱心な取り組みによって、技能の習得は見られた。

自己分析・振り返りが、ほぼ高い水準で一定であったのは、グループ学習で教え合いをした結果だと考える。自分ではわからない欠点や良いところを友達に客観的に教えてもらうことができるので、自己分析・振り返りがしやすかったのだと考える。また、技の構造の理解が進んだことも一因と考える。

以上のことから、生徒は自ら課題を発見し練習を工夫して課題を解決することができたと言える。

以上のことから、生徒は、自ら課題を発見し練習を工夫して課題を解決することができたと言える。

「(1) 自ら課題を発見し練習を工夫して課題を解決することができたか」についてのまとめ

以上のように分析した結果、次のように考えることができる。

グループ編成を工夫し、アドバイスカードを記入するなど、互いに教え合うことによって、客観的に自分の欠点を把握することができ、自己分析、振り返りができるようになったのではないと思われる。

アドバイスカードや学習資料を基に、技の構造の理解と自己分析がしっかりできるようになったことによって、より具体的な課題が立てられるようになったと思われる。

技の構造の理解が進むとともに、課題を解決するための教材・教具、学習資料の使い方が理解できるようになったことによって、練習方法が工夫できるようになったと思われる。

課題を立て、練習を工夫して授業に取り組むことによって、しっかりと自己分析・振り返りをするようになり、新たな課題を発見するというサイクルができあがってきたと思われる。

(2) 技能を身に付けることができたか

ア 技能の構造を理解できたか

(ア) 技の崩す方向、体さばき、技を掛ける部位が理解できているか(学習カード、技の構造の理解テストの記述)

図3-13は、事前、事後アンケートで、技の構造の理解について、「崩す方向」「体さばき」「掛け方」に分けて取った結果の変容を示したものである。

事前アンケートで、技の構造の理解に対して「崩す方向」「体さばき」「掛け方」のそれぞれについての回答で「理解している」「やや理解している」の平均は29.2%と低かったが、事後アンケートでは、97.2%と高い数値を示した。

図3-14は、事後に行った「技の構造の理解テスト」の結果である。テストにおいては、1つの技について、「相手を崩す方向」「体さばき」「掛け方」について記述させたものであり、その1つでも間違えていれば、その技に対して構造が理解できていないと判断したものである。(背負い投げ、釣り込み腰、払い腰は新しく学習した技)

事後アンケートにおける技の構造の理解は、平均97.2%であったが、図3-14の「技の構造の理解テスト」の正解率は、90.5%であり、実際は生徒のアンケートよりも理解度が低いが、技の種類に関係なく、平均して構造の理解が進んでいることがわかる。

テストの結果から見ると、新しく学習した技の構造の理解は86.1%であり、既習技に比べると若干理解度は低いものの、3種類の技の中では背負い投げに対する理解度が高かったことがわかる。

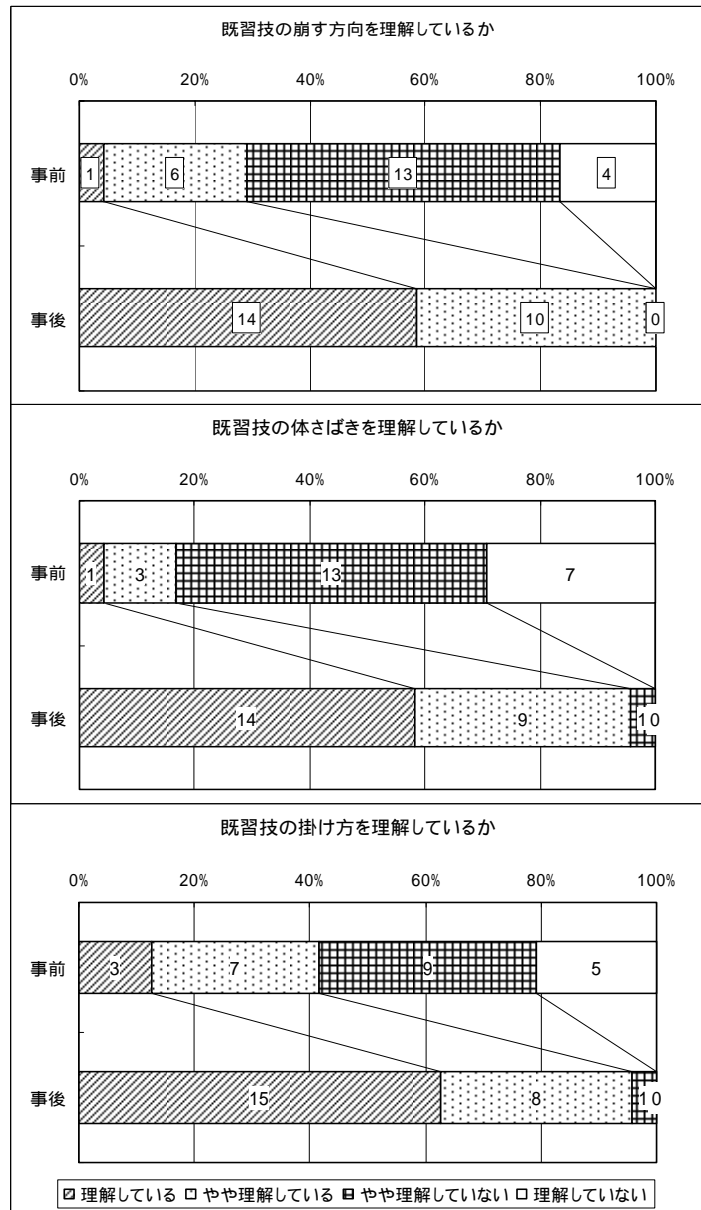


図3-13 技の構造を理解しているか

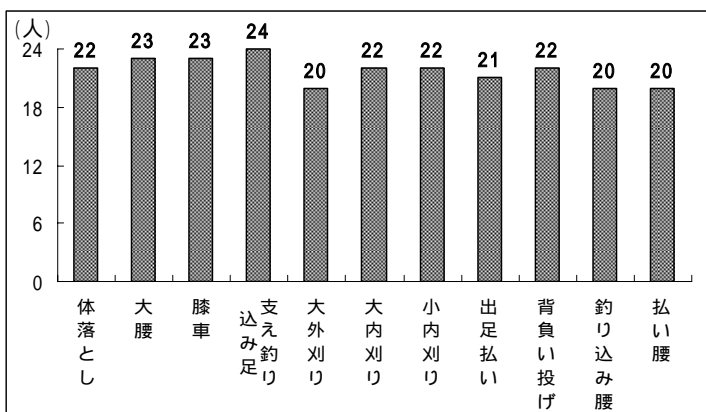


図3-14 技の構造が理解できている生徒数

表3 - 2は、事後に行った技の構造の理解テストにおける正解者数である。それぞれの技を「八方崩しによる崩す方向」「体さばき」「掛け方」について正解者を表にしたものである。「掛け方」における足技については、相手の身体の中のどの部位に技を掛けるのか、手技腰技については、自分の身体の中のどの部位に相手の重心を乗せるのかを記述させた。

なお、釣り込み腰の(1)については、同一者がその技に対して不正解だったものであり、その他の技について、同一者が複数不正解するものはなかった。

表3 - 2 技の構造テスト正解者数

技名 構造	体 落 と し	大 腰	膝 車	支 え 釣 り 込 み 足	大 外 刈 り	大 内 刈 り	小 内 刈 り	出 足 払 い	背 負 い 投 げ	釣 り 込 み 腰	払 い 腰	正 解 率
崩し	24	24	24	24	24	23	23	24	24	23(1)	23	98.5%
体さばき	23	23	23	24	23	24	24	24	23	22	23	97.0%
掛け方	23	24	24	24	21	23	23	22	23	22(1)	22	95.1%

「八方崩し」に対する理解度は、98.5%の生徒が理解している。また、「体さばき」については97.0%、「掛け方」については95.1%の生徒が理解をしている。また、1つの技に対して複数の項目を間違えた生徒は1名であり、技に対して、「崩し」「体さばき」「掛け方」がすべてわからない生徒はいなかった。正解者の分類別合計を見ると、「崩し」「体さばき」「掛け方」の順で、理解度が低下していくことがわかる。また、釣り込み腰、払い腰、大外刈りが、他の技に比べて若干理解ができていないが、大外刈りの掛けについては、「相手の膝の裏を刈る」を正解としたが、間違えた内の3名が、「かかとを刈る」と答え、掛ける部位を若干ずれて回答していた。それらを踏まえても、ほぼ全員の生徒が技の構造を理解できたものと判断できる。

「(2)ア 技能の構造を理解できたか」についての考察

既習技については、事前アンケートの「崩す方向」「体さばき」「掛け方」について取った結果を平均すると29.2%の生徒しか技の構造を理解していなかったが、事後の新しい技についての構造の理解度は、「技の構造の理解テスト」の結果を見ると86.1%であった。

事前の数値においては、昨年の学習から1年経っているため忘れてしまっている生徒も多数いたと考えられるが、1・2年次の学習の行い方と、今回の学習の行い方の違いより、大幅に理解度が上がったものとする。すなわち、1・2年次は、教師主導の一斉指導型で授業を行ってきたが、今回の学習では、課題学習を基に、グループ学習を行った。更に、それぞれの技の理解や技能を習得するための教具を工夫しており、生徒はそれらを有効に利用しながら学習を進めた結果、技の構造に対する理解が飛躍的に向上したのだと考えられる。新しく学習した技については、背負い投げの理解度が高く、これは、新しく3つの技を学習する際に、「まずは、背負い投げを中心に学習し、学習の進み具合によって、釣り込み腰、払い腰の学習に発展していこう」という教師の言葉掛けによるものであると考える。実際の活動場面をVTRで確認をしても、女子においては、背負い投げの学習を中心に行っており、釣り込み腰や払い腰の学習に至らなかった生徒が多かった。

構造の理解をさらに「崩し」「体さばき」「掛け方」に分類して見ると、その理解度に多少の差異が認められたが、これは、学習の進め方によるものとする。今回の技の学習においては、技の練習を分解して、「崩し」「体さばき」「掛け方」の順を追って学習したことにより、そのような結果が出たと考えられる。また、学習カードのスモールステップカードもその順番で作成しているため、生徒達は、技ができない時に何がいけないのかを考えフィードバックしながら学習するため、「崩し」ができたなら「体さばき」、「体さばき」ができたなら「掛け方」と段階を踏んで学習した結果が、理解度の差として現れたと考える。

イ 技能が身に付いたか

(ア) 受け身が身に付いたか (学習ノート記述・事前アンケート)

表3-3は、受け身の達成の評価規準である

表3-3 受け身の達成の評価規準について

受け身の達成の評価の規準
受け身を取る時に、頭部、顔面、腹部などを畳につかないことと、衝撃を手や足を使って畳を叩くことによって分散させること。また、そのタイミングが取れているかを判断する。投げられてもできるかの判断については、投げた技の種類において、適切な受け身を前述の規準にそってできるかどうかを判断する。

基本動作の受け身の学習については、1・2年次に毎時間授業の準備運動として行っているため、生徒はその習熟の判断については良く理解していると考え。今回の授業では、受け身については、2人組で動きながら行ったが、この規準については特に問題はなく妥当だと考えている。

図3-15は、授業後の技の達成表で「できない」「形はできる」「投げられてもできる」と答えた生徒の分類である。

事前アンケートで後ろ受け身ができないと答えた生徒は、17.7%であった。また、形はできると答えた生徒が最も多く58.3%であり、投げられてもできると答えた生徒は25.0%であった。横受け身と前回り受け身についてもほぼ同様の結果であるが、前回り受け身を投げられてもできると答えた生徒の数値が若干他の受け身よりも低かった。また、すべての受け身ができない生徒は8.4%であった。

事後の達成表の結果については、後ろ受け身に至っては、投げられてもできる生徒が100%になった。同様に横受け身も95.8%であり、1人を除く全員が投げられてもできるようになった。しかしながら、前回り受け身については、投げられてもできるという生徒は、事前アンケートよりも大幅に増加したのではあるが70.8%にとどまった。

3つの受け身の習熟に共通していることは、できない生徒がいなくなったということがわかる。

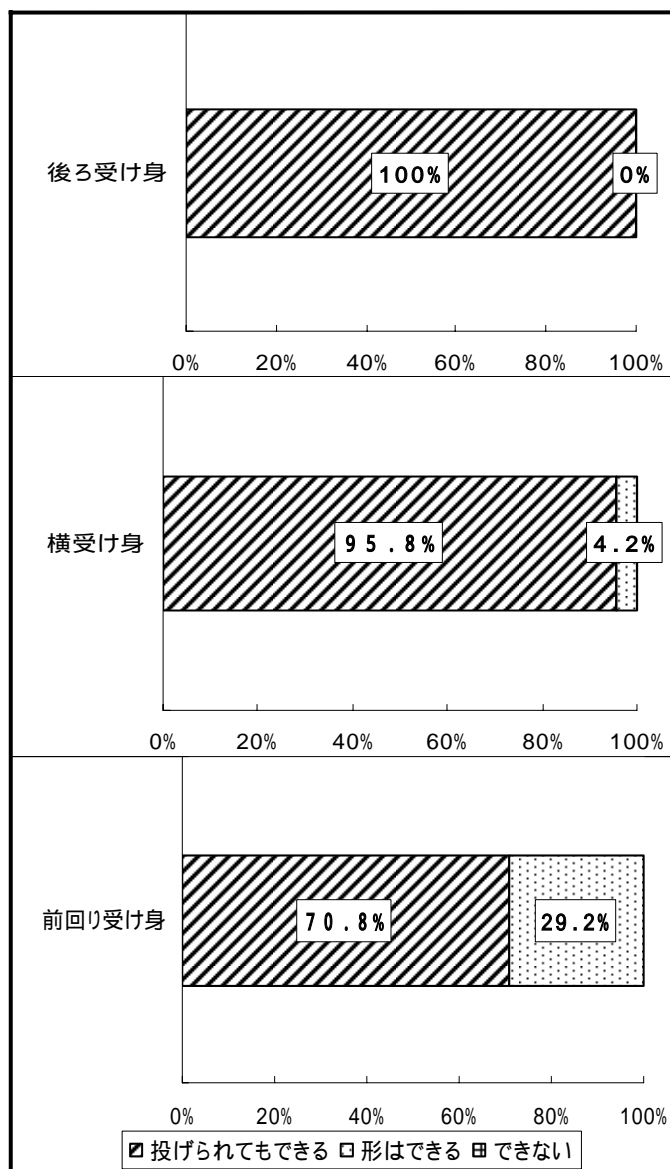


図3-15 受け身の習得率

(イ) いくつかの技を身に付けることができたか(事前アンケート、学習ノート)

生徒の技の習得状況を見るために、事前アンケートを基に、固め技3種類(けさ固め、横四方固め、上四方固め)投げ技8種類(体落とし、大腰、膝車、支え釣り込み足、大外刈り、大内刈り、小内刈り、出足払い)の習得状況を確認し、事後の学習ノートの達成表から、生徒が授業を通してどれだけの技を身に付けたかの変容を見ていくこととする。なお、新しく学習した技は、背負い投げ、釣り込み腰、払い腰である。

表3-4は、技の習得状況について、事前アンケート結果と、授業を通して身に付いた技について、教師、または、他の生徒にその達成の度合いを客観的に判断してもらい、達成表に記述したものととの比較である。また、回答方法が共通でないため、技が身に付いたと判断したものは、回答項目を整理し、次のように判断した。

	事前アンケート	達成表	
身に付いていない	できない(技の構造がわからない)	固め技	投げ技
	できない(技の構造はわかる) 何とかできる	形はできる	形はできる
身に付いた	できる 動きながらできる	5秒抑えられる 20秒抑えられる 30秒抑えられる	止まってできる 動きながらできる 勢いがある

表3-4 事前事後における技の習得状況

対象生徒	事前に身に付けていた技		達成表による授業後に身に付けている技数				
	固め技3種類	投げ技8種類	既習の固め技3種類	既習の投げ技8種類	新たな投げ技3種類	新たに身に付けた技数	現在身に付けている技数
Aさん	3	8	3	8	3	3	14
Bさん	2	0	2	8	3	11	13
Cさん	0	1	3	3	1	6	7
Dさん	3	8	3	8	3	3	14
Eさん	3	8	3	8	1	1	12
Fさん	0	0	2	8	3	13	13
Gさん	2	4	3	6	1	4	10
Hさん	0	7	3	8	1	5	12
Iさん	1	8	3	8	3	5	14
Jさん	2	1	3	4	1	5	8
Kさん	1	0	2	8	3	12	13
Lさん	0	8	3	8	3	6	14
Mさん	0	2	3	6	1	8	10
Nさん	0	2	1	8	3	10	12
Oさん	0	3	3	6	1	7	10
Pさん	0	0	2	7	2	11	11
Qさん	1	2	3	8	1	9	12
Rさん	1	7	3	8	3	6	14
Sさん	2	3	3	7	3	8	13
Tさん	1	5	3	8	3	8	14
Uさん	0	1	1	6	1	7	8
Vさん	0	0	1	3	2	6	6
Wさん	0	1	1	7	3	10	11
Xさん	1	0	3	7	2	11	12
平均	1.0	3.3	2.5	6.9	2.1	7.3	11.5

事前に身に付けていた技の項目を見ると、固め技を1つも身に付けていない生徒は11名であり、投げ技では6名、また、両方とも身に付けていない生徒が3名であった。達成表の、既習の固め技3種類・既習の投げ技8種類の項目を見ると、すべての生徒が1つ以上技を身に付けたといえる。また、1・2年次にまったく技を身に付けていなかった生徒の変容ではFさんが13種類、Pさんが11種類、Vさんが6種類と、多くの技を身に付けることができた。新たに身に付けた技数を見ると平均7.3種類であり多くの生徒がこの授業を通して技を身に付けることができた。また、この項目は、1・2年次にあまり技を習得できていなかった生徒ほど、数値が高くなっている。最終的に、現在身に付けている技数を見ると、平均11.5種類であり、学習した技は、14種類であるため技能の習得率は非常に高いことがわかる。また、すべての技を習得した生徒も6名いることがわかる。

(ウ) 得意技が身に付いたか(学習カード・学習ノート・VTR)

表3-6は、14時間目に行った得意技発表会の生徒の相互評価カードの一部と、VTRを基に教師が評価したもの、学習ノートの達成表の複合表である。

発表会は「止まった状態から技を掛ける」「動きながら技を掛ける」「連絡変化を使って技を掛ける」に対して表3-5の評価内容を基に相互評価した。また、教師の評価についても同様の評価規準で行った。発表はグループで行い、評価者が複数いるため、それぞれの評価を合計し、延べ人数として表してある。生徒個々によって評価人数合計が違うのは、グループの人数の違いによる。一本の条件は、「技を掛けるか、相手の技をはずして、相当な勢い、あるいは弾みで、だいたいあおむけに倒した時」であるが、生徒には、勢いがあることを意識させながら発表を評価させた。

表3-5 発表会の評価方法

友達の発表を見て評価をします。評価はABCで評価し、内容は次の通りです。
A:「崩し」「体さばき」がしっかりとできていて「一本」になる。
B:「崩し」「体さばき」がだいたいできているが、勢いがなく、「一本」にならない。
C:技がかからない。

表3-6 得意技発表生徒相互評価・教師評価・達成表の複合

得意技発表会生徒の相互評価					教師の評価	技の達成表
対象生徒	発表した技	A	B	C		
Aさん	背負い投げ	18			A	勢いがある
Bさん	大外刈り	1	17		B	動きながらできる
Cさん	大外刈り		18		B	動きながらできる
Dさん	大外刈り	18			A	勢いがある
Eさん	背負い投げ	18			A	勢いがある
Fさん	体落とし	5	4		B	勢いがある
Gさん	大外刈り	1	16	1	B	動きながらできる
Hさん	大内刈り	8	1		A	勢いがある
Iさん	支え釣り込み足	12			A	勢いがある
Jさん	大内刈り	6	3		A	勢いがある
Kさん	小内刈り	7	2		A	勢いがある
Lさん	大外刈り	12	6		A	勢いがある
Mさん	体落とし	4	8		B	動きながらできる
Nさん	出足払い	9	1		A	勢いがある
Oさん	大外刈り	10	2		A	勢いがある
Pさん	大腰	8	4		B	勢いがある
Qさん	体落とし	11	1		A	勢いがある
Rさん	背負い投げ	12			A	勢いがある
Sさん	大外刈り	9	3		A	勢いがある
Tさん	体落とし	9	3		A	勢いがある
Uさん	大外刈り	6	3		A	勢いがある
Vさん	大外刈り	10	2		A	勢いがある
Wさん	大外刈り	1	11		B	勢いがある
Xさん	体落とし	2	10		B	勢いがある

生徒の相互評価と教師の評価はほぼ一致している。技の達成表と一致していない生徒については、発表会ではできなかったが、日々の授業の中でできているということである。例えば、Pさんは発表会のVTRを見るとスピードがないが、中間発表の大腰を見ると勢いよく掛けることができている。また、Xさんなども練習の時にはしっかりと投げることができている。そのようなことを踏まえると、発表会において得意技を身に付けたと判断されるものは教師の評価でAをつけた16人であり、授業全体を考えた技の達成表を見ると20人であるといえる。この表から総合的に判断すると、得意技を見に付けたといえる生徒は全員であり、そのうち一本を取れそうな生徒は20人であることがわかる。また、相互評価にはそれぞれにコメントを書かせているので、次に例示するが、勢いに関する記述を抜粋すると55回にも及んだ。

表3 - 7は、得意技発表会の生徒相互評価のコメントの抜粋である。教師が判断して、評価としてBをつけたうちの数名の生徒に対してのコメントである。

表3 - 7 得意技発表会生徒相互評価コメントの抜粋

生徒 A さん	・もう少し勢いがあればよかった。・形はよかったが、勢いがあまりなかった。相手を崩すのがあまりできていないと思った。あともう少し勢いがほしい。
生徒 B さん	・形がきれいよかった。相手の腰にしっかりと回せていた。連絡変化は、もう少し勢いがあった方がいいと思う。・動きながら大腰をした時、すごくきれいに決まっていた。・連絡変化の時にあまりスピードがない時もあったけど、他のものはよかった。
生徒 C さん	・もう少し勢いがあればよかったと思う。連絡変化はもう少し崩しができていればいいと思う。・少し遠慮気味なのでもっと積極的に。・慎重でいいと思う。けど、きちんと一本取れるように掛けた方がいいかも。もう少し勢いがあった方がよかった。けど、形はとてもきれいだった。
生徒 D さん	・もう少し勢いあって、速く投げた方がいい。・すべて勢いがなかった。崩し、掛けはOKだった。あとは勢いだけ。・やっぱり形がとても良くできていました。でも連絡変化はちょっとスピードがなかったです。

このように、生徒のコメントを見ても、技に対して「崩し」「体さばき」「掛け方」が意識され、「一本」の条件の勢いに着目して評価されていることがわかる。

「(2)イ 技能が身に付いたか」についての考察

受け身の学習については、1・2年次にも学習しているため、事前の段階で、できないという生徒はあまりいなかった。しかしながら、投げられてもできると答えた生徒も少なく、ほとんどの生徒が形はできるとどまっていた。授業後の達成表を見るとほとんどの生徒が投げられてもできると答えており、また、すべての生徒が受け身をできると答えている。これは、別項でも述べるが、従来受け身の指導を単独で反復練習させていたものを、今回の学習では、2人組でいろいろな技から動きながら受け身を練習するという方法を取ったためであると考えられる。

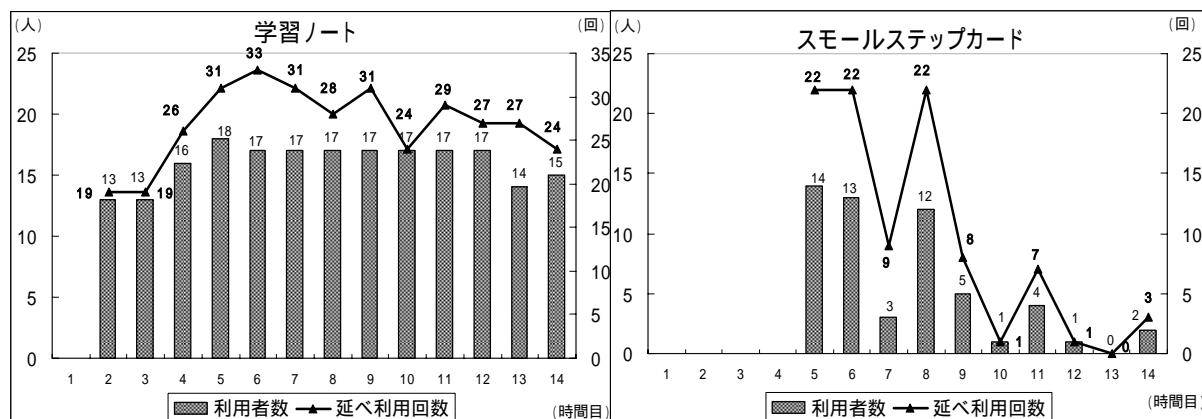
技の習得状況においても1人平均11.5種類の技を身に付けており、学習した技が14種類であるのを考えてもかなり高い習得率であると考えられる。これは、技の構造がしっかりでき、それを体得するために生徒個々がいろいろと練習を工夫していったことによるものと考えられる。

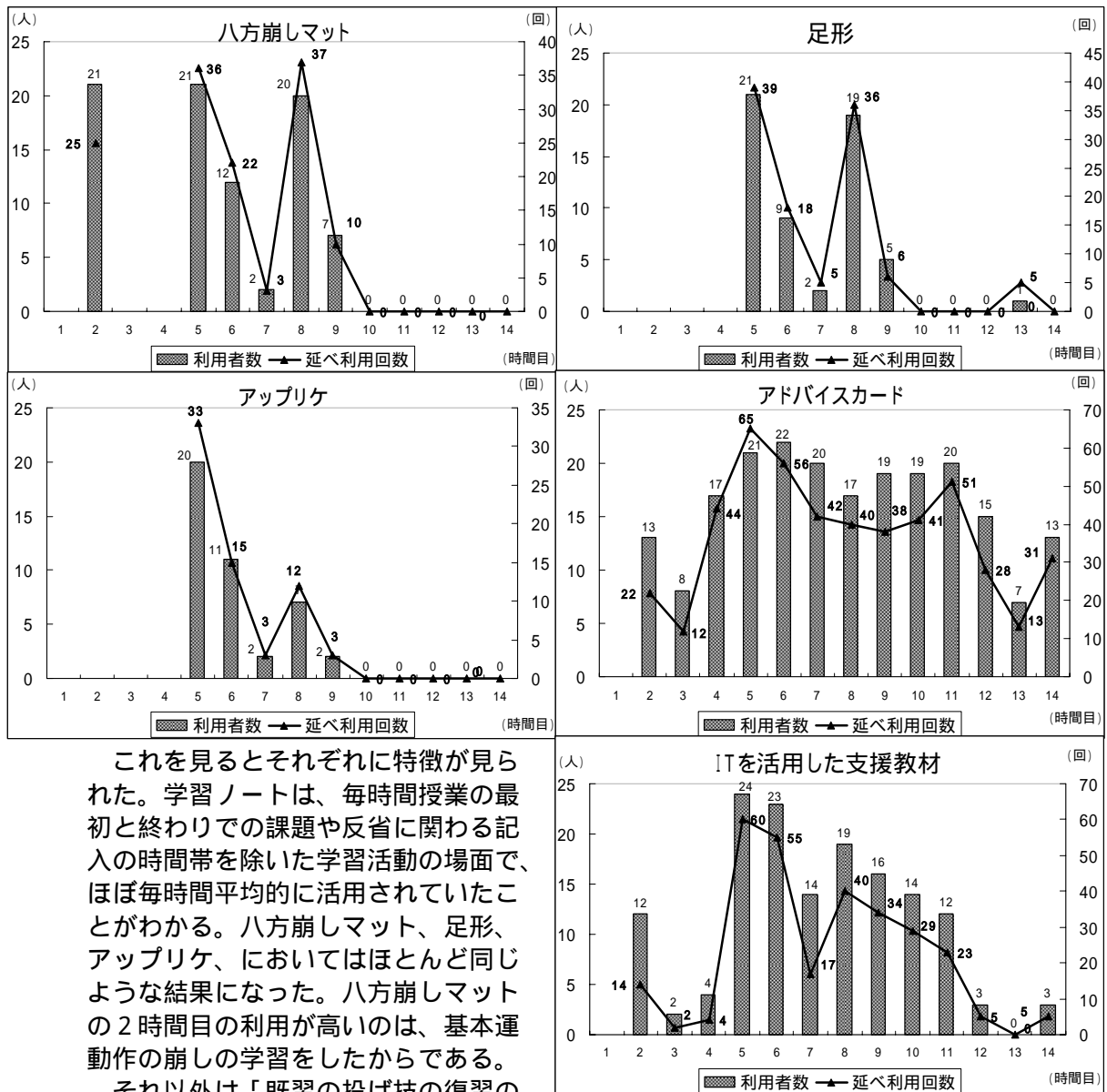
得意技の習得においては、発表会のVTRを見ても、「崩し」「体さばき」「掛け」がしっかりとできており、全員が得意技を身に付けていると考えられるが、「一本」を取るという観点から見ると、形はできているが勢いがないという生徒が数名いた。これは、筋力的なものと、消極的で全力を出し切れないという部分が影響していると考えられる。

ウ 学習ノート・カード、教材などが技能の習得に有効だったか

(ア) 学習ノート・カード、教具、グループ編成の工夫は技能の習得に有効だったか(学習ノート・カード・事後アンケート)

図3 - 16は学習カード・ノート、教具の利用状況を毎時間の利用人数と延べ利用回数をグラフにしたものである。





これを見るとそれぞれに特徴が見られた。学習ノートは、毎時間授業の最初と終わりでの課題や反省に関わる記入の時間帯を除いた学習活動の場面で、ほぼ毎時間平均的に活用されていたことがわかる。八方崩しマット、足形、アppリケ、においてはほとんど同じような結果になった。八方崩しマットの2時間目の利用が高いのは、基本運動の崩しの学習をしたからである。それ以外は、「既習の投げ技の復習の初日」の5時間目と「新しい技の学習の初日」の8時間目に高い利用率を示し、7時間目は中間発表会を行ったため利用状況が悪かった。また、「得意技の学習」が始まった10時間目以降はほとんど利用されなかったことがわかる。スモールステップカードも同じような傾向を示したが、10時間目以降も若干ではあるが使われ続けていたことがわかる。

図3-16 学習ノート・カード、教具の利用状況

ITを活用した支援教材については、2時間目の利用が高く、3・4時間目はほとんど使われなかった。しかしながら5・6時間目に至ってはほとんどの生徒が利用し、その利用頻度も高かった。また、7時間目の利用が落ち込むが、8・9・10・11時間目は、高い利用状況であったことがわかる。アドバイスカードに関しては、3・13時間目の利用が落ち込んでいるが、それ以外の時間はほぼ高い利用状況であったことがわかる。また、ここには載せていないが、試合と発表の時には、アドバイスをアドバイスカード以外に相互評価表や試合のカードに記入させたため、3時間目68回、4時間目125回、7時間目238回、12時間目71回、13時間目125回、14時間目95回をさらに延べ利用回数に加算することとなる。それを含めて考えると、授業全体のアドバイス数は1,205回になり、1時間の授業1人当たりの平均は3.9回となる。

図3 - 17 は事後アンケート「次の内容は技能の習得に有効か」についてのグラフである。

このグラフを見ると、ITを活用した支援教材、学習ノート、発表、試合のコメントについては、技能の習得に有効であったと感じている生徒が多いことがわかる。特に、ITを活用した支援教材については、ほとんどの生徒が有効であると答えた。図3 - 16 の利用状況と踏まえて考えると、利用状況の高いものほど生徒は有効であると答えていることがわかる。

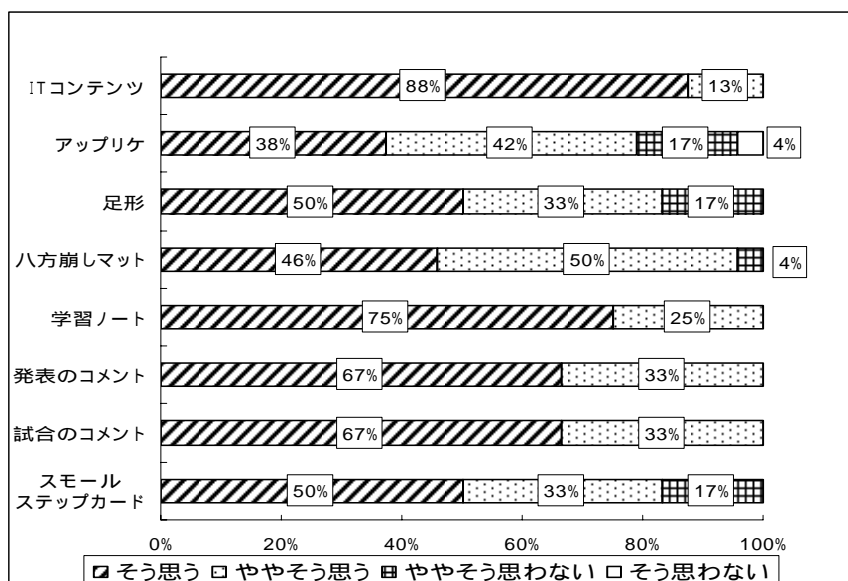


図3 - 17 学習ノート、教材などが技能の習得に有効か

表3 - 8 は、教材・教具、学習ノート・カードの利用状況を活動場面に応じて右のように整理したものである。

	生徒の半数以上が利用
	生徒の3分の1以上、半数未満が利用
	生徒の3分の1未満が利用
x	利用者なし

表3 - 8 教材・教具、学習ノート・カードの時間別利用状況

時間	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
学習内容	・基本動作 ・固め技の復習 ・3・4は試合			投げ技の復習		中間発表	新しい技の学習		・得意技 ・連絡変化の学習 ・12・13は試合			発表会	
学習ノート													
スモールステップカード	x	x	x										x
八方崩しマット		x	x						x	x	x	x	x
足形	x	x	x						x	x	x		x
アプリケ	x	x	x						x	x	x	x	x
アドバイスカード													
ITを活用した支援教材													x
発表のコメント	x	x	x	x	x		x	x	x	x	x	x	
試合のコメント	x			x	x	x	x	x	x	x			x

八方崩しマットは「崩し」、足形は「体さばき」、アプリケは、「掛け方」について理解したり、体得したりするために、スモールステップカードとITを活用した支援教材は技の一連の動作を確認したり、分解写真を見ながら練習できるように作成した。生徒の利用状況を見ると、教師がそれぞれに意図して作成した学習内容の時に生徒は利用していた。

図3 - 18は、事後アンケートによる「グループで教え合いをすることは学習を進めるにあたってよいことだと思うか」についての回答であり、また、その理由の記述を分類したものである。

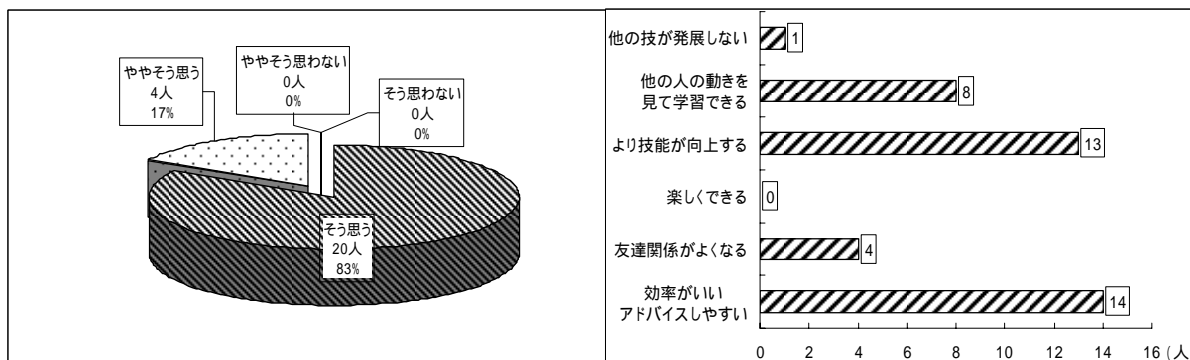


図3 - 18 「グループで教え合いをすることは学習を進めるにあたってよいことだと思うか」とその理由

事後アンケートによる「グループで教え合いをすることは学習を進めるにあたってよいことだと思いますか」についての回答を見ると 83%の生徒が「そう思う」と答えており、「ややそう思わない」「思わない」と答えた生徒はいなかったことがわかる。また、その理由としては、「自分のできていないところや悪いところがある」という内容を記述した生徒が 14 名「教え合いをすることによって技能が向上する」という内容を記述した生徒が 12 名いた。また、「楽しくできる」「友達関係がよくなる」と答えた生徒はそれぞれ 4 名と 8 名であった。グループ学習の利点は、自分の欠点の把握や技能の上達に大きく役立っていると生徒は考えていることがわかる。

図3 - 19は、事後アンケートによる「10 時間目から、同じ系統の得意技を学習する者同士グループ編成をしないことは学習を進めるにあたってよいことだと思うか」についての解答であり、その理由の記述を分類したものである。

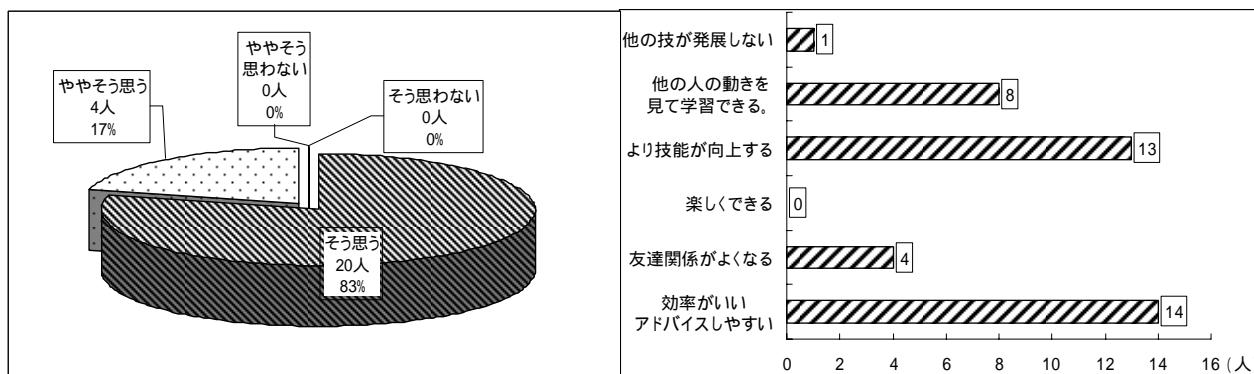


図3 - 19 「同じ系統の得意技を学習するもの同士にグループ編成をしないことは学習を進めるにあたってよいことだと思うか」とその理由

事後アンケートによる「10 時間目から、同じ系統の得意技を学習する者同士グループ編成をしないことは学習を進めるにあたってよいことだと思うか」についての解答では、「そう思う・ややそう思う」と答えた生徒が 100%であり、技の系統と得意技を基にした「等質グループ」に編成し直したことをよいことと捉えていることがわかる。また、その理由については、「学習の効率がよいし、同じ技を練習するのでアドバイスしやすい」という内容を記述した生徒が 14 名、「より技能が向上する」と答えた人は 13 名「他の人の動きを見たり、他の人のアドバイスを聞いたりしながら練習できる」と答えた人が 8 名であった。これは、よりよく技能を習得することであり、生徒たちは、「等質グループ」は技能の向上に役立つと考えていることがわかる。その反面、「楽しくできる」と答えた生徒は 0 名「友達関係がよくなる」と記述した生徒は 4 名であった。また、「他の技が発展しない」と答えた生徒も 1 名いることがわかる。しかし、10 時間目以降の生徒の自己評価では、全員が授業を楽しんでいると答えている。

図3 - 20 は、事後アンケート「今回の授業では、受け身の練習を2人組で動きながら行ったが、1人で行うよりも練習の効果が上がるか」についての割合と人数を示したグラフである。

1・2年次の学習においては、基本動作の受け身の学習は、単独で反復練習を行っていたが、今回の学習では、2人組で、動きながら学習を行った。それに対して、87%の生徒が効果は上がると答えていることがわかる。また、効果がないと答えた生徒はいなかったことがわかる。

図3 - 21 は、事後アンケート「今回の授業では、受け身の練習を2人組で動きながら行ったが、1人で行うよりも効果が上がるか。また、その理由」の理由の部分の記述を分類したものである。表3 - 9 は、その記述の一部を抜粋したものである。

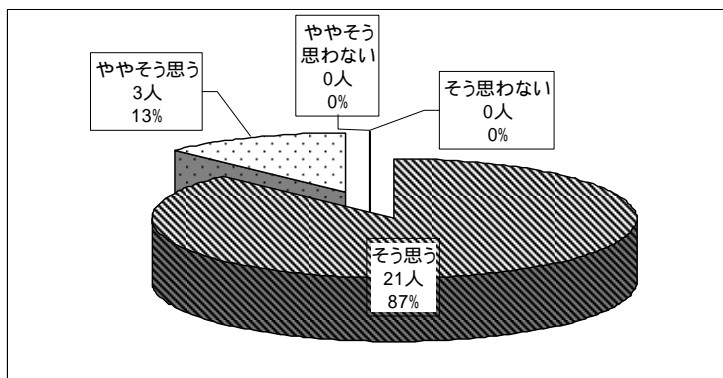


図3 - 20 2人で動きながら行う受け身の学習は、1人で行うよりも効果が上がるか

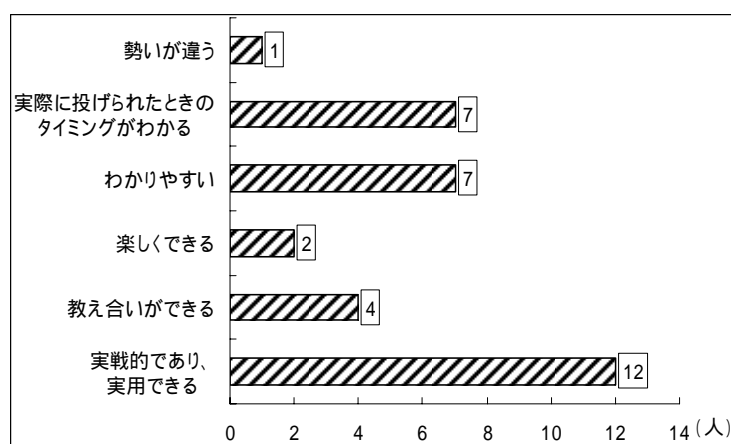


図3 - 21 「2人で動きながら行う受け身の効果について」の記述の分類

表3 - 9 事後アンケート「2人で動きながら行う受け身の効果について」の記述内容の抜粋

受け身の練習を2人組で動きながら行う効果についての記述
動きながらやるから自由練習の時などにすぐ使えると思う。誰かに投げられることですぐにできるようになる。
危ない受身をした時など、2人で注意していき、より良い受け身ができるようになると思うから。
試合を想定して、どんな時にどんな受け身をやるかわかる。勢いが2人でやった方があっていい。2人でやると本当に技を掛けられたような感じでできるので技を掛けられても受身がちゃんとできるようになるから。
1人でやると本当はかかってないからよくわからなかったけど、2人でやると本当に投げられた時の感じと同じですごく練習になる
実際に組んでみて受け身の練習をすると、1人でやるよりも感覚や雰囲気が違うので、実践的でよい。
2人でやった方が楽しいし、タイミングも合わせやすい。

2人で行う受け身の利点について、「実践的であり、実用できる」と記述した生徒が12名であり、「実際に投げられた時のタイミングがわかる」「わかりやすい」と記述した生徒がそれぞれ7名であった。また、「1人でやる受け身と勢いが違う」と答えた生徒が1名であり、技能の効果が上がるという記述を書いた生徒がほとんどであることがわかる。また、「楽しくできる」「教え合いができる」という記述をした生徒も数名いた。

「(2)ウ 学習ノート・カード、教材などが技能の習得に有効だったか」についての考察

学習ノートの利用について

全員が有効であったと答えている。またその利用状況を見ても毎時間平均して使われている。これは、授業の展開が、課題を立て、練習を工夫し、自己評価するという一連の過程を毎時間行ったことによるものと考えられる。また、毎日記入できるようにしてあるため、自分の技術の変化を把握し、次のステップを考えることができたと思われる。

スモールステップカード、八方崩しマット、足形、アプリケについて

授業後のアンケートでは、あまり有効でなかったと答えた生徒が数名いるが、これは、授業全体を考えての回答であると考えられる。利用状況を見るとそれらのカードや教具は、5・6時間目と8・9時間目に集中している。これは、5・6時間目は、既習技の復習を8・9時間目は新しい技の学習を行ったことによるものと考えられる。これらの教具は、技の構造を理解し、効果的に学習することをねらいとして作成しており、「崩し」「体さばき」「掛け方」が理解できた生徒は、これらの教具を使わなくなったと考える。特に、10時間目以降の得意技の学習に入った段階では、まったくといって使われていない。また、7時間目が低下しているのは、発表会を行ったためであると考えられる。

ITを活用した支援教材について

ほとんどの生徒が学習に有効であると答えており、固め技の復習のときにはあまり利用されなかったが、投げ技の学習に入った5時間目以降の使用頻度は非常に高く、ほとんどの生徒が活用していた。授業のVTRを見ても、動画を見て動きを確認し、教え合いをしながら、かかり練習・約束練習をするというスタイルで学習している生徒が数多くいた。

アドバイスカードについて

毎時間数多く利用されていた。また、アドバイスの総数を累計すると、この単元内で1,205回にも及んでいる。このように、生徒たちは、学習ノート・カード、教具を有効利用しながら、練習方法を工夫し、安全に配慮して相手と練習し、教え合いを通して技能を習得していったと考える。

グループ編成について

最初は、「異質グループ」で編成したが、生徒は技能の習得に大いに役立ったと考えている。また、得意技の学習では、「等質グループ」に編成をしておいたが、このことについてもより効果的に練習できたと答えている。「等質グループ」では、楽しさや人間関係がよくなるという記述が減ったが、これは、すでに「異質グループ」で体験しており、「等質グループ」では、それは当たり前として考え、より技能の向上を求めていったと考える。10時間目以降の生徒の自己評価を見ると、全員が授業が楽しかったと答えている。

以上のことから、生徒は、技能を身に付けることができたと考えられる。

「(2)技能を身に付けることができたか」についてのまとめ

以上のように分析してきた結果、次のように考えることができる。

ITを活用した支援教材やスモールステップカードを活用することによって、技の構造が理解できるようになったと思われる。

グループ編成を工夫して効果的に教え合いをすることによって、技のできばえがわかるようになったと思われる。

技の理合いに基づいて「崩し」「体さばき」「掛け方」を練習できるように教材・教具を有効利用することによって、練習方法を工夫しグループで教え合いを通して、技能を習得することができたと思われる。

* 理合い・・・筋すじ

2人組でいくつかの技と関連させて受け身の練習をすることによって、技と関連した受け身ができるようになり、投げられることに対する恐怖心が減り、より積極的に授業に取り組めるようになったと思われる。

(3) 相手を尊重し、安全に配慮して活動できたか

ア 相手の立場になって考えることができたか

(ア) 互いにアドバイスができたか (学習ノート・カード・事前、事後アンケート)

図3-22は、事前・事後アンケート「授業では、友達と教え合いができましたか」についての変容を示したものである。

事前では、「できた」と答えた生徒は8名であったが、事後では22名まで増えている。また、事前では、「できなかった」「ややできなかった」と答えた生徒が6名だったのが「ややできなかった」の1名に減少したことがわかる。

図3-23は、アドバイスカードの利用状況の人数と述べ利用回数の変容を示したものである。

3・13時間目の利用が落ち込んでいるが、それ以外の時間はほぼ高い利用状況を示した。また、ここには載せていないが、試合と発表の時には、アドバイスをアドバイスカード以外に相互評価表や試合のカードに記入させたため、3時間目

68回、4時間目125回、7時間目238回、12時間目71回、13時間目125回、14時間目95回をさらに延べ利用回数に加算することとなる。それを含めて考えると、授業全体のアドバイス数は1,205回になり、1時間の授業1人当たり平均は3.9回となる。

図3-24は、アドバイスの内容を分類したものである。試合、発表のアドバイスやコメントを除き、練習時に行われたアドバイスについて累計したものである。

生徒の自己評価では、アドバイス数の合計は483回であるが、内容の合計は472回になっている。これは、同じ内容のアドバイスを複数の生徒から受けた場合は、その数を自己評価では、回数に加算しているが、内容の記述は1つにまとめているからである。記述内容で一番多かったのは、「意欲・態度・励まし・感想」などについての記述であり、その総数は135回であった。次いで、「技のポイント・作戦」が多く、一番少なかったのは「体さばき」に関するものであったことがわかる。

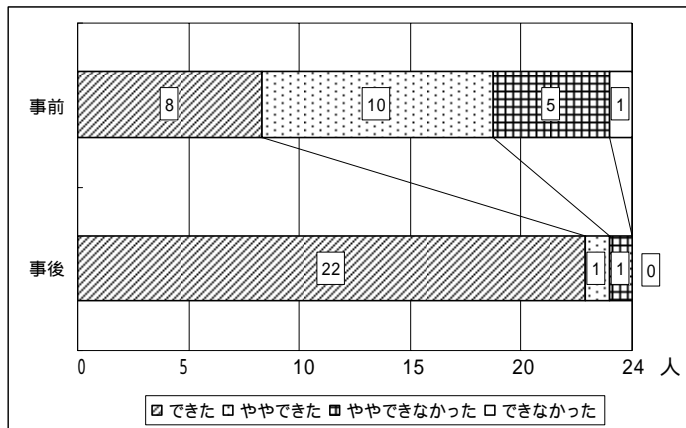


図3-22 友達との教え合いができたか

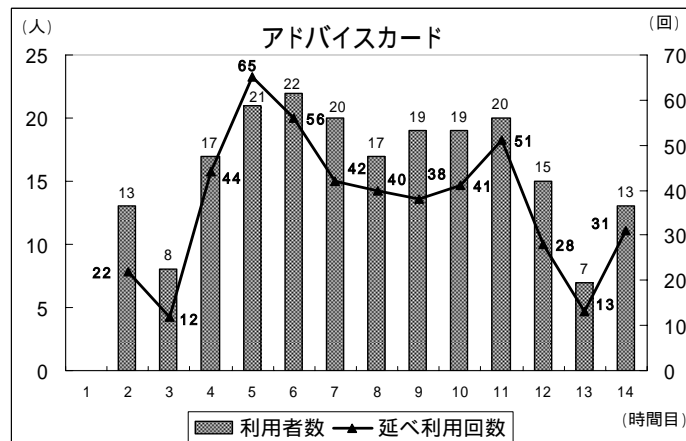


図3-23 アドバイスカードの利用状況

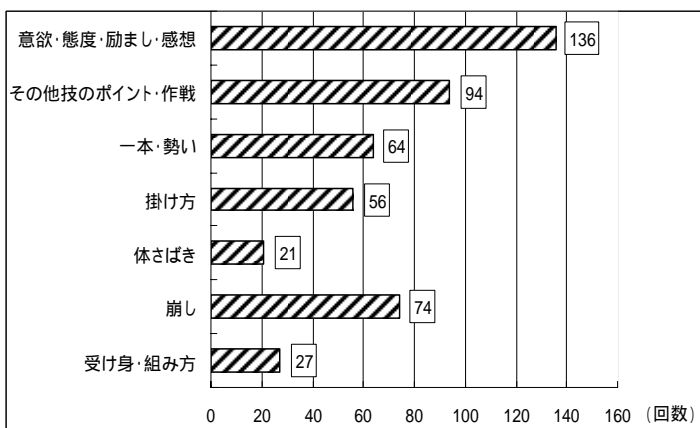


図3-24 アドバイスの内容の分類

(イ) 相手を尊重して礼儀作法ができたか (事前、事後アンケート)

図3 - 25は、事前・事後アンケート「授業では、相手と練習する時、はじめや終わりなど必ず礼をすることができたか」についての変容を示したものである。

事前と事後では、ほとんど数の変動はなかった。事前で「ややできなかった」と答えた生徒が1名いたが、事後では、全員が「できた」「ややできた」とこたえていることがわかる。

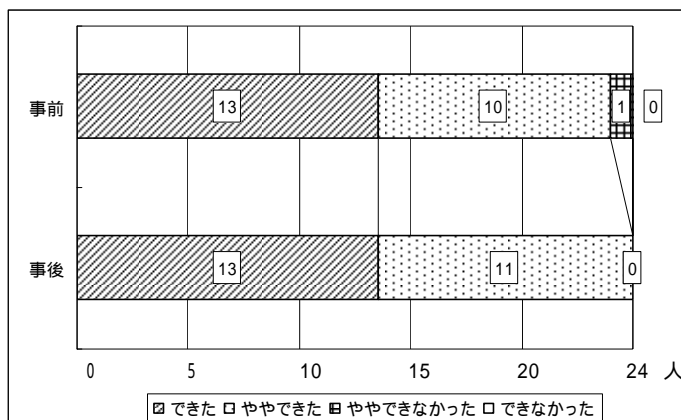


図3 - 25 相手と練習するとき、はじめや終わりなど必ず礼をすることができたか

図3 - 26は、事前・事後アンケート「授業では、礼をする時その意味をしっかりと理解し、考えて礼をしていたか」についての変容である。

事前では、「していた」と答えた生徒が4名「ややしていた」では9名と、約半数の生徒が意味を理解して考えて礼をしていた。事後では、「していた」と答えた生徒が18名「ややしていた」と答えた生徒が6名と、全員が礼の意味を理解し、考えて礼をすることができたと考えていることがわかる。

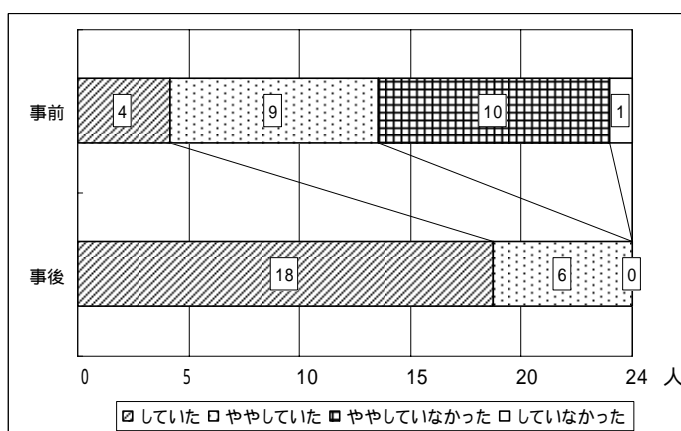


図3 - 26 礼をするときその意味をしっかりと理解し、考えて礼をしていたか

図3 - 27は、事後アンケート「どんなことを考えて礼をしていたか」に対して記述したものを分類してその延べ数を示したものである。

練習の時・試合の時ともに「相手に対して感謝」という記述が、試合の時が16名、練習のときが21名と多かった。また、試合時は、「頑張ろうなどの意欲」などの記述が13名と多く、「自分を律する」と答えた生徒が7名いた。「道場や先生に感謝」「安全にできるように」と考えた生徒も少数いた。このように、生徒たちは、礼をする時にいろいろなことを考えて礼をしていたことがわかる。

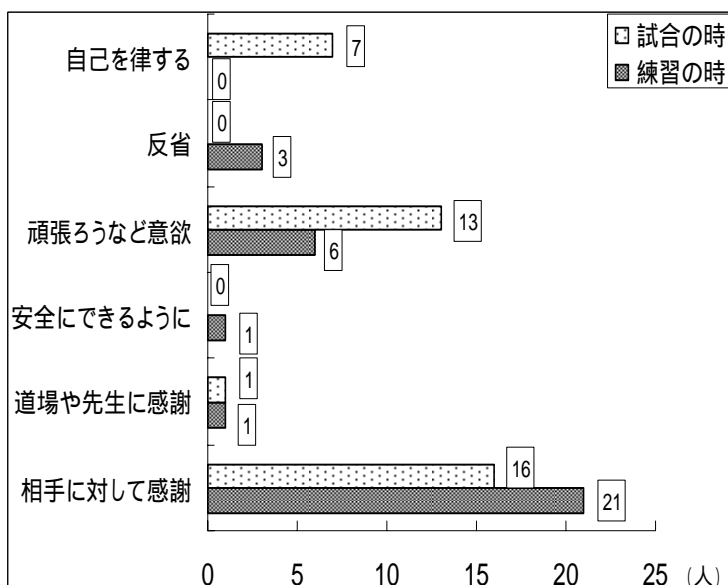


図3 - 27 どんなことを考えて礼をしていたか

「(3)ア 相手の立場になって考えることができたか」についての考察

友達と教え合いができたかという事前・事後のアンケートを比べると、明らかに教え合いができたという生徒が増えた。これは、グループ学習を基にした結果だと考える。アドバイスカードの利用状況を見ても2時間目～14時間目の間に延べ483回のアドバイスカードが利用されている。また、試合や発表の際には、学習カードにアドバイスやコメントを書かせたため、その数を含めると授業全体でのアドバイス数は1,205回にも及んだ。その内容を見ても、グループの仲間がいかに技能を上達するかを考えたアドバイスや励ましのアドバイスが多く見られた。これは、試合の方法を団体戦形式で行わせたことも大きく影響していると考えられる。実際に、チームが勝つように、試合前の練習では、作戦に関するアドバイスも多く見られた。また、仲間が何をできないのかについて考えながらアドバイスし、お互いに向上しようとする姿が見られた。

相手を尊重して礼法ができたかに関しては、礼をしていると答えた生徒は事前事後でほとんど変わらなかったが、そこに、礼の意味を理解し、考えて礼をしていたかということに関しては、大きな変容が見られた。100%の生徒が礼に心をこめるようになった。これは、まさに教え合いが大きく影響していると考えられる。生徒は、ただ練習するのではなく、相手が自分のことを考えて練習してくれていると感じ取り、それに対して感謝する姿勢が身に付いたと考える。その考え方が深まるにつれて、試合などでは、相手に対して勝ち負け関係なく敬意や感謝を表す自分を律する礼ができる生徒が増えたのだと考える。

イ 安全に配慮して活動できたか

(ア) 練習や試合を行う時に、練習場や周囲、相手の安全に配慮して活動できたか
(学習ノート・事前、事後アンケート)

図3-28は、事前・事後アンケート「授業では、安全に注意して活動できたか」についての変容を示したものである。

事前では、「できた」「ややできた」と答えた生徒が全体の62.5%に対して、事後は79.2%まで上昇した。事前では、「できなかった」と答えた生徒が1名いたが、事後ではいなくなった。多くの生徒が安全に注意して活動したことがわかる。

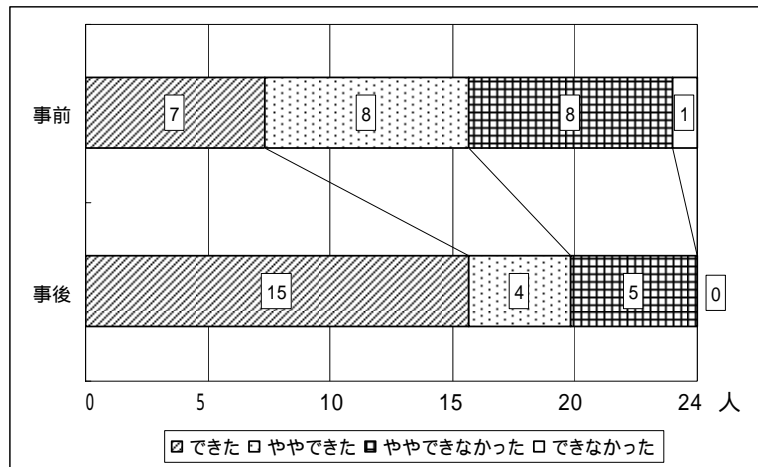


図3-28 授業では、安全に注意して活動できたか

表3 - 10は、事後アンケート「授業では、安全に注意して活動できたか」についての設問で、「どんなことに注意して活動したか」について書かれた記述内容を「練習場や周囲の安全」「相手に対しての安全」に分類したものである。

表3 - 10 安全に対してどんなことを考えたか事後アンケートの記述内容

練習場や周囲の安全	相手に対しての安全
<ul style="list-style-type: none"> 自由練習や投げの練習の時にぶつからないように周りを見渡して間隔をあけて練習を行った。(4人) 技を掛ける方向に人がいないか確認した。(2人) 投げる時マットから出ないかなど注意した。 マットの端の方で練習したり、人がいっぱいいるところは避けたりして練習した。 組んでいる時に、他の人たとぶつかりそうになったらいったん中止する。 	<ul style="list-style-type: none"> 技がかかったら手を離さない。(2人) ふざけたりしない集中してやる。(2人) 受け身を取れるように投げる。 つめを切る。(4人) 技はしっかり掛け手をはなさない。 危ない手のつき方などをしないように注意した。 どこか打たないように注意した。ピン止めをしないようにした。 怪我をさせるのも嫌だしさせられるのも嫌だから、やってよいこと悪いことを考えた。 無理に技を掛けない。服装や髪型に注意した。 練習などをやっていて相手には、絶対怪我をさせないようにする。(3人) 禁止技を使わない、無理やり変な技を掛けないようにする。 受け身を取りやすくすること。 相手が投げやすいように投げられる側からも気を使ったりできた。

この記述から、生徒は、周囲の安全や相手に対しての安全をよく考えながら活動していたことがわかる。また、「ややできなかった」と答えた5名の生徒においては、その理由として、「引き手を離さないように心がけても投げ終わった後に技が未熟で支えられない」や「試合を見ている時に膝を立ててみていた」「試合に集中して、壁にぶつかりそうになり周りがわからなかった」などをあげていた。

表3 - 11は、毎時間の練習に対して、生徒たちが自分自身でルールを決めた内容である。

表3 - 11 練習のルール

練習のルールについては、5時間目にグループで話し合いをさせて決めた。このほかにいろいろなルールが出たが、各グループに共通する部分として表3 - 11の内容を練習で、守ることにした。項目を見ると、「礼儀作法に関すること」「安全に関すること」「相手を思いやること」の内容に分けることができるが、「相手を尊重し、思いやり、安全に活動していこう」という生徒たちの考えがわかる。

1. 礼をしっかりと行う。
2. 引き手を離さない。
3. 相手が投げやすいようにする。
4. 相手が痛くないように投げる。
5. 相手のことを考えて安全に注意する。

図3 - 29は、事前・事後アンケートの「授業では、相手のことを考えて練習したか」についての比較である。また図3 - 30は、事後アンケートで「していた」「ややしていた」と答えた生徒に、何を考えていたかを記述したものを分類したものである。

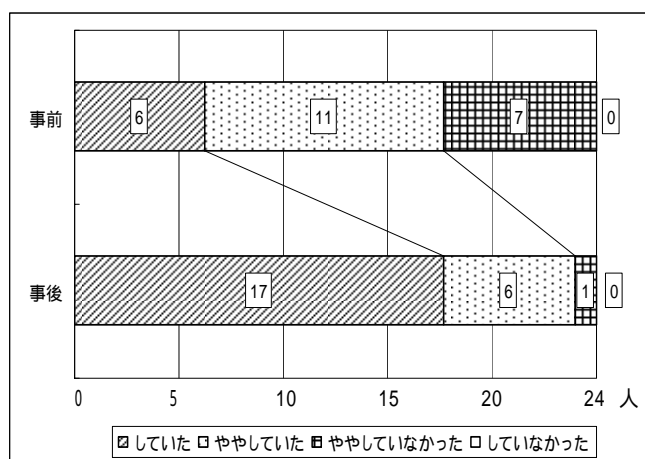


図3 - 29 相手のことを考えて練習していたか

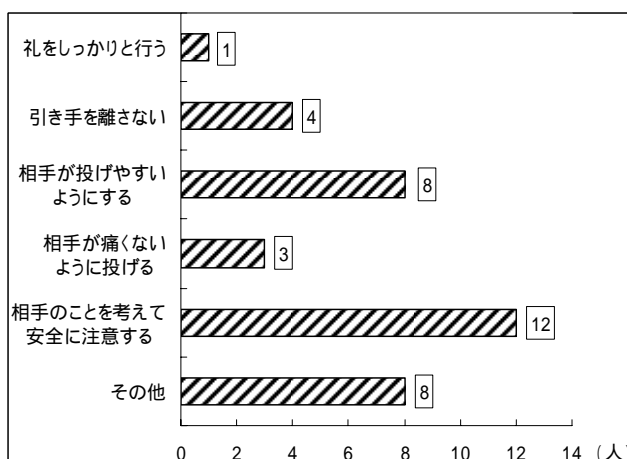


図3 - 30 相手に対して何を考えて練習したか

事前では、相手のことをあまり考えずに練習していた生徒は7名であったものが、事後では1名に減少したことがわかる。また、表3-11の、生徒が決めたルールに沿って、「相手に対してどんなことを考えて練習したのか」の記述を分類すると、「引き手を離さない」「相手が痛くないように投げる」「相手のことを考えて安全に注意する」という「安全面」に関する記述が非常に多く、合計すると述べ21にも及んだ。「相手が投げやすいようにする」など「技能の向上」に関する記述は12だった。その他の記述は「周りに気を配る」「相手のレベルに合わせる」「相手が上達できるように」「相手の立場を考える」「感謝」「いっしょに上手になろう」「相手が怖がるようなことをしない」「審判の時は、不公平な判断をしない」という内容であった。「安全面」「技能の向上」に近い内容は、その分類に含めた。生徒は、安全に配慮して、技能が向上するように練習方法を工夫していたことがわかる。

「(3)イ 安全に配慮して活動できたか」についての考察

柔道に対する事前アンケートでは、怖い、痛い、安全でないというイメージをもっていた生徒が多い。今回の学習では、安全に注意して活動できたという生徒が事前に比べて増えたが、これは、各グループで、練習のルールを決めさせたことによるものと考えられる。練習のルールの中には、「引き手を離さない」「相手が投げやすいようにする」「相手が痛くないように投げる」「相手のことを考えて安全に注意する」という項目があげられた。これはまさに安全に対するルールであり、それを生徒が意識したための結果だと考える。

また、生徒の記述内容を見ても、練習場や周囲の安全を考えながら、相手に怪我をさせないことを考えた記述が目立った。これは、今回の授業では、教え合いをしながら学習を進めたため、相手のできていない部分がよく分かり、技能が未熟な生徒に対して、より安全に技能を身に付けていこうという思いが強まったのだと考える。

以上のことから、生徒は相手を尊重し、安全に配慮して活動できたと考えることができる。

「(3) 相手を尊重し、安全に配慮して活動できたか」についてのまとめ

以上のように分析した結果次のように考えることができる。

アドバイスカードを工夫したり、グループ編成を工夫したりしながら、お互いに共通の目標をもつことによって、教え合いが深まり、相手のつまづきを理解し、相手の気持ちになってアドバイスができるようになったと思われる。

練習時のルールを決めることによって、相手に怪我をさせたくないという思いが現れ、自主的に安全に配慮して活動ができるようになったと思われる。

「礼の時に考えていること」「仲間に対して思うこと」を毎時間記入し、柔道通信を通して、お互いに考えていることを共有することによって、仲間に対しての感謝の気持ちが生まれ、礼法に心をこめることができるようになり、相手を尊重する姿勢につながったと思われる。

(4) 相手との攻防を楽しむことができたか

ア 得意技を生かして相手と攻防することができたか

(ア) 練習や試合で得意技を使うことができたか (学習ノート・カード、VTR)

図3-31は、学習カードの対戦の記録から、固め技の個人戦及び団体戦において、得意技を使った生徒の割合を示したものである。なお、技を仕掛けないうちに負けてしまった5名については含めていない。

このグラフの「使わなかった」と答えた生徒2名については、得意技が決まっていなかった生徒である。そのことを考えると、固め技の試合で得意技を使った生徒は100%になることがわかる。

図3-32は、固め技の個人戦及び団体戦において、生徒が仕掛けた技を学習カードとVTRから分析し、得意技の出現率を示したものである。

ほとんどの生徒が得意技を使って試合を行っていることがわかる。その使用率は77.8%に及んでいることがわかる。また、試合の決まり手も得意技であることが多かった。

図3-33は、固め技の試合の個人戦及び団体戦において、結果が一本勝ちであった試合の決まり手が、得意技であるかどうかを示したものである。

固め技においては、ほとんどの生徒が、得意技で一本勝ちをしていたことがわかる。また、一度技が決まるとなかなか解くことができず、最初に掛けた技によって勝敗が決まることが多かった。

図3-34は、学習カードの対戦の記録から、試合の個人及び団体対戦において、得意技を使った生徒の割合を示したものである。なお、固め技、投げ技の得意技両方を含めている。

使わなかった生徒は、2名であり、ほとんどの生徒が得意技を使って試合を行っていたことがわかる。得意技を使わなかった2名については、得意技につながる連絡変化で相手に返されてしまい、使うことができていなかった。

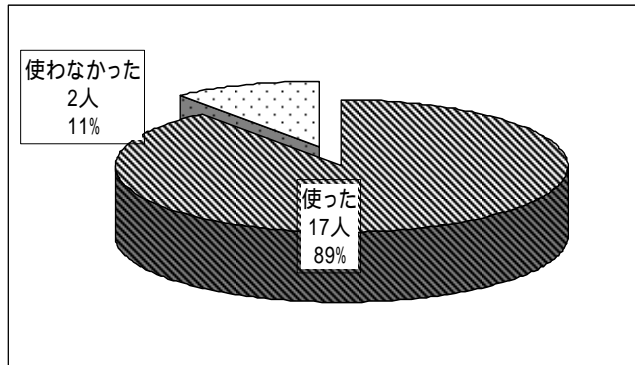


図3-31 固め技の試合で得意技を使った割合

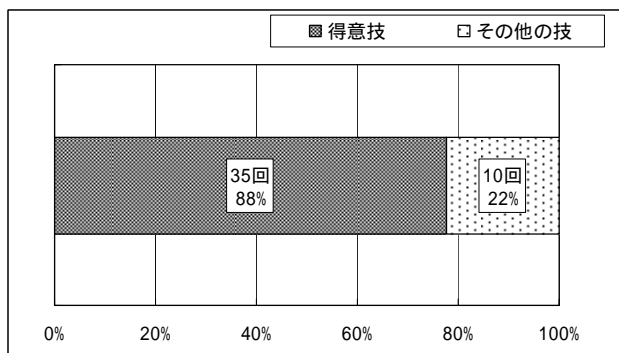


図3-32 固め技の試合における得意技の出現率

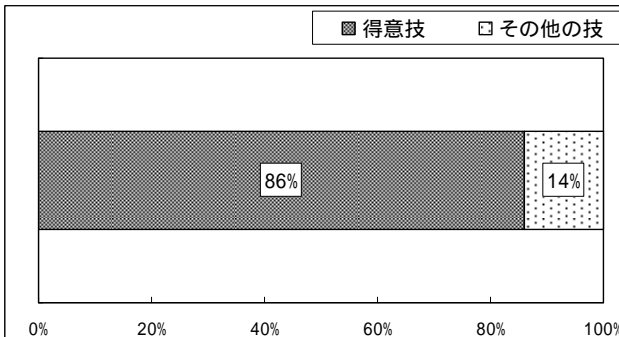


図3-33 固め技の試合での一本勝ちの割合

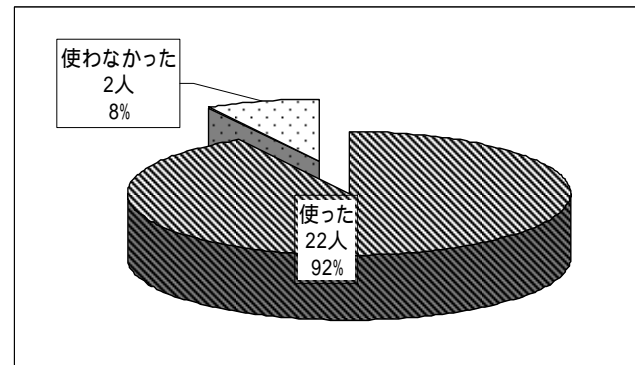


図3-34 試合で得意技を使った割合

図3 - 35 は、試合の個人戦及び団体戦において、生徒が仕掛けた技を学習カードとVTRから分析し、得意技の出現率を示したものである。

技の総数は全部で711回であり、そのうち得意技は176回であり全体の24.8%であった。固め技の試合に比べると、得意技の出現率が悪くなっていることがわかる。ただし、得意技につながるための連絡変化が多く見られ、その前段の技から上手く得意技に連絡できない生徒が多くいたため出現率が下がった。

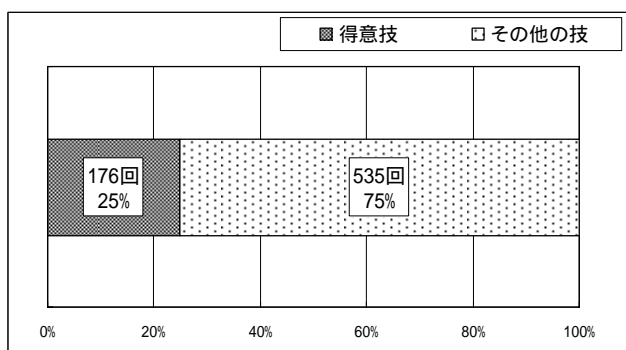


図3 - 35 試合における得意技の出現率

図3 - 36 は、試合の個人戦及び団体戦において、結果が一本勝ちであった試合の決まり手が、得意技であるかどうかを示したものである。

得意技の出現率を見るとその他の技のしめる割合が多いが、一本勝ちを収めた割合は、やはり得意技によるものが多く63%をしめた。

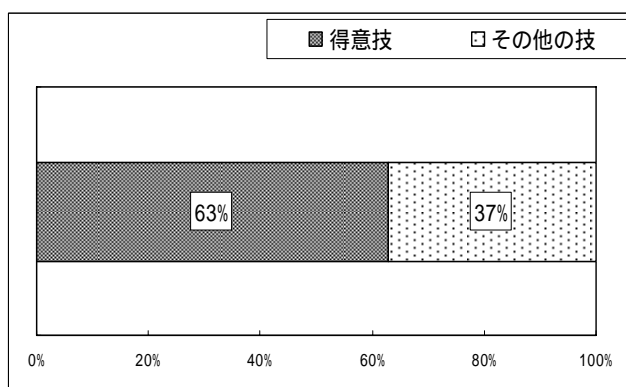


図3 - 36 試合における一本勝ちの割合

「(4)ア 得意技を生かして相手と攻防することができたか」についての考察

今回の学習では、得意技を身に付け「一本」を目指し、柔道の特性を味わう学習をねらいとしており、生徒には、得意技を身に付けることを強く意識させて授業を行った。固め技の試合を分析すると、得意技を使った生徒は、得意技を見付けることができなかった生徒と、技を掛ける前に決められてしまった生徒を除くと、全員が得意技を使うことができた。また、一本勝ちのほとんどが得意技であった。得意技の出現率も77.8%と非常に高かった。これは、固め技の連絡を生徒が身に付けていなかったことと、応じ方がしっかりと身に付いておらず、一度決められるとそのまま抑えこまれ一本になるケースが多かった。そのために、得意技を使った割合や出現率が高くなったと考える。

その反面、投げ技を中心に行った試合の方では、得意技を使った割合は高かったが、出現率が24.8%であった。これは、技の連絡変化を使って得意技を掛けることを練習に入れていたため、前段の技は仕掛けたが、相手に応じられてしまって、得意技にもっていけない生徒が多く、VTRからも見取れる。また、相手の技に対して、変化して対応したり、応じ技をしたりするようになり、得意技の出現率が低下したと考える。しかし、一本勝ちの内容を見ると得意技による勝率が高く、いろいろな技を仕掛けて攻防をしながらも、最後は得意技で一本を決めた生徒が多いということがわかる。

イ 攻防を楽しめたか

(ア) 練習や試合で相手との攻防を楽しめたか(学習ノート・VTR・事後アンケート)

図3-37は、事後アンケート「練習や試合で、相手との攻防を楽しむことができたか」についての回答の割合を示したものである。

「できた」と答えた生徒が71.0%であり、「ややできた」と答えた生徒が29.0%であった。また、「できなかった」「ややできなかった」と答えた生徒は0名であり、全員が攻防を楽しむことができたことがわかる。

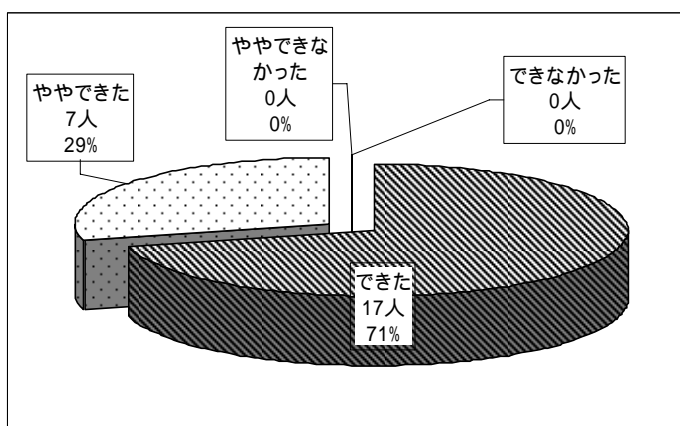


図3-37 練習や試合で、相手との攻防を楽しむことができたか

表3-12は、事前アンケートにおいて、柔道が「あまり好きでない」「好きでない」と答えた生徒の授業後の感想である。

表3-12 事後アンケート「授業の感想」の記述の抜粋

事前アンケートで、柔道が「あまり好きでない」「好きでない」と答えた生徒の授業後の感想	
生徒Aさん	最初は、やりにくいなと思っていただけ、受け身とかできるようになって面白いな—としました。あと崩しができてくると技もできてきて、一本取れるようになってきて、柔道やる前より成長したなと思いました。グループの人との練習で人間関係がよくなったと思います。自由練習が一番楽しかったです。
生徒Bさん	固め技の試合ではじめて一本取れた時は、とてもうれしかったです。礼儀を重んじるスポーツだと思い、いいことだなと思いました。「得意技」というのができた時は、なんかうれしかったです。

共通していえることは、得意技を身に付け、一本が取れるようになり、試合や自由練習を楽しむことができたことがわかる。特に、Fさんは、自由練習になると真っ先に出てきて練習するようになった。また、事後アンケートでは、柔道が「好き」と答えた。

図3-38は、毎時間の生徒の自己評価「授業は楽しかったか」について、試合の行われた3・4・12・13時間目の回答の推移である。

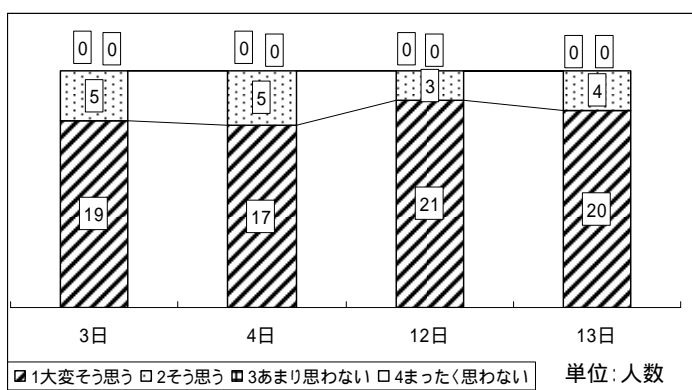


図3-38 授業は楽しかったか

3時間目は固め技の個人戦、4時間目は団体戦、12

時間目は試合の個人戦、13時間目は団体戦を行っており、ともに個人戦の日の方が「大変そう思う」と答えた生徒が多かった。また、前時間にわたって「あまり思わない」「まったく思わない」と答えた生徒はいなかったことがわかる。

「(4)イ 攻防を楽しめたか」についての考察

事前の保健体育科実態調査においても、柔道の一番の楽しさは、試合をすることであったが、その反面、試合に負けると楽しくないと答えていた生徒もいた。しかしながら、今回の学習を通して、生徒たちは、全員が練習や試合で相手との攻防を楽しむことができた」と答えている。これは、練習の過程が大きく影響していると考えられる。今回は、得意技を身に付け、連絡変化などを工夫していかに得意技に結び付けるかを考えながら授業を行ったため、試合の勝ち負けはもちろんであるが、相手との攻防をより楽しむことができたのではないかと考える。また、生徒の記述からも見られるように、礼儀を重んじたり、人間関係がよくなったりするにつれて、勝敗だけでなく、相手と試合や練習をすること自体を楽しんでいるようになったのだと考える。

以上のことから、相手との攻防を楽しむことができたと考えられることができる。

「(4)相手との攻防を楽しむことができたか」についてのまとめ

以上のように分析した結果次のように考えることができる。

「一本」を強く意識することによって、効果的に得意技を身に付け相手との攻防を楽しむことができたようになったと思われる。

得意技につながる連絡変化を考えたり、どのようにしたら得意技で「一本」が取れるかを考えたりすることによって、練習や試合で相手との攻防が楽しめるようになったと思われる。

(5) 仮説の有効性について

自ら課題を発見し、練習を工夫し、教え合いを通して課題を解決していくサイクルを繰り返すことによって、技の構造を理解し、基本動作や対人的技能を身に付けることができた。さらに、自分に合った得意技に発展することができ、相手との攻防を楽しむことができたようになった。また、礼法、安全、そして相手を思いやる気持ちを常に意識させながら学習を進めることによって、互いの人間関係が深まり、相手を尊重し、安全により配慮した活動ができるようになったことが明らかとなった。

よって、得意技を身に付け、さらに「一本」を目指す技の完成度を高めること、相手を尊重し、安全に配慮した態度を育むことをねらいとし、教材・教具やグループ活動を工夫した課題学習を進めることによって、互いを尊重し合い、効果的に得意技を身に付け、相手との攻防を楽しむ練習や試合ができるようになったと考えられる。

7 検証授業を振り返って

これまでは、検証の視点に沿って、分析・考察を行い、仮説の有効性を明らかにしてきた。ここでは、検証授業を振り返り、生徒たちが、柔道という単元をどのように受け止め、理解されたかについて分析・考察を進めたい。

柔道の授業をもともと好きな生徒が多かったが、「技が上手くできない」「試合に勝てない」という苦手意識をもった生徒も多く見られた。図3-39は、事前・事後アンケート「柔道の授業は好きか」に対しての変容を示したものである。また、図3-40は、事後アンケート「今回の授業を通して、今まで以上に柔道が好きになったか」に対しての理由の記述を分類しまとめたものであり、表3-13はその理由の抜粋である。

「技ができるようになった・得意技ができた」という記述が延べ14人であり、次に「授業内容・教具が充実していた」が9人、「試合に勝てた・一本が取れた」が6人であった。これは、まさに、柔道の機能的特性に生徒が触れることができたといえるのではないかと考える。

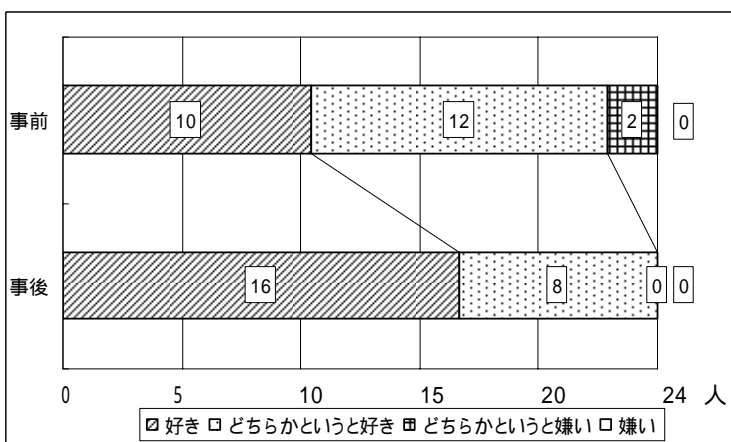


図3-39 柔道の授業は好きか

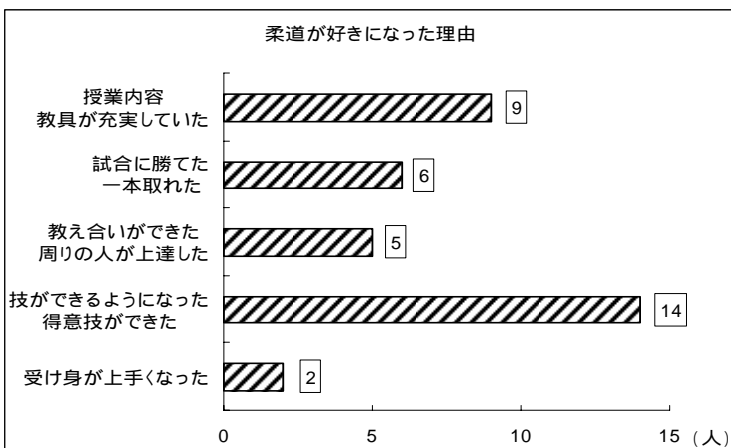


図3-40 今まで以上に柔道が好きになった理由

表3-13 今まで以上に柔道が好きになった理由の抜粋

今まで以上に柔道が好きになった理由	
生徒Aさん	前は、投げられるからつまらないと思っていたけど、受け身ができるようになってだんだん好きになった。
生徒Bさん	今までは立ち技で一本取れなかったけど、一本取れるようになったし、技もいろいろ増えたから。
生徒Cさん	多くの技が掛けられるようになったし、みんなで教え合って上手くできるようになった。試合で一本取れたから。
生徒Dさん	ITを活用した支援教材とかを使ってわかりやすかったから。あとはじめて一本取れた時うれしかったから。
生徒Eさん	以前まで技の掛け方が良くわからなく、試合をしても勝つことがほとんどなかったのが、得意技ができ、勝つことができるようになったから。
生徒Fさん	新しい技ができるようになってその技を得意技にすることができたから。
生徒Gさん	今まで以上に集中でき、自分の得意技を極めることができたし、いろいろな技を覚えられたから。

図3-41は、事前・事後アンケート「柔道に対してどのようなイメージを持っているか」について、いくつかの項目の変容を示したものである。

事前アンケートでは、柔道は「上手くできない」というイメージをもっている生徒が多かったが、事後アンケートでは「柔道は上手くできる」というイメージをもつ生徒が多くなった。今回の検証授業において技の達成率を見ると生徒は多くの技を身に付けており、教材や教具などを工夫することによって、より上手くできるようになったのだと考える。

また、礼儀正しいというイメージも大きく変容した。特に「そくだ」といって切る生徒が圧倒的に増えた。今までの授業でも礼儀作法は意識して指導してきたが、今回は、その礼儀作法に対してどんなことを考えて礼をするのかを意識させたため、より心を込めた礼ができるようになったからであると考ええる。

安全だというイメージも事前に比べて良くなっている。これは、受け身の学習の仕方の工夫や練習のルールをしっかり決めて行うことにより、より安全に学習が進んだ結果だと考える。

人間関係を良くするというイメージも大幅に良くなった。今回の検証授業では、グループ学習を基に教え合いを中心に学習を進めたため、相手のことを考えてアドバイスすることができ、そのことによって感謝が生まれ、アドバイスを返すという好循環が生まれていったのだと考える。

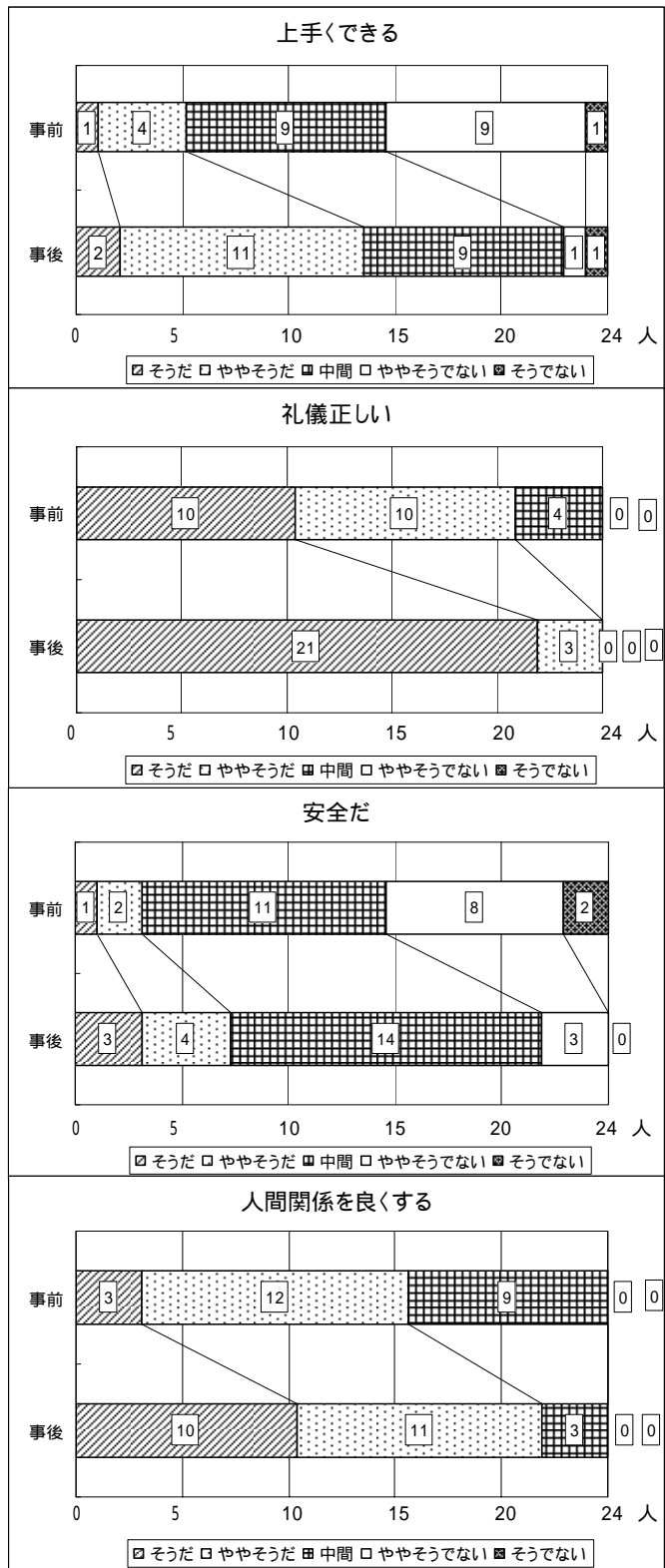


図3-41 柔道に対するイメージの変容

表3 - 14 は、事後アンケートにおける生徒の授業の感想の抜粋である。

表3 - 14 事後アンケート「生徒の授業の感想」の抜粋

今回の授業の感想	
生徒Aさん	研究授業で最初はやりづらかったが、それも慣れるようになったし、今までとは違うビデオやITを活用した支援教材を使うようになったので、今年はみんなが成長していくスピードも速く、とても楽しくできた。アドバイスカードもあり、できていないところも、みんなでいい合い、お互いを高め合うことができとても良い授業でした。
生徒Bさん	最初は、やりにくいなとか思っていたけど、受け身とかできるようになって面白いなーと思いました。あと崩しができてくると技もできてきて一本取れるようになってきて、柔道やる前より成長したなと思いました。グループの人との練習で人間関係がよくなったと思います。自由練習が一番楽しかったです。
生徒Cさん	今までは柔道のやり方とか上手くできなくて、あまり好きじゃなかったけど、今は、技の掛け方などがわかってきたのでとても好きになりました。
生徒Dさん	みんなに教えたり教えてもらったりして、技や礼法などが上手くできてよかった。一本を取れた時はうれしかった。投げられても受け身をしっかり取って痛くなくなった。試合で負けると悔しいけど、勝つととても楽しくなった。礼儀作法がしっかりとできるようになった。
生徒Eさん	今回は、1・2年の時に比べて、ほんとに上達できたと思った。あやふやだった部分もほとんどが解決できた。いろんなアイテムを使うことで、自己練習もさらに一生懸命取り組めて楽しかった。動きだけでなく、相手の気持ちを考えることや自分を律することも学習できてすごくためになった。
生徒Fさん	今まで2年間柔道やってきたけど、こんなにもたくさんの技ができるようになってすごくうれしい。投げられるのが苦手で、どうしてもそういう技の練習相手をするのがいやだったのですが、今では相手のことを考えて、投げ合いができるようになり、試合などがすごく楽しいです。自分がこんなにもできるようになるとは思いませんでした。驚きです。楽しかった。
生徒Gさん	1・2年次に比べると多くのことをやり、たくさんの道具を活用しましたが、1つひとつに移る時、丁寧でわかりやすくより深く柔道を学べました。また技術的にも短期間でしたが、ものすごく向上したと思っています。これから柔道を学ぶことがあっても今回学んだことはとても大きなことでした。学校の授業という幅を超えてとてもよい経験になりました。
生徒Hさん	今まで以上の練習試合をすることができました。柔道というと、怖いというイメージが一番強く私の中ではありましたが、この授業を通して、こんなに柔道って安全で楽しくできるものなのだと感じました。3年間で一番楽しい授業が受けられたと思います。友達とも教え合ったりして楽しくできた。いろいろな技の掛け方などわかったし勉強になりました。楽しかったです。いろいろなアドバイスも身に付けることができよかったです。ありがとうございました。

これは、生徒8名の事後アンケートの抜粋であるが、これ以外の生徒も「技能の向上・得意技が身に付いた」「友達との人間関係が深まり礼儀正しくなった」「投げられても怖くなかった」「一本が取れてうれしかった」などの記述がほとんどであった。

これらの感想を総合すると、生徒は、「柔道は、安全に配慮し、友達同士教え合いを通して学習することにより、技能が身に付き、試合などの攻防を楽しむことができる」ことを理解したと考える。

研究のまとめ

1 研究の成果と課題

(1) 学習の工夫と効果

本研究では、「教材・教具、学習資料や互いのアドバイスを基に、自らの課題や課題解決の方法を考え、互いに教え合いを通して『一本』を目指した授業」を構築することによって、「互いを尊重し合い、効果的に得意技を身に付け相手との攻防を楽しむ練習や試合ができるようになる」ことを目指して授業を実践した。その結果、「自ら課題を発見し練習を工夫して課題を解決する」「技能を身に付ける」「相手を尊重し、安全に配慮して活動する」「相手との攻防を楽しむ」という視点から、様々な学習の工夫をすることによって、互いを尊重し合い、得意技を身に付け相手との攻防を楽しむ練習や試合ができるようになることがわかった。

図4-1は、学習計画を進める中で、工夫した内容と効果についてまとめたものである。

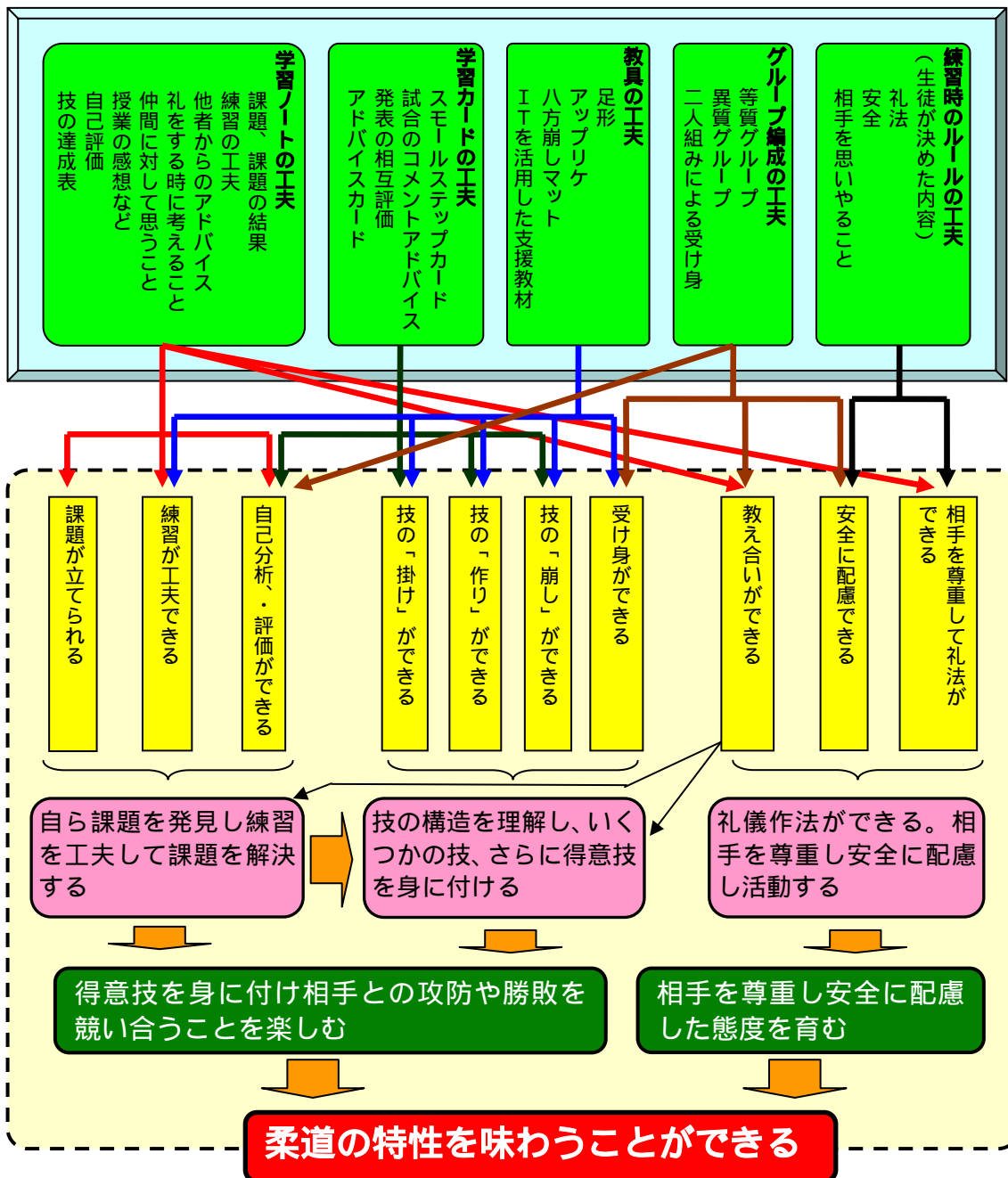


図4-1 学習の工夫と効果

ア 課題学習について

(ア) 学習ノート

課題学習をするにあたっては、学習ノートに課題を記入する際に「前の時間を振り返ってみて、また友達のアドバイスを見て課題を立てよう」「課題が達成できなかった人は何がいけなかったのか具体的に考えてみよう」などできるだけわかりやすく指示を心掛けた。そうした日々の具体的な指示により生徒1人ひとりが具体的な課題を立てられるようになると考える。生涯スポーツを見据えると、日々の1つひとつの指示にも気を配り、生徒が効果的な課題学習の仕方を身に付けていくことが大切である。また、練習方法の工夫や他者からのアドバイスが記入できる欄を設けた。当初「学習ノートを書く内容が非常に多い」と思いながら授業を行っていたが、とにかく「活動時間の確保」といわれているが、私自身は今回の検証授業を通して、学習ノートを授業の中で活用することにより、しっかりと考えて活動する「活動時間の質」の大切さに気付くことができた。なぜなら、今回の検証授業を通して生徒の技能の向上は基より、その他の評価の観点においてもこれまで以上の高まりに目を見張るものがあったからである。

(イ) 八方崩しマット・足形・アップリケ

八方崩しマットは、「崩し」を、足形は「体さばき」をアップリケは「掛け方」を理解したり体得したりするために作成した。実際の学習の過程では、生徒たちは、それぞれを単独で利用するのではなく、複合して利用していた。これらの教具は、技の構造が理解できてしまえば、ほとんど利用されなくなってしまうが、新しい技の学習には非常に有効だと考えられる。今回の検証授業で、技の習得状況が非常に良かったのは、これらの用具の活用によって、しっかりと技の構造が理解できたからだと考えられる。一度この教具の意図するところが理解できれば畳の縁や境目を使えば代用できる。また、足形やアップリケは、器械運動などの他の領域にも十分応用できるものと考えられる。

(ウ) ITを活用した支援教材

パソコンを利用して、柔道技の見本が速やかに見られるように画面に例示された技をマウスでクリックすれば動画が再生するように作成した。また、スロー再生も見られるようにした。固め技の学習の時間ではあまり利用されなかったが、投げ技の学習になると全員が利用するようになり、利用頻度も高くなった。実際の生徒の感想を見ても、ITを活用した支援教材は非常に役に立ったと答えた生徒が多い。私自身も見本を見せてはいるが、このような教材があれば、生徒は自分が見たい時に見本が見ることができる。

(エ) スモールステップカード

柔道の技を、「崩し」「作り」「掛け」に分解して学習を進めるために作成したが、今回は、ITを活用した支援教材も利用しながら行ったため、生徒はカードの連続写真を見るよりも動画を見ながら動作確認することが多かった。しかし、技の構造を段階的に理解して、分解して練習することは非常に重要なことだと考える。したがって、今後はいつでも目に入る位置に技の構造図を貼るなど、ITを活用した支援教材やスモールステップカードと併用しながら、さらに効果的に技能の構造を学習できる環境を作る必要がある。

(オ) 発表の相互評価カード・試合の評価カード

発表の相互評価では、判定のめやすを基に生徒同士A B Cで評価させ、アドバイスやコメントも書かせた。生徒は、このアドバイスやコメントを基に自己分析し、新たな課題を立てていた。

イ 安全に配慮し、互いを尊重した教え合いについて

(ア) 学習ノート

他者からのアドバイスの記入欄は、シールで作ったアドバイスカードを貼るようにしたが、授業で活動しながらカードを書くのは難しく、検証授業の後半では、アドバイスをしてもらったことを自分で記入しても良いことにした。アドバイスを記述として残しておくことで、授業の振り返りをする際により客観的に自己を見返すことができていた。また、教え合いを促すことができ、結果的により良い人間関係を作り上げる基になり、この記入欄は非常に有効であった。礼をする時考えたことの記述欄は、これまで、形だけの礼儀作法については、しっかりとできていると答えた生徒がほとんどであったが、今回の検証授業で大きく変わった点は、礼をする時にその意味を理解してしっかりとでき

るようになったことである。その要因を考えてみると、毎時間礼儀作法について振り返ることによって、それが習慣化、意識化されて、自然に礼に心を込められるようになったのではないかということである。心理的な側面は、授業の展開の中では見取ることが難しく、捉えきれない部分が多い。しかし、今回この欄に記述させることによって、しっかり礼儀作法ができている生徒でも、礼そのものの意味をあまり理解していないことがわかった。これまでの私自身のこの項目に対する生徒への評価では、しっかりと礼儀作法ができていると判断していたのだが、実は形だけにとどまっていたことが明らかになった。さらに、そのことを私自身が知り、学習ノートでコメントを返すことによって、その生徒は礼に対して改めて考え、感謝の気持ちを込めるようになった。「礼儀作法については、単に形のまねに終わるのではなく」と学習指導要領にもあるように、心を込めて礼を表現するためには、この欄への記述によって、礼儀作法に対してしっかりと考えさせることはとても重要なことだと考える。今後も、このことは私自身大切にしていきたいと思う。

(イ) 練習方法の工夫

一斉指導型の授業では、教師が設定した練習のルールを生徒が守るという一方的な構図になるが、今回の検証授業では、あえて生徒たちに練習のルールを考えさせた。生徒から出たルールは、「礼をしっかりと行う」「引き手を離さない」「相手が投げやすいようにする」「相手が痛くないように投げる」「相手のことを考えて安全に注意する」であった。練習方法のルールを考えて決めていくことによって、自ずと安全に配慮する内容があがるようになり、それらが意識化されるとともに、より安全に留意しルールを守っていきこうとする姿勢が伺えるようになった。

(ウ) 2人組の受け身

今までの私の授業では、受け身の練習は一斉指導型の単独の反復練習を行っていたが、今回2人組で行わせることによって、受け身の技能が飛躍的に向上した。実際に生徒の感想でも、1人で受け身の練習をやるのと2人でやるのでは、タイミングの取り方が異なるし、勢いも違うと答えている。柔道部の生徒でさえも、横受け身について、相手に投げられて受け身を行うことで、受け身を取る手が反対であるということに改めて気付いていた。また、受け身をしっかりと身に付けることは、安全面からも重要であり、安全に授業が行えることによって、より活発な教え合いを通して学習する展開ができたのだと考える。

(エ) 安全について

安全面については、今回の検証授業では様々な角度から安全に配慮できるようにした。練習の行い方や受け身の充実はもちろんであるが、何より、生徒たちの安全に対する意識をどのように高めていくかを念頭におき授業を行った。導入での健康観察は基より、危険と思われる場面では適宜指導を行った。それを繰り返すことにより、生徒の中にはより安全に学習を進めていきこうとする姿勢が育ち、授業の感想などには、相手には怪我をさせたくないなどの感想が多く書かれていた。あわせて、前述のとおり練習のルールを設定することにより、自ずと安全に対する意識化が促進されるものと考えられる。

ウ 得意技を身に付ける学習について

(ア) グループ編成

今回の検証授業では、前半はグループ同士の力を均等化するために技能の習得状況が様々な生徒をグループ化した「異質グループ」での学習を進め、後半の得意技の練習になってからは、同じ技の習得を目指す生徒同士の「等質グループ」での学習へとグループ編成を意図的に変更した。試合については、「異質グループ」をチームとして団体戦を行った。生徒は、このグループ編成をととてもよかったと答えている。最初の「異質グループ」では、教え合うことによってお互いが上達することや楽しさを体験し、グループ学習の進め方を理解することができたと思う。さらに得意技の学習になってからは、「等質グループ」にしたことにより、技を習得する効率が上がり、生徒は、さらに得意技に磨きをかけていけるようになった。

(2) 学習の課題と改善

今回の検証授業を振り返ってみると、いくつかの課題があげられる。課題と改善点を整理すると表4-1のようにまとめられる。

表4-1 課題と改善点

	課題	改善点・より充実させるために
学習ノート	具体的な課題が立てられない生徒がいる。	<ul style="list-style-type: none"> より具体的に書けるように記入欄を順序立てて記入できるようにする。
	記入に時間がかかる。	<ul style="list-style-type: none"> 記入内容を精選する。 練習の工夫については、教材・教具の利用は選択肢から選べるようにする。 「仲間に対して思うこと」「礼の時に考えていること」の欄は1つの欄にする。 「今日できたこと」「今日わかったこと・感想・次回の課題」の欄も1つの欄にする。 自己評価の内容を再考する。
学習カード	発表・試合の相互評価やコメントを個人のカードにまとめて書かせたため、その時間内に本人に伝えることができなかった。	<ul style="list-style-type: none"> 相互評価、コメントのカードは、発表者1人に対して1枚として、まとめの時間に本人に渡す。
教材・教具	ITを活用した支援教材は、動作を分解せずに、一連の動きのパターンしか作らなかったため、生徒が見たい場面を反復してみるのに時間がかかった。	<ul style="list-style-type: none"> ITを活用した支援教材を充実していきたい。技を一連の動作で見せる以外にも、「崩し」「体さばき」「掛け方」に分解して見られるようにしたり、いろいろな角度から見られるようにしたりする。 1・2年生の学習にも利用する。
グループ編成	学習内容に応じた有効なグループ編成の仕方や組み替える時期の設定が重要である。	<ul style="list-style-type: none"> 教え合いを促進させるために、グループ編成をする際には人間関係などにも配慮が必要なことから、担任とも情報交換を行う。
	2人組による受け身は、一斉指導型の単独練習と教え合いによる2人組みの受け身の練習の使い分けが必要である。	<ul style="list-style-type: none"> 受け身の指導は、一斉指導の単独練習で形を覚えたら、対人的技能と関連させて行わせる。
安全への配慮	場を有効に使うためにマットを敷いたが、活動中にずれてしまった。	<ul style="list-style-type: none"> 今回の検証授業では、柔道場の隣の剣道場にマットを敷いたため活動中にずれてしまったので、次年度からは、マットの下に、滑り止めのシートなどを設置したい。
単元計画	新しい技の学習や得意技の学習、試合の時間をもっと確保したい。	<p>学習内容の精選</p> <ul style="list-style-type: none"> 固め技については、1・2年次で行っているため、簡単な復習とし、試合を行わない。 基本知識の復習は、資料を配布する。 基本動作は、投げ技と関連して学習する。

(3) 具体の改善策

ア 学習カードの試合カード・発表カードは図4-2、4-3のように改善する。

試合カード(さん) - (さん) コメント・アドバイス ()より

図4-2 試合カードの改善

発表カード(さん) 評価A・B・C コメント・アドバイス ()より

図4-3 発表カードの改善

イ 学習ノートは図4-4のように改善する。

8時間目 月 日	学習のねらい グループの仲間と協力し、教え合う。 教材・教具を活用し、新しい技を身に付ける。	今日の学習内容 新しい技の学習・背負い投げ・釣り込み・腰払い腰自由練習
体調 良い・悪い もち物 柔道衣 実技の教科書		
今日の課題・・・練習する技は() 具体的に何が課題か を付けよう(複数可) ・崩し・体さばき・掛け方・連絡変化 ・その他()	結果はどうでしたか。(できた・できない) なぜですか。	
どんな練習の工夫をしますか を付けよう ・ITコンテンツを利用して動きを確認 ・足形を使って体さばきを確認 ・八方崩しマットを使って崩しを確認 ・アプリケを使って技の掛ける位置や重心の位置を確認 ・ビデオを使って自分の技を確認 ・スモールステップカードを使って「崩し」「作り」「掛け」を確認 ・友達のアドバイスを実践 ・その他	友達にもらった吹き出しカードを貼る。また、アドバイスしてもらったことを記入する。	
今日の授業の振り返り 1大変そう思う 2そう思う 3あまり思わない 4全く思わない	わかったこと・感想・次回の課題	
授業は楽しくできましたか		
友達と教え合いはできましたか		
グループで協力できましたか		
自分の課題を解決するために教具を使うなど練習を工夫できましたか		
技のポイントや構造が理解できましたか		
礼法がしっかりとできましたか		
禁じ技を使わないなど安全に配慮できましたか		

図4-4 学習ノートの改善

ウ 単元計画は、表4 - 2のように改善する

表4 - 2 単元計画の改善 (3年生・14時間)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
オリエンテーション ・基本動作の確認 ・对人的技能と関連した受け身 ・固め技の復習 ・投げ技の復習 基本動作は、いくつかの投げ技と関連させながら指導する			・对人的技能と関連した受け身・体づくり運動											
			・投げ技の復習			・得意技の学習				・自由練習 ・得意技の発展				得意技発表会
			新しい技の学習			・技の連絡変化 ・得意技につながる連絡変化 ・技の発展				・試合				
						・自由練習								

学習カードは、試合・発表のコメントやアドバイス、総合評価については画用紙や厚紙に印刷し、簡単なカード形式にして、記入したらそのまま相手に渡すようにすれば、その時間内に本人に渡し、本人の振り返りや次回の課題に大きく役立てると考える。

学習ノートは、短時間に書けるように選択肢を増やすとともに、内容を精選し、重要なものだけを残すように考えた。また、課題については、具体的な課題を立てることができるようにするためには、順序立てて書かせることがよいと考える。生徒の思考判断を育てるためには、ある程度、教師による導きが大切である。選択肢を与えることは生徒の思考判断を育てることができないと思われるが、現在の教育現場の状況を考えると、各教科において、提示されている情報を選択する能力も求められていると感じる。すでに様々な練習方法や教具が考えられている中で、生徒は、新たに自ら練習方法を考えていくことも重要であるが、理論や系統に基づいているものを選んでいくこともまた重要であるとする。

単元計画については、本校は、3年間武道領域を積み重ねて行うことができるようにカリキュラムを組んでいるため、3年生の学習では、より発展的な学習が行えると考える。今回は、研究ということもあり、全てを網羅できるように学習を考えたが、より発展的な学習を目指すのであれば、より内容を精選し、1・2年次の積み重ねのもと、得意技を磨き、より深い攻防を楽しめるように単元計画を変更するのが望ましいと考える。また、生徒の選択の仕方については、選択の幅を広げ、いろいろな種目を体験させることも重要であるが、私の考えとしては、3年間を見通して、ある程度固定化した中で、なるべく3年間継続して選択できるようにすることが、よりその種目に対しての深まりを体験できるとともに、生涯を通じて運動に親しむ資質や能力を身に付けることができるものとする。

2 今後の展望

(1) 学習の内容の取り扱い

ア 技能の内容

図4 - 5は、技能の内容についての学習の方向性を図に示したものである。

今回の検証授業で実感したことは、基本動作の大切さである。特に受け身については、これができなければ練習や試合が成り立たないということである。事前アンケートにもあったが、柔道に対して「怖い」「危険」というイメージをもっている生徒が多く、このことはまさに受け身の未熟さからくるものであると考えられる。授業の感想でも、「受け身ができるようになったら

投げられるのが怖くなくなり柔道が楽しくなった。」という記述があり、その生徒の技能も飛躍的に向上していた。また、その他の基本動作についても、いくつかの対人的技能と結び付けて学習した方が生徒の理解が進むことも今回の研究を通して明らかになった。さらに、技の連絡変化や得意技についても、いくつかの技能がきちんと身に付いてから、それらの学習に進むことが望ましいと考える。技能の習熟が不完全のまま次のステージへ進むと、試合などの攻防も浅いものとなり、表面的な楽しさにとどまってしまい、何より、安全面が不十分になると考える。また、この図の縦軸の技能については、その行い方を場面に応じて、「易～難」「低～高」「遅～速」「静～動」「単独～複数」などにおき換えることもでき、横軸は、「单元内の時間」「3年間を見通した時間」ともおき換えることができると考える。

したがって、柔道は、単に楽しさのみを追求した場合、怪我が伴う危険なスポーツとなってしまう可能性があることから、今ある生徒の実態を把握して、無理のない学習計画を立てることが必要であると考えられる。

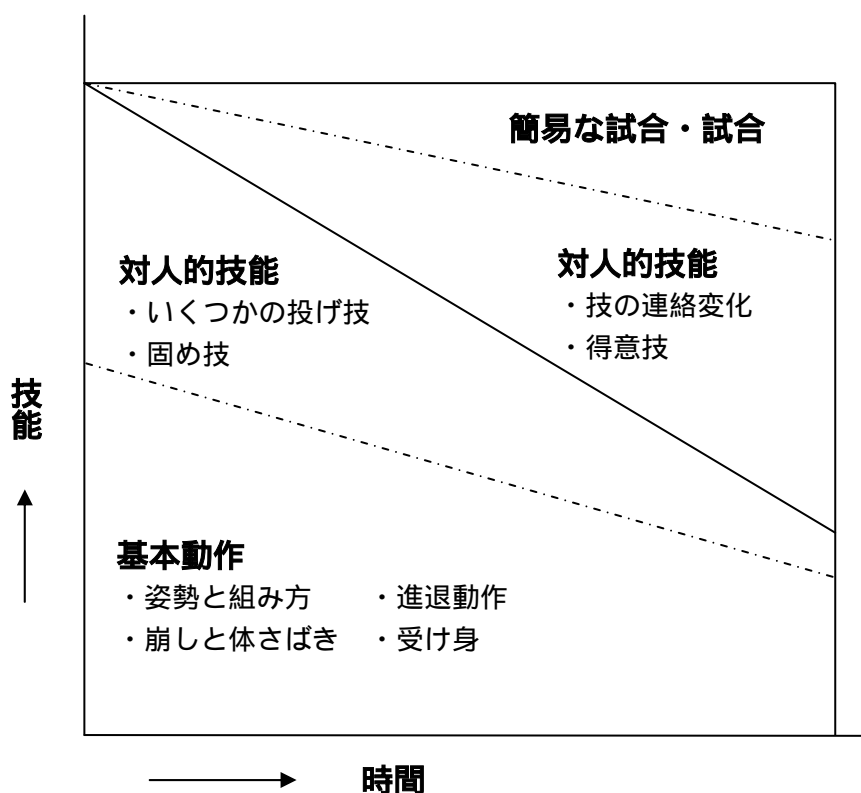


図4 - 5 技能の内容 (私案)

イ 態度の内容

図4-6は、態度の内容について学習の方向性を示したものである。

今回の検証授業の事前アンケートで私自身が一番衝撃を受けたのは、礼儀作法はできているが、礼をする時に何も考えていない生徒が多かったことである。確かに、昨年の授業を振り返ってみると練習や試合において「姿勢を正して、互いに礼」と教師が号令をかけて礼をさせていたため、形はできていたが、実は心が込もっていなかったのである。そこで、今回の検証授業では、どのようにしたら心を込めた礼ができるかを考えながら指導を心掛けた。そして、これからの態度に対する内容の学習は図4-6のような積み上げが大

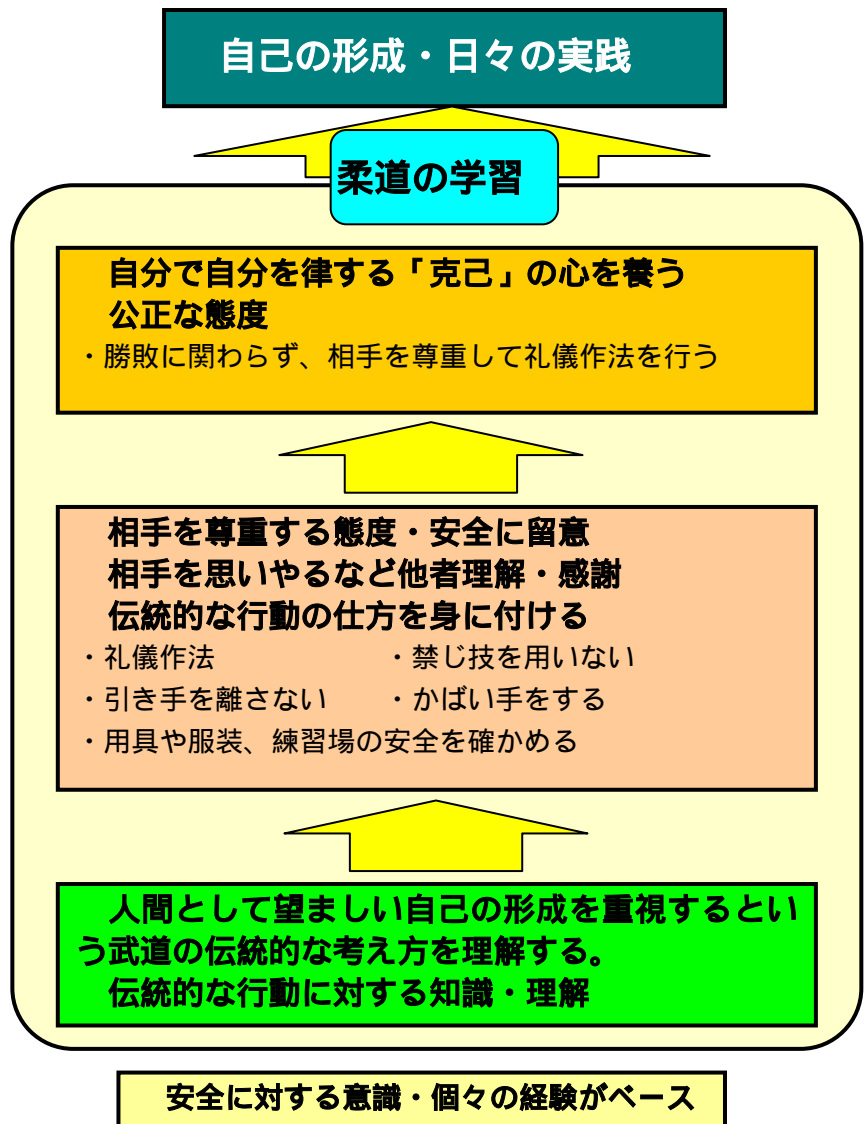


図4-6 態度の内容 (私案)

切であるとの考えに至った。学習の初期の段階では、「礼儀作法など、武道の伝統的な考え方や行動を知識として理解する」次に、「行動の仕方を身に付けるとともに、感謝や相手を尊重する態度を養う」そして「公正な態度や自分で自分を律する『克己』の心を養う」ことによって、自己が形成され、日々の実践につながっていくものと考えられる。さらに、これらのことは、柔道の技能の学習と合わせて指導していくことによって、より効果的に身に付いていくものであると今回の検証授業を通して実感することができた。

ウ 学び方について

図4-7は、学び方の内容についての学習の方向性を示したものである。

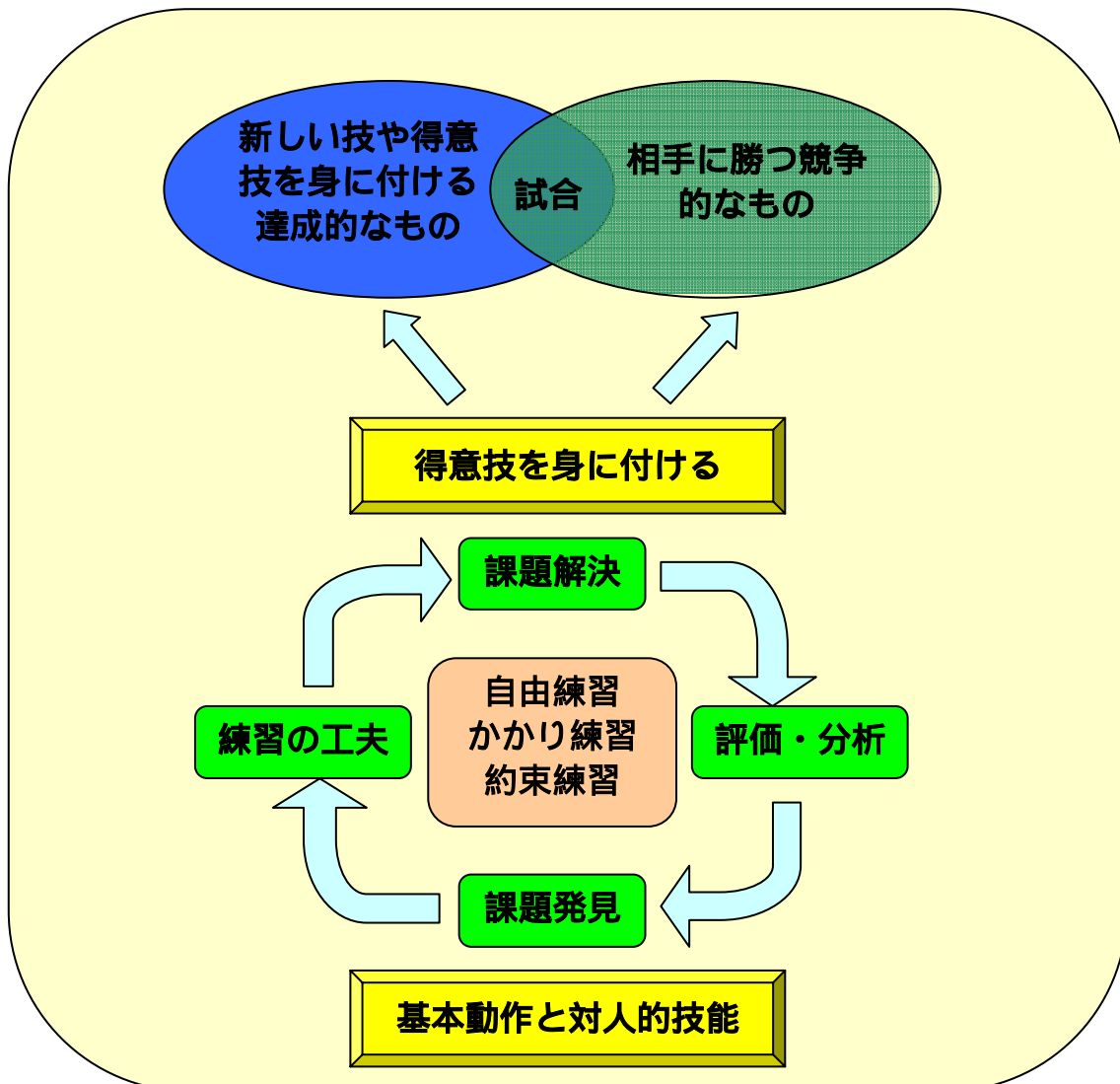


図4-7 学び方の内容 (私案)

武道は、領域として中学校ではじめて示される内容であることから、運動の特性を十分に理解できるようにする必要がある。特に変化する相手と攻防し合うという柔道の特性から考えると、練習や試合の仕方を計画的、継続的に工夫する必要がある。今回の研究における生徒の技能の飛躍的な向上には、1・2年次の学習を踏まえて3年次に学習の工夫をしたことが大きく影響していることから、課題解決型の学習活動をベースに、生徒の実態に合わせて、課題を解決するための教材・教具や学習資料などの学習の工夫をすることが大切であると考ええる。

また、試合などは、新しい技や得意技を身に付けるという達成的なものと、相手に勝つ競争的なものがあるが、可能な限り、両者の関連を図りながら進めることが大切である。

(2) 学習の進め方

図4 - 8は、学習の進め方についての方向性を示したものである。

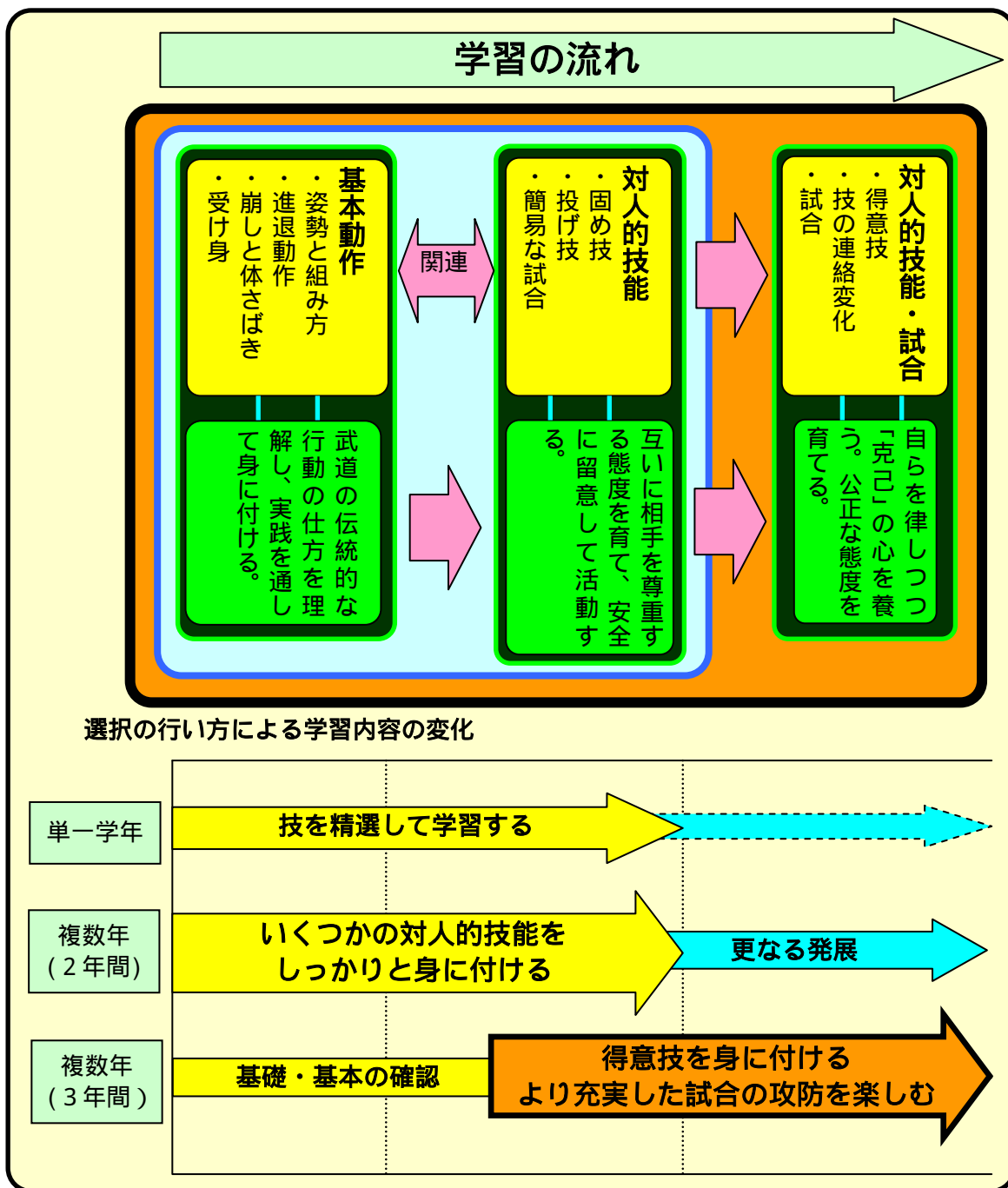


図4 - 8 学習の進め方 (私案)

柔道の学習において重要視しなければいけない点は、技能の内容と態度の内容を合わせて指導していくことである。また、技能の内容と、態度の内容は密接に関連していることから、どの場面でどのような態度を育成するのかしっかりと整理しておく必要がある。

武道は選択領域であり、それぞれの学校の現状や生徒の選択の仕方によって授業の進め方は柔軟に対応する必要がある。技能の学習は、段階的に行う必要があるし、何より安全面から受け身の指導が重要になると考える。3年間を見通した学習の組み立てを考えると、まず、1年次では基本動作をしっかりと身に付けさせたい。また、柔道へ興味関心をもたせることが大切であり、単独での反復練習のみに終始せず対人技能と関連させながら学習を展開し、柔道嫌いをつくらないことが大切である。2年次では、いくつかの対人的技能を身に付ける

段階まで学習させたい。そうすることによって、3年次では、得意技を追及し、試合で攻防を楽しみ、勝敗を競い合うことをねらいとして、授業を展開できるものとする。しかし、生徒の選択の仕方によっては、柔道または剣道を単一学年、もしくは複数学年(2年間)で行う場合もあり、そのような場合は、図に示したように、生徒の実態や単元の時間配分を踏まえて、学習の進度を調節する必要があると考える。特に、単一学年で行う場合でも、学習する技を精選し、簡易な試合を通して相手との攻防を楽しむなどの柔道の特性に触れさせる必要があると考える。

今回の柔道の学習では、生徒たちは、課題学習を基にした、グループ学習によって、教え合いを通して、技の構造を理解し、練習を工夫しながら技能を身に付けることができたと考える。また、友達との関わり合いによって、柔道への関心や自ら運動する意欲が高まったのではないかと思われる。

「生涯を通じて運動に親しむ資質や能力を身に付ける」ことを考えると、柔道の学習では、運動に親しむ資質は、機能的特性の1つである相手との攻防を楽しむという情意体験に触れることによって身に付くものと考えられ、運動に親しむ能力は、課題を解決する力を育むこと、すなわち、課題学習を工夫し充実させることによって身に付くものと考えられる。

さらに、生徒たちは、今は、「学校体育」の枠の中でスポーツを行っているが、将来社会に出て、「さて運動をしよう」と思った時に特に大切なことは、対人関係能力を育むことであると考え。したがって、運動に親しむ資質や能力の育成において、柔道を通して学ぶ「互いに相手を尊重すること」「自らを律しつつ克己の心を養う」ことがとても重要な要素であると私は考える。

【参考文献・引用文献】

- 1) 文部省 『中学校学習指導要領 解説保健体育編』 東山書房 平成10年12月
- 2) 本村 清人 『中学校保健体育科の指導と評価』 暁教育図書 2004年
- 3) 中央教育審議会 『子どもの体力向上のための総合的な方策について』 2002年
- 4) 竹内 善徳 『柔道の視点 21世紀に向けて』 道和書院 2000年
- 5) 学校体育研究同志会 『体育指導法』 ベースボール・マガジン社 1973年
- 6) 内藤 栄一 『運動学習を可能にする脳機能』
<http://square.umin.ac.jp/mbpf/backnumber/10th-abst.htm#3>
- 7) 宇土・高橋・永島・高島 『新訂：体育科教育法講義』 大修館書店 1992年4月
- 8) 木村 清人 『新しい柔道の授業づくり』 大修館書店 2003年6月
- 9) 高橋 健夫 『体育の授業を創る』 大修館書店 1994年5月
- 10) 中央教育審議会答申 『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について第一次答申』 1996年7月
- 11) 学校体育指導者講習会資料 『中学校・高等学校 柔道』 平成14年
- 12) 学校体育指導者講習会資料 『中学校・高等学校 柔道』 平成16年
- 13) 神奈川県教育委員会 『評価資料集 中学校保健体育』 平成17年3月
- 14) 株式会社学習研究社 『中学校体育実技』 2005年
- 15) 岡本 泰弘 「仲間との豊かな関わり合いから運動技能を学ぶ」
『体育科教育』 大修館書店 2002.04
- 16) 稲垣 正浩 『柔道にはなぜ黒帯があるの?』 大修館書店 1991年10月
- 17) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
『評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料』 平成14年2月
- 18) 佐々木武人・柏崎克彦・藤堂良明・村田直樹
『現代柔道論～国際化時代の柔道を考える～』 大修館書店 1993年6月
- 19) 藤堂良明 『わが国における武道教育の系譜』 『体育科教育』 大修館書店 2005.11
- 20) 大塚忠義 「武道教育論再考」 『体育科教育』 大修館書店 1999.02
- 21) 神奈川県立体育センター 『学習評価ハンドブック～指導と評価の一体化を目指して～』 平成17年3月
- 22) 松田恵示 「自ら学ぶ力を育てる学習形態」 『体育科教育』 大修館書店 1996.02
- 23) 宇土 正彦 『学校体育授業辞典』 大修館書店 1995年7月
- 24) 山川 岩之介 工藤 信雄 『柔道指導ハンドブック』 大修館書店 1975年12月
- 25) 児島 邦宏 「なぜ『課題解決学習』なのか」 『体育科教育』 大修館書店 1999.06
- 26) 山口 満 「課題解決力」 『体育科教育』 大修館書店 1998.04
- 27) 渋谷 崇行 「身体運動はコミュニケーション・スキルを高めるか」
『体育科教育』 大修館書店 2004.04